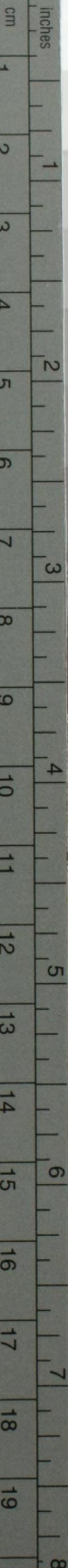
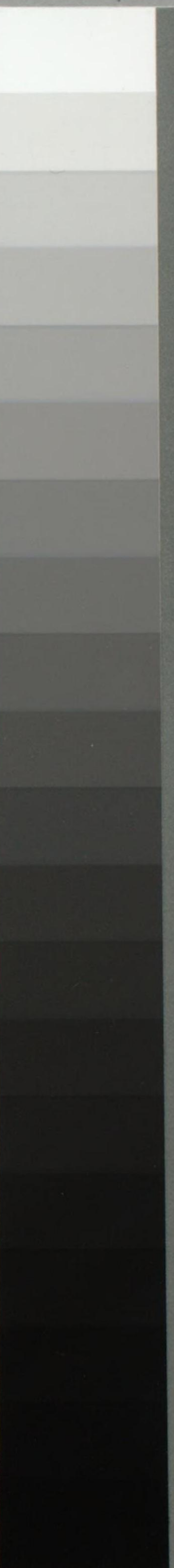


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



020.11
Ko476s



00288696

X
複写

#1

#A E 10

學 誌 書

幸田成友著

慶應通信刊

幸田成友著

書誌學

慶應通信刊



288696

目次

はしがき	(一)
第一章 文字	(三)
第二章 紙	(三)
第三章 天平經	(一九)
第四章 四種の陀羅尼	(三)
第五章 平安朝の寫經と刊經	(六)
第六章 詩文、和歌物語	(四)
第七章 ヲコト點辭書書目	(五)

第八章	春日版	……………	(三)
第九章	高野版	……………	(六)
第十章	五山版	……………	(七)
第十一章	金澤文庫 足利學校	……………	(八)
第十二章	新氣運到來 印刷文化の地方進出	……………	(九)
第十三章	活字版 上	……………	(一〇)
第十四章	活字版 下	……………	(一一)
第十五章	日本耶蘇會版	……………	(一二)

は し が き

近年は英語ビブリオグラフィ Bibliography を譯して書誌學といふが、古い英和字典を見ると、目錄又は書目などと譯してゐる。ビブリオは書物、グラフィは書くこと或は書いたもの、義ですから、新舊の譯字は兩方共正しい。さうして實際からいへば、この字は多年後者の意味に用ひられ、近年に至つて前者の意味にも用ひられるに至つた。結局狹義に用ひられてゐたビブリオグラフィといふ文字が、廣義に用ひられるやうになつたと思へば、それで宜い。然らば廣義のビブリオグラフィは何を取扱ふかといへば、専門家の意見がそれ／＼相違し、決して一致してゐないが、要するに書物全般につき、その謄寫・印刷・挿畫・裝釘・出版・蒐集・保存・書目等を研究する學問であるといへる。

前申す通、ビブリオは書物の義です。西洋でバイブルといふのは單に書物の意味で、學庸論孟を引括めて四書といふ、その書と同一です。それにホーリーといふ形容詞を加へればこそ、聖書と譯されたので、バイブルそのものに聖書の意味は斷じてありません。ビブリオテーク圖書館、ビブリオテカル圖書館員、ビブリオマニア愛書狂等、ビブリオに結付いた文字はまだ外にも澤山あります。

書物箇々についての知識は、多少深淺は兎もあれ、文化人たる者は誰でも持つてゐる。換言すれば狹義のビブリオグラフィについては若干の知識があつても、廣義のビブリオグラフィに關する知識を得ることは容易でない。先輩の著書論文を手引として自分で研究を積んで行くより外に仕法は無い。そこで先づ本邦で出版になつた三四の参考書を挙げよう。

圖書學概論 田中敬 大正十三年 富山房

書誌學とは何か 壽岳文章 昭和五年 ぐろりあそさえて
 書誌學 小宮山壽海 昭和六年 三省堂
 圖書館學及書誌學關係文獻目錄 間宮不二雄 昭和十三年 大阪間宮商店
 本邦書誌學概要 植松安 昭和四年 圖書館事業研究會
 日本書誌學概説 和田萬吉 昭和十九年 有光社
 西洋書誌學要略 橘井清五郎 昭和七年 圖書館事業研究會

第一章 文字

鳥は轉り、獸は明える。言語を使用するは獨り人間のみである。人間の進歩の道程において、言語の使用は一大段階をなすものと言ふべきである。然し言語は一たび發すれば消えてしまふ。自分の思想や感覺を後世に残さうとすれば、文字に頼らざるを得ない。さすれば文字の發明も亦人間の進歩の一大段階である。

文字の起原は畫である。人間は身振によつて或意味を示し得る如く、畫によつて或實體を表し得る。自分は往年西班牙を旅行した時、北岸サントンデル市で一旦下車し、附近にあるアルタミラ Altamira の洞窟に立寄り、其處に描かれてある石器時代の動物畫を觀賞した。野牛・馴鹿・野馬等現在同地方に見られない動物が、名も知れぬ未開人によつて描かれ、然もその色彩の現實的なこと及び筆勢の奔放なること、毫も近代の名家巨匠に比して遜色なしと感服した。尤もこれは異例であるが、古くから未開人が略畫によつて或實物を示した例は澤山あるのみならず、現在も尙亞米利加印度人やエスキモー人の間に行はれてゐる。是等の略畫或は符號ともいふべきものをピクトグラフィス Pictographs 表形といふ。表形は滅び易いものであるし、また現在残つてゐるものが、すべて解釋されるとは言へない。何を意味してゐる表形か、今の我等に不明なものもある。

表形が更に發達すると實體の無いものをも示し得るやうになる。之をイデオグラムス Ideograms 表意と呼ぶ。最も古く世界各地に發達したのはこの表意的の文字である。例へば耳を描いて聞く意味に用ひ、太陽を描いて晝の意味に用ふる類である。但し人間の住居や思想が複雑となるに従ひ、それを示すために新しい表意文字がドシ／＼作られて行くから、その全部、否各自が必要と認める分を了解するだけでも大仕事で、アルファベットを用ふる西洋人と漢字を用ふる我等と、此處に大き

な間隔があり、便不便があると思ふ。

漢字の本来本元である支那で、文字の議論の喧しいのは當然だ。文字を知らなかつた太古の民を結繩の民といひ、上古結繩而治、後世聖人易之以書契」と言つてゐる。上古の人民を結繩の民と稱し、文字を書いた書附を書契と稱すといへば、それでこの文章の意味は一應通じるが、繩の一端を結んで玉を作り、それで一二を數へた所、それが文字を書いた割符と變つたといへば、一層意味深くなる。割符は英語でタリー Tally といふが、自分はその實物をロンドンの記録局 Public Record Office に見て、人間の進歩の段階が東西相一致するのに驚いた。

文字は果して蒼頡が作つたものか、文字の起原は包犧の畫いた八卦であるか、我等は支那にさういふ古傳説があると聞いて置けば宜い。然し後漢の許慎が唱出した説文セツモンについては一考する要がある。許慎は西紀二世紀の初の人、説文解字十五篇を著し、漢字製作の原則を論じて六義の説を立て、十世紀の初後唐の徐諧がその順序を改めて左の如くにしてから、爾來之を研究する學者が甚だ多く、清朝になつて段玉裁の説文解字注の如き名著が出てゐる。

(一)象形 前述のピクトグラムに當る。形のあるものをその形に象つて表現したもの。即ち日、月、山、水等。

(二)指事 前述のイデオグラムに當る。ピクトグラフを應用して形の無いものを示す。視而可識、察而見意とは甘く説明したものだ。即ち一二三三、左右、上下の類。

(三)會意 二字若しくは二字以上を合してその義を取る。即ち明、林、信、武の類。

(四)形聲 二字を合せ、一方で音を示し、他方で義を示す。例へば門の下に口を入れて問とし、耳を入れて聞とする類。この類は甚だ多い。

(五)轉注 同じ文字を用ひて意味を異にし、また意味を同じうして文字を異にす。例へば前者は樂、樂、惡、惡の類、後者は考、老の類。

(六)假借 發音を主としてそれを示す文字を假借すること、丁々、麟々の類。この例比丘、菩薩等外國語の翻譯に多い。

六義によつて、何萬といふ漢字全部が悉く解釋せられるとは言へまいが、支那における説文學者の研究には、傾聴すべきものが多いと聞いてゐる。西洋人は一口に支那を象形文字の國だと評し去るが、前述の(四)に屬する文字の如きは、確にフォネチック・ライティング Phonetic writing 即ち音標文字です。

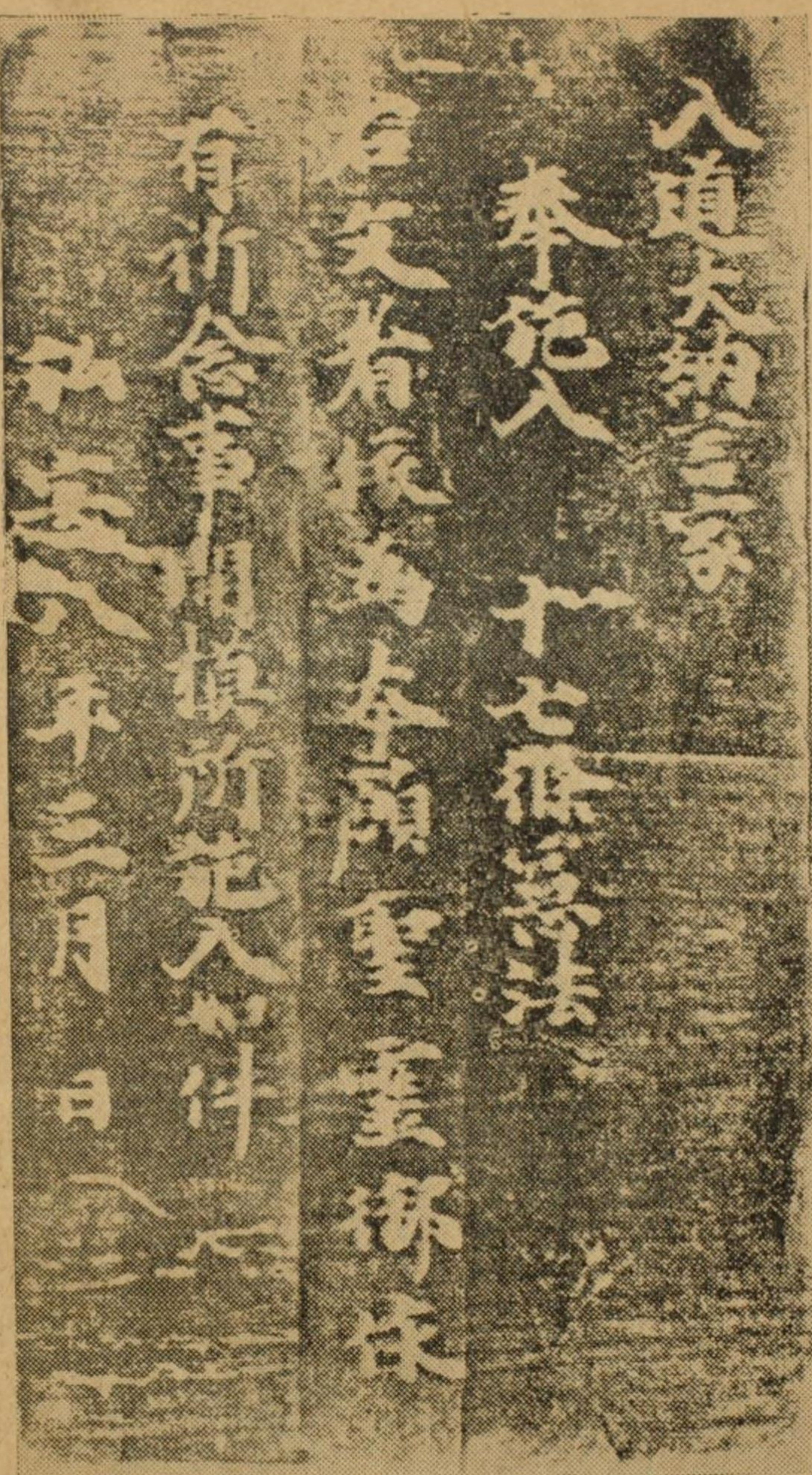
残念ながら上古の日本人は文字を有しなかつた。齋部廣成が大同三年に上つた古語拾遺の序に、蓋聞、上古之世、未_レ有_二文字、貴賤老少、口口相傳、前言往行、存而不_レ忘云々とあるので、立派に證明せられる。文字が無いから、記録に残して後世に傳へることが出来ない。そこで朝廷では語部カタリベと稱する一部の人々を置き、記憶して置かねばならぬ必要事件を、口から口へ傳へしめたのである。徳川時代になつてから、上古日本に文字ありとし、その例として日文とか、天名地鎮とか、秀眞ヒコマコとか稱する怪しげな文字を引用する二三の學者も出たが、奇論僻説一笑に附して可なりだ。

言葉がありながら、之を記す文字を持たぬ我々の祖先が、漢字あることを知つた時、直ちに之を學習して現在及び將來の用に供へんとしたことは想像に難くない。さうして彼等の熱望を満足せしむべく、漢籍を輸入し、學者を派遣してくれたのは、古來日本と縁故の深い朝鮮半島の人々であつた。應神天皇の朝百濟の阿直岐及び王仁が相尋いで來朝してから、推古天皇まで約三百年の間に、本邦に渡來した五經・醫・易・曆博士の氏名は相當數に上り、輸入せられた書物も王仁が齋らした論語千字文以外に多數あつたらう。さうしてこの間に佛敎の傳來するあり、邦人の吳(支那南方)に往復するあり、推古天皇十五年朝廷大使小野妹子を隋に遣るに及び、日支兩國正式の國交初めて開け、此の如きもの約三百年の後、使節の派遣交換は止んだが、私的の交際は依然として絶えなかつた。推古朝は實に印度及び支那の二大文明が赫灼たる光明を本邦に放つた第一期といへる。

文字が無い時代に語部があつたやうに、漢字漢文が朝廷に重用せられる時代において、それ等を能くする朝鮮人、支那人、

若しくはその子孫(史部は阿直岐の子孫、また文首は王仁の子孫)が登庸せられて、公務を遂行したのみならず、本邦上流社會の人々は先を争つて漢字漢文を學習したに相違ない。應神の朝皇子菟道稚郎子が阿直岐・王仁を師とし、推古の朝聖徳太子が僧慧慈を師として學ばれたが著しい例である。

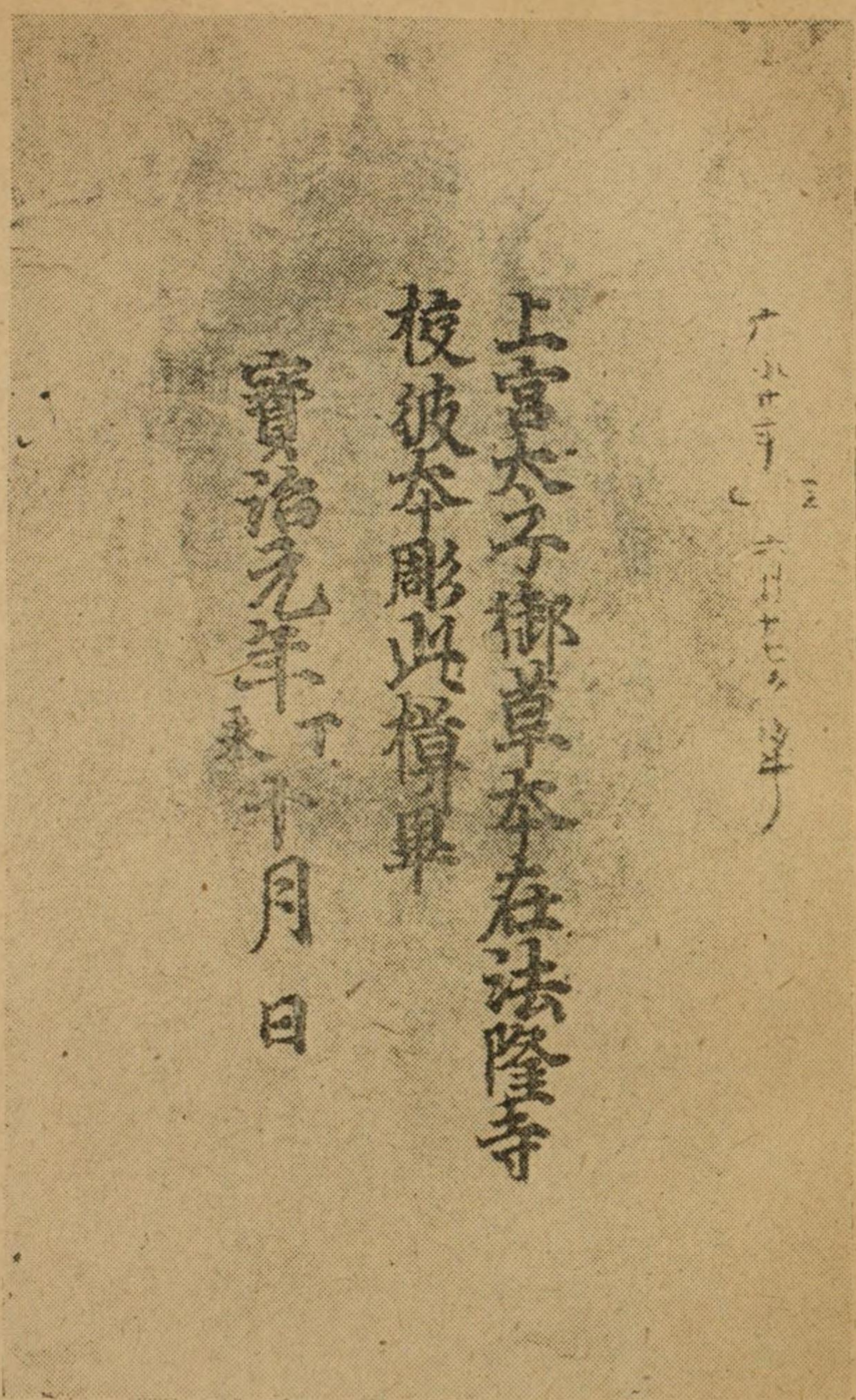
太子が憲法十七條を判定せられたこと、四天王寺・法隆寺・中宮寺・橘寺等七大寺を創建せられたこと、勝鬘經を講説せられたこと、また法隆寺舊藏太子の御自筆と稱する法華義疏四卷が、現在御府に收められてゐること等、太子と同時代の過去の史料及び現存の遺物により、廣い意味の日本の文化が、太子に負ふ所大いなるは多言を要すまい。



第一圖 法隆寺所藏十七條憲法寄進文(二分の一)

十七條憲法の最古の抄本で現存するものは京都大原三寺院所藏の卷子本であらう。それには「承安三年三月廿二日甲爲過去父母妻子等成佛得道(終書寫功了)」といふ識語がある。また版本で一番古いのは法隆寺所藏の分で、本文は幾度となく印刷せられたため、摩滅闕損が甚だしいが、版本の末端に陰刻した寄進文

は美事に現存してゐる。文中開模とある模は版本のことです。



第二圖 法華義疏 卷下 久原文庫藏(二分の一)

入道大納言家 奉施入 十七條憲法 右文者依爲本願聖靈御作 有祈念事開模所施入如件 弘安八年三月 日 何故私は法華義疏の傳來を語り、十七條憲法の古寫本及び版本について數十言を費したか。第一古書はその名を存してその實が亡んだものがあるため、後世に至つて偽作せられることが間々あるから、眞偽の辨別

が肝要であること、第二真正銘の書物ではあるが、流傳久しきに互り、誤謬が次第に多く混入するから、成るべく古い寫本古い刊本を見るが宜いといふことを、諸君に御注意したいからです。然し刊寫年代の新古に正比例して、誤謬が増減するとはいへない。年代の外に、その書物の系統を十分考慮に入れねばならぬ。前掲の法華義疏は寶治元年に印刻せられてゐるが、その跋文に「上宮太子御草本在法隆寺校彼本彫此楨畢」とある。即ち寶治本法華義疏の開版に際し、法隆寺にある太子の御草稿本と對校したといふのですから、現在御府にある法華義疏が太子の御草稿本であることが知られ、さうして法

華義疏と一緒に開版せられた勝鬘維摩二經疏が、太子の御作であることも類推されます。

御府の法華義疏は近年コロタイプ版で複製せられた。私はこの寫真版を拜見しただけですが、それが果して太子の御自筆であるか否やについては明言致しかねます。多くの場合草稿本は著者の自筆本ですが、必ずしも左様とは限りません。又同書に本文と同様の筆蹟で改削の跡があるといふことを以て、御自筆の證とする論者もありますが、これとても本文の筆者を太子と斷定してからの議論です。古寫本の筆者を審定するには、確にその筆者の自筆であるといふものと對照するより外に方法は無い。太子の御筆蹟で萬人が正真正銘疑なしと認めるものが、他に無いとすれば、この方法によることは出来ません。古寫本には能く時代寫といふものがありますから、餘程注意せねばならぬと存じます。

太子と縁故のある貴重な遺物で、而も書誌學に關係するものが二三法隆寺に現存するので、その説明を閑却することは出来ない。同寺金堂の中央に南面して置かれた釋迦佛の後背銘と、その東にある藥師佛の後背銘とである。後者には推古天皇丁卯歲^{十五年}天皇及び太子が、用明天皇の御遺詔を奉じて敬造せるものなることが、また前者には同天皇癸未歲^{三十一年}二月廿二日太子登遐、翌月王后王子諸臣等が尊靈御菩提のために佛師鞍作鳥^{クラクワシトリ}をして敬造せしめたことが記されてある。文字を書寫し若しくは印刷する材料として、紙は最も適當なものであるが、水火の難に罹り易い。之に反して金石に彫刻することは作業こそ困難であれ、保存永續の點においては遙かに紙に勝る。故に金石文は古くから埃及・シナイ半島・支那等で行はれてゐる。バビロニア人及びアッシリア人が楔形の文字を刻んだといふより寧ろ刺したといふべき粘土版も、支那で甌といふものも、皆金石文の中に入る。日本の金石文は支那に比すれば少いが、その少い中に推古朝の造像記が二つまで法隆寺に現存してゐるのは大きな誇である。

法隆寺の傍に中宮寺といふ尼寺がある。同寺所藏の天壽國曼陀羅^{マントラ}と稱するものは、法隆寺の舊藏で、元來二張あつたといふ。現在は人物・動・植物等を刺繡した數寸に足らぬ織物の斷片を寄集めたものに過ぎぬが、もとは背に四文字を刺繡した龜が百あつて、その文によると、聖德太子の薨去により妃橘^{タチバナノキナハラ}大郎女は深き憂に沈み給うた。推古天皇これを憐み給ひ、太子が天壽國即ち天上の樂園に生活したまへる狀を采女等に命じて刺繡せしめて、妃に與へられたといふ。佛蘭西にベイヨ^{Bayeux Tapestry}と云つて、一〇六六年ヘスチングスにおけるハロルド王戰死の狀を寫した刺繡がある。年代に若干の遲速はあるものゝ、東西の雙璧と稱すべきであらう。

我等が少年の際英語を學習するに當り、先生は讀方としては所謂棒讀法^{棒読み}をとり、本文の首から一字づつ順次讀下したが、譯讀となると、先づ直譯といつて、本文の順序を轉じて、一字づつの譯をつける。然し直譯では意味が通じかねる場合が少からずあるので、先生は再びそれを日本文に近いものにして教へてくれた。これを意譯又は義譯といつた。先生にとつても生徒にとつても随分困難迷惑であつた。

さう考へると今から九百年一千年以前、日本人が漢文を學習し始めた時の師弟の困難も想像せられる。漢字には音を同じうして義を異にし、義を同じうして音を異にするものが殊に多い。彼等は彼等の知つてゐる簡単な漢字を利用して、新に學習せんと欲する漢字の傍に、その音訓を註記して遺忘に備へ、更にその勞を軽くせんため、註記に用ふる漢字の偏傍を以て漢字そのものに代へるに至つたことは想像に難くない。これが我が國における假名の起原であらう。

平假名の字體は今日殆ど一定し、えはえ、こはことなつた。偶々江の略の江、古の略の古を使はうとすると、印刷職工からそんな變體假名は御免を被りますと斷つてくる。後者を變體假名といへば、前者を正體假名と思つてゐるのであらうが、そんな區別が何時如何なる箇人又は團體によつて規定せられたか、可笑しな話だ。自分等が幼年の砌に學んだ文部省編纂の小學入門に使用してある平假名は、今日の平假名と同じ字體であるが、當時の新聞紙には今日變體假名と稱するものが可成多く使用せられてゐた。少しく遡つて徳川時代になると、版本は勿論寫本において、文學に關するもののみならず、庶民必讀の御觸書の類においてすら、變體假名が盛に用ひられ今のし・に・は・ほ・わは殆ど出て來ず、え・か・す・た・な・ゆ・れ

ア	阿音	片假名	あ	安音	平假名
イ	伊音		い	以音	
ウ	宇音		う	宇音	
エ	江訓		え	衣音	
オ	於音		お	於音	
カ	加音		か	加音	
キ	幾音		き	幾音	
ク	久音		く	久音	
ケ	介音		け	計音	
コ	己音		こ	己音	
サ	草音	散音	さ	左音	
シ	之音		し	之音	
ス	須音		す	寸音	
セ	世音		せ	世音	
ソ	曾音		そ	曾音	
タ	多音		た	太音	
チ	千訓		ち	知音	
ツ	川訓		つ	川訓	
テ	天音		て	天音	
ト	止訓		と	止訓	
ナ	奈音		な	奈音	
ニ	二音		に	仁音	

ヌ	奴音		ぬ	奴音	
ネ	柵音		ね	柵音	
ノ	乃音		の	乃音	
ハ	八音		は	波音	
ヒ	比音		ひ	比音	
フ	不音		ふ	不音	
ヘ	反音		へ	反音	
ホ	保音		ほ	保音	
マ	万音		ま	末音	
ミ	三訓		み	美音	
ム	牟音		む	武音	
メ	女音		め	女音	
モ	毛音		も	毛音	
ヤ	也音		や	也音	
ユ	弓訓		ゆ	由音	
ヨ	與音		よ	與音	
ラ	良音		ら	良音	
リ	利音		り	利音	
ル	流音		る	留音	
レ	禮音		れ	禮音	
ロ	呂音		ろ	呂音	
ワ	和音		わ	和音	
キ	井訓		き	爲音	

第一章 文字

ぬ	努音		ぬ	怒音	
ね	年音		ね	能音	
の	能音		の	之訓	
は	者訓		は	八音	
ひ	飛音		ひ	飛音	
ふ	婦音		ふ	布音	
へ	遍音		へ	遍音	
ほ	本音		ほ	本音	
ま	万音		ま	滿音	
み	三訓		み	三訓	
む	無音		む	舞音	
め	免音		め	免音	
も	裳訓		も	母音	
や	屋訓		や	屋訓	
ゆ	遊音		ゆ	遊音	
よ	羅音		よ	羅音	
ら	羅音		ら	羅音	
り	里音		り	里音	
る	累音		る	梨音	
れ	連音		れ	流音	
ろ	路音		ろ	路音	
わ	和音		わ	和音	
を	爲音		を	爲音	
を	王音		を	王音	
を	梨音		を	梨音	
を	類音		を	類音	
を	李音		を	李音	

も少い。更に遡つて足利時代若しくはそれ以前の古寫本古版本を見ると、漢字の音訓が平假名片假名混用で註記せられてゐる。さうして見れば、假名は平假名も片假名も漢字の偏傍を略して作つたものには相違ないが、最初から平假名片假名の間に整然たる區別があつたものとは思はれない。上掲の表によれば同音の平假名及び片假名で、その起原である漢字を同じうせるものが若干ある。片假名を吉備眞備、平假名を弘法大師の作とする傳説は、毫も信用するに足らぬと思ふ。

片假名及び平假名が漢字の音又は訓を根源とし、その字畫をどう省略して作られたか、新井白石・伴信友・岡田眞澄・森立之等多數の學者の一致する所を表に作つて見た。然し現在の活字印刷では普通の片假名片假名でさへ、その起原の漢字を如何に省略したものなるかを指示することが出来ぬ。讀者は宜しく假名と漢字とを對照熟視せられたい。況や變體の平假名に至つては、假名そのものをも印刷することが不可能で、たゞその起原たる漢字を擧ぐるに止つたは、かへすゝも遺憾である。

要するに假名の字體は古來種々の變化を経て今日に至つたものである。その變化—平安朝の初期から足利氏の末期に至るまで—を現存の古寫本古刊本五十種に記入せられた假名から拾集して一覽表を製せられた大矢透氏の苦心は、吾人の推稱措かざる所である。五十種中第一に引用せられたは神護寺所藏の沙門勝道歴山瑩玄珠碑で、作者空海と同時代ならずとも相距ること遠からざる時代の抄本で、訓點中最古のものとして尊重せざるべからずと言はれてゐる。但しこれは假名の字體が使用されてゐる最古の標本の意味で、假名が平安朝に始つたといふ意味ではない。漢字の音訓をそのまゝ用ひて假名に宛てたこと、例へば阿をア、伊・夷をイ、有・汗・宇をウ、意をオに宛てた類が、推古朝の遺文にあることは、同氏の假名源流考及證本寫真に見える。

エ 惠音	多 惠音 □、衛音
ヲ 乎音	を 遠音 □、越音 □、乎音
ン 二音*	ん 人音*

この外二合と稱し、假名二字を合したものである。ノシテ爲 コト事
伝ト云 寸トキ時、片トキ 片トモ エナリ也 ムヨリの類をいふ。
 また疊字と稱し、ムトマを以て前の文字の重なつてゐることを示してゐる。

参考書

文教温故 山崎美成 二册 文政十一年
 文藝類纂 榊原芳野 八册 明治十一年 文部省 字志・文志・學志・文具志各二册より成る。書誌學研究者必讀の書として推薦する。
 同文通考 新井白石 四册 寶曆十年序(新井白石全集第四册)
 假字本末 伴信友 三册 嘉永三年(伴信友全集第三册)
 假字考 岡田正澄 二册 文政五年
平かないろは字原考 森立之 明治七年
 假名遣及假名字體沿革史料 大矢透 明治四十二年 帝國學士院
 假名源流考及證本寫眞 大矢透 二册 明治四十四年 國語調査會
 假名の研究 大矢透 昭和八年 啓明會紀要第五
 古京遺文 狩谷掖齋(隨筆集誌 明治二十五年、六年)
 同 山田孝雄増補 大正元年 寶文館記念出版(日本古典全集第二期)
 法王帝說證注 狩谷掖齋 明治四十三年 裳華房記念出版(日本古典全集第二期)
補上宮聖德法王帝說證注 平子尙補校 大正二年 丙午出版社
 觀古雜帖 穗井田忠友 天保十三年序(日本古典全集第三期)

第二章 紙

文字と文字を記す材料との間に大きな關係のあることは言ふまでも無い。文字を記す人及び讀む者の側からいへば、材料が豊富であること、文字を記すことが容易であること、久しく保存に堪へること、閲讀の容易なること、移動の輕便なること等種々の希望があらう。古代各國で用ひられた材料即ち木・竹・麻布・帛・骨・皮・金・石等は多寡はともあれ希望條件の一部分を充たすに止つたが、紙の發明によつて、殆ど全部が充たされたと言つて宜い。

紙を英語でペーパーといふ。その語原はパピラス Papyrus から出ている。これは往時ナイル河畔に簇生した昔屬の一種で學名を Cyperus Papyrus と云ふ。パピラスを製するには、先づその幹を十六吋位の長さに截斷し、髓を細い紐狀に裂き、一本一本順々に平に並べ、今度はそれと直角に一本一本を並べ、縦横十文字になつた二つの層をゴムのやうな液體によつて密着せしめ、壓をかけたり、叩いたり、日光に當てたりして乾かした上、象牙や貝殻で磨き、表面を滑つくくする。これが支那や日本における紙に相當し、埃及では紀元前三五〇〇年頃から用ひられた。この植物は需要が廣いのみか、その根は乾して燃料とし、纖維で繩を作り、莖を屋根とし、束ねて輕い筏とし、飢饉の時にはその芽を食つた。パピラスの收穫は埃及人の生活に大影響があつたのである。タイグリス、ユーフレイチス河の流域にパピラスは生へぬ。それ故パピロニア人、アシリヤ人は針を以て粘土版に楔形の文字を刺した。また小亞細亞のペルガム市 Pergamum で羊・牛・驢馬等の獸皮に加工し、これを書寫用に供することを發明したのは、同市と埃及と隙を生じ、埃及からパピラスの輸入が絶えたからである。ローマ人はこの獸皮を市の名によつてペルガメナ Pergamena と稱したが、訛つてパーチメント Parchment となり、四世紀頃歐洲で公式の文書といへば必ずこれに書くこととなつた。貴重品ですから、一旦使用したものを削つて再び使用する、

之をパリンプセスト Palimpsest といふ。日本で紙が貴い時代に、裏書といつて紙背を使用したと同一趣意です。

東洋では佛家の所謂貝多羅葉が、パピラスに類したもので（印度の一部・セイロン・緬甸・暹羅で行はれた）、パピラスほど精巧ではない。一種の椰子の葉を原料とし、錐のやうな鐵筆で文字を刻み、刻目に黑色の液を滲込ました後、餘汁を洗去るのである。貝多羅葉は毎片兩端に穴を穿ち、紐を通して冊としてゐるのが一特長だ。

支那はどうか。支那は特に金石學の發達した國で、金石萃編金石索等斯學に關する名著が少からずある。支那では禹の峴嶼山碑を以て最古の碑石としてゐるが、唐の韓退之が搜索した時に發見されず、明代に至つて出現したといふのは、不審である。周の宣王の石鼓文はもと北京の國子監に保存せられてゐたが、今日は何處にあるか。文字を刻した古銅器の名品の數々あることは佳友家收藏の支那古銅器を複寫した泉屋清賞を一見して想像が附く。それから光緒廿五年以來河南省彰德府附近から文字を刻した龜甲獸骨が澤山出て來て、それ等が殷の代のものであることが明白となり、出土の地點を殷墟と稱するに至つた。

この外支那では竹帛に文字を記した。左傳に「大事書之於策、小事簡牘而已」とある。大事件なら策に書く、小事件なら簡に書くといふ意です。簡は竹簡なりとあるから竹の札で、それを編んだのが策、策は冊に通じ、文字の姿から見ても、何枚かの竹簡を紐で編んだものと解釋せられる、貝多羅葉の兩端に穴を明けて紐を通すのと同じ趣向だ。孔子が易を愛讀して韋篇三たび絶つといふのは、頻繁に竹簡を動かすため、それを綴つた韋が三度も斷れたといふことである。

竹簡を汗簡又殺青といふ。汗は竹の油を去ること、殺青は青い外皮を去ることをいふ。「新竹有汗、善朽蠹、凡作簡者、皆於火上炙乾之、陳楚間謂之汗、汗者去其汁也云々」とある。油を取る意味もありませうが、扁平にする意味もあつたと考へられる。簡に文字を現すには、漆によるか、刀で刻むか、二つに一つで、史記に蕭何を稱して刀筆の吏といふのは、書記の小役人といふ意味です。古代竹簡が廣く用ひられたことは確で、近年トルキスタン地方に漢代の竹簡や木札が盛に發掘せられたと傳へられてゐる。

竹の外に帛が用ひられた。名を竹帛に垂るといふ熟語は能く聞く所です。帛は繒なりとあるから、薄い絹に相違ない。埃及やローマで麻布リネンを使つた例があるから、絹に書いたと不思議はない。然し帛は價貴く竹は重く、雙方不便であるため、元興元年（西暦461年）宣官蔡倫なるもの樹皮・麻頭・敝布・魚網を用ひて紙を製する法を發見し之を和帝に奏上した。即ち後漢書蔡倫傳に、

自古書契多編、以竹簡、其用縑帛者、謂之爲紙、縑貴而簡重、並不便於人、倫乃造意、用樹皮麻頭及敝布魚網、以爲紙、元興元年奏上之、帝善其能、自是莫不從用焉、故天下咸稱蔡侯紙、

とある。紙といふ文字は薄つぺらなものを指す。最初は帛であつたが、蔡倫が今の所謂紙を發明するに至つたと解釋するのが妥當であらう。

文字を記した帛や紙は巻いて藏し、舒べて見る。そこで篇又は冊と言はず巻といふ。さうして是等の文字の意味に古今の差はあつても、書誌學上の用語として西洋では巻物のことを Roll といふが、同じ意味の Volume といふ言葉は、現在は冊の意味に用ひられてゐる。

巻物となれば中心となる軸が要る。軸木だけでは實用には足りても裝飾の意味が缺けてゐる。隋代宮中の巻物類を分つて三品となし、上品は紅瑠璃軸、中品は紺瑠璃軸、下品は漆軸であつたといふ。本邦においても天平時代の經卷中軸の頭に玉や紫檀を用ひたものがある。

巻物になつた書物を卷子本クワンシボといふ。その帙の上に書名が記されてゐたとしても、假に四五十本の卷子本が書棚の上にあつたとすれば、入用の分を取出すことは仲々困難だ。そこで檢出の便を計り、書名を書いた札を附ける。之を籤といひ、その材料として木・金・象牙等を用ふ。よつて金籤玉軸といふ熟字がある。日本では公私の文書を保存するため、木や竹で軸と籤とを連結したものを作り、之を往來と稱し、その籤に當る部分の表裏兩側に文書の名稱や年月を墨書して檢出に便にした。英語で書物の題名をタイトルといふ。その語原はラテン語の Titulus で、これは札の意味ですから、丁度支那日本の籤

に當つてゐる。

傳手に申しますが、紙を數へる時、日本支那では何枚・何丁・何葉といひ、西洋ではフォリオ Folio、プラット Blatt、リーフ Leaf などといふ。いづれも木の葉の一枚二枚から出た言葉で、言葉の自然の發達は東西相類すと言はざるを得ぬ。

漢代に發明せられた製紙術が西漸した徑路は興味ある問題である。一九〇七年英人サー・オーレル・スタインが Sir Aurel Stein が墩煌に近い長城の外面の監視塔にあつた塵芥箱の中から、漢字を書いた木片の多數と、帛に書いたもの一二通と、ソグヂャナ語で紙に書いた九通の書類とを發見した。最後のものは九通共無年號であるが、漢字を書いた分に西紀一三七年以後ものが絶無であるから、ソグヂャナ語で書いた書類の用紙は、蔡倫の發見から五十年以内に製造されたものと認めて宜からう。さうしてスタインの依頼でギーン・キースナー博士が顯微鏡的調査を行った結果、この紙が襤褸を原料とした紙 rag-paper であることが證明せられた。墩煌から西に當る各地で發見せられた紙や紙使用の最初の年號を調べて見ると、樓蘭が二〇〇年、吐蕃番が三九九年、サマルカンドが七五一年、バグダッドが七九三年となる。八世紀の初、回々教徒は露領トルキスタンを席捲し、その時捕虜にした支那人から製紙の術を傳へて、斯業を彼等の勢力範圍に擴大した。即ち一方はバグダッドからダマスカスへ、他方は亞非利加の北岸に渡り、埃及では九〇〇年頃或はそれより少し以前に、モロッコのフェスでは一一〇〇年、西班牙のハチベでは一一五〇年、伊太利のファブリヤノでは一二七〇年頃、獨逸のニールンベルヒでは一三九〇年、英吉利では一四九四年以後に、さうして最後に亞米利加では一六九〇年にフィラデルフィヤで始めて紙を製した。こんな風にして紙は歐米諸國に入つたのであるが、耶蘇教徒から見れば、回々教徒であるアラビヤ人が將來したことが面白くなかつたのであらうか、紙に書いた證書は法律上無効であるといふ獨逸皇帝フリードリヒ二世の命令が、一二二一年に出てる。然し紙の便利は論ずる迄もない。多年埃及で使用せられたパピラスさへ全くその位置を紙に譲つた。歐洲で行はれたパーチメントが紙に對抗し得る筈はない、殊に活字印刷の發明があつてから、紙と印刷とは離るべからざる關係を生じ、紙が印刷を成功せしめ、印刷がまた紙を一般的ならしめた。

支那で竹帛を使用することが紙の發明によつて急に止んだとは思へない。従つて紙が一般に行はれたのは何時からか判然したことはないが、先づ五世紀頃であつたらう。日本では推古天皇十八年三月の條に「高麗王貢上僧曇徴法定、曇徴能知五經、且能作彩色及紙墨、並造碾磑」とあるのが、紙に關する記事の最も古いものである。然しこの文章をみて曇徴が紙墨の創造者であると解しては可けない、紙墨の製法を知つてゐると解すべきである。さうして紙を使用するに至り書寫印刷二つながら著しく進歩したことは日本・支那・西洋各國皆同様である。

日本の紙を大別すると(一)麻紙・(二)穀紙・(三)斐紙・(四)檀紙・(五)宿紙となる。

(一) 麻紙に二様あり、一は麻布を以て作り、一は麻皮を以て作る。換言すれば麻布を切斷して作るのと、麻の纖維を使用するとの二種あり。延喜式圖書寮式に截布何斤何兩、擇麻何斤何兩と記されてゐる。色合よりいへば白・黄・縹あり、縹はハナダと訓じ、淺葱色をいふ。通例詔書には黄麻紙、位記には縹紙を用ふ。寸法は縦九寸内外横一尺五七寸内外なるが、長麻紙といつて三倍以上の長さを有するものもある。寫經の奥書に能く麻紙何十何張と書いてある。これはその寫經に要した紙數で、張は枚に同じ。

(二) 穀紙の穀はカヂと訓む。即ち楮である。寸法は麻紙に同じく、色は茶褐色、寫經の外一般の文書記録に用ひられ、後世の和紙は最も多くこの系統を引き、用途または漉き方の相違により、種々の名稱で呼ばれてゐる。

(三) 斐紙は後世の雁皮紙で、三極から製する。紙質堅く、紙面滑かなるため、細字を書くに適す。寸法は産地により種々あり、惣じて玉子色を呈するを以て鳥ノ子といはれ、厚薄に應じて薄様・中様・厚様の稱がある。平安時代の物語章紙や、金字銀字の寫經の臺紙(紺紙)や、短冊色紙に用ひられる間合も亦斐紙の一種である。

(四) 檀紙はマユミノカミと訓む。マユミの皮から作る。一に陸奥紙と稱するは、多く陸奥から産出したによる。後世に至

り大高・中高・小高の三種あり、縦一尺七寸餘横二尺二寸餘、肉厚く皺高く、堂々たる姿を保ち、禁裏柳營の御料となつた。檀紙の皺なくして肌理美なるものを奉書と稱し、儀式文書類に用ひ、奉書の薄漉で軟かな杉原紙は文書または懐中用紙として用ひられた、一束一本といつて、杉原紙一束五百枚を兩折し、それを束ねて上に末廣一本を載せるのが武家の故實であつた。

(五) 宿紙とは一旦使用した紙を漉返へしたものをいふ。薄墨色であるから薄墨紙、また繪旨に用ひられるにより繪旨紙ともいふ。今俗にいふ淺草紙と使途においては格別の差あれど、製造の趣向は同一である。

以上が奈良朝から足利氏の末迄に見えた紙の種類の大要である。古く支那から紙が輸入せられたことは言ふまでもないが、職員令圖書寮の條に造紙手紙戸の稱が見え、また延喜式圖書寮式に「凡年料所造紙二萬張廣二尺二寸 長一尺二寸」といひ、製紙器具として漉紙槽・洗麻槽・淋灰槽・臼・櫃等の名稱を擧げてあるのみならず、同書主計寮上に紙を貢する國として國名四十を擧げてある。製紙は公私とも盛に行はれたといふべきである。従つて支那から輸入せられるは特殊の紙に限るに至つた。例へば平安朝時代に輸入せられた唐紙、これは紙面に胡粉ゴハンを引き、その上に雲母及び唐草花鳥等の模様が摺出されてゐる。この唐紙の模造品が鎌倉時代に廣く襖紙カウカミに用ひられたので、今襖を唐紙といふのである。

參考書

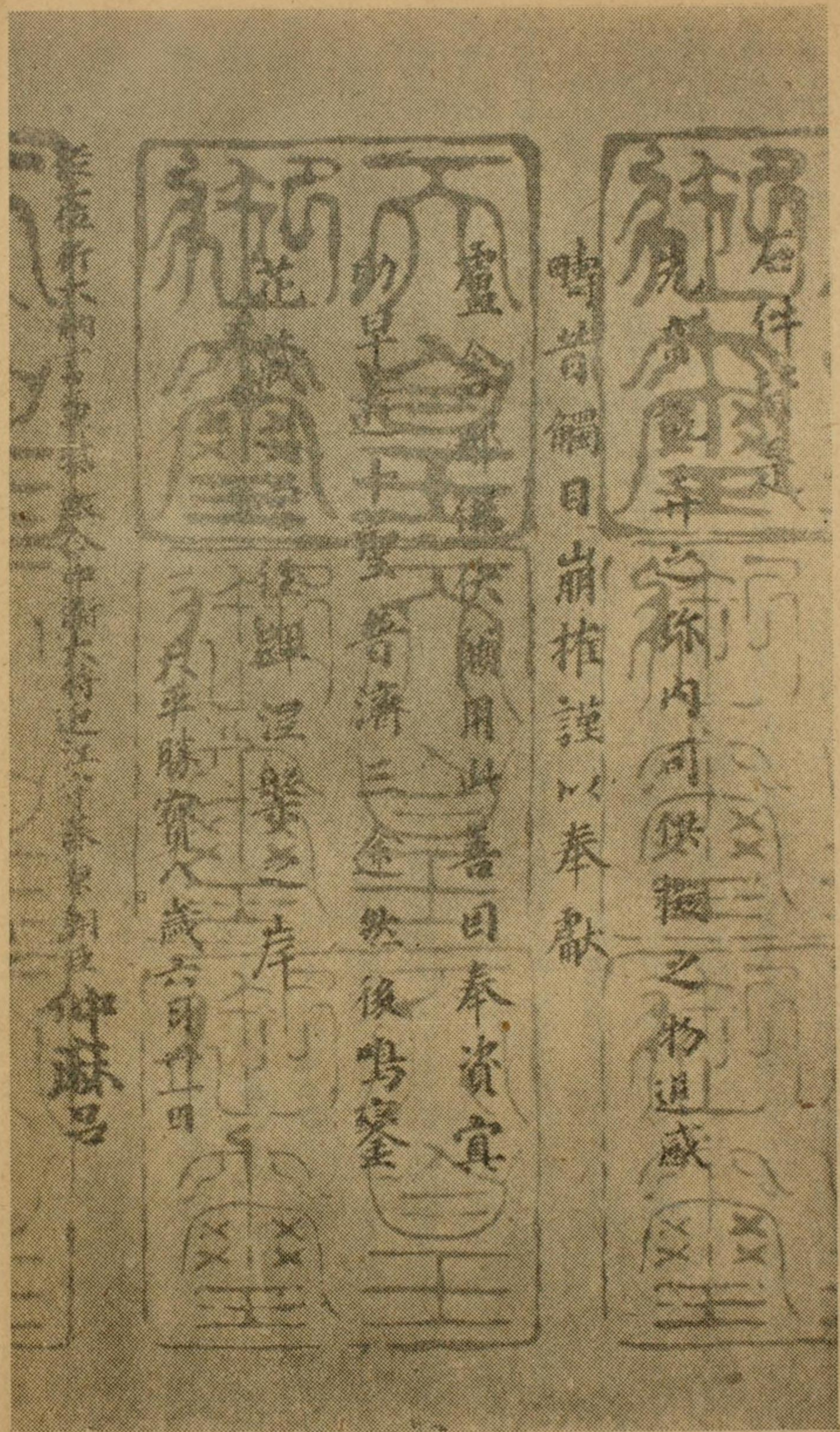
- McMurtrie, Douglas. The Book, New York, 1927.
 Carter, Thomas Francis. The Invention of Printing in China and its Spread Westward. New York, 1931.
 文藝類纂 卷七 文具志上
寫經より 奈良朝佛教の研究 石田茂作 昭和五年 東洋文庫
見たる 紙の西漸 幸田成友 改造六十二卷十二號 昭和十五年

第三章 天平經

推古朝の次に外國文化が著しく光輝を放つたは奈良朝、もう少し年數を限れば天平時代で、さうしてその時代の特徴は、寺院の建築、佛像佛具、殊に東大寺盧舍那の鑄造、經卷の書寫刊行等に表現された佛教文化の興隆であつた。佛家は能く眞俗の二字を用ひ、彼等以外の者を俗家と呼ぶが、俗に屬する經・史・詩・文の典籍も輸入され、書寫されたに相違ないが、之を經卷に比すれば九牛の一毛に過ぎず、況や邦人の著述に至つては寂々寥寥、僅に二三を存するに止つた。

天武天皇即位九年、川島皇子等十二名に詔して帝紀及び上古の諸事を撰定せしめ給ひ、中臣連大島及び平群臣子首親しく筆を執つて之を録したことが正史に見える。他國に對し、自國の認識を一層深くせよとの大御心から出た結果として、自分は之を事實と信するが、不幸にしてその書は傳はらない。現存する日本の史籍は古事記三卷日本書紀三十卷の二部あるのみである。前者は元明天皇の和銅五年太安萬侶が稗田阿禮の口述する所を筆録したもの、また後者は元正天皇養老四年の撰上で、舍人親王を總裁に、太安萬侶を主任とし、前後八年を編纂に費したとある。兩書とも全部漢字を使用してゐるが、記には往々國文を交へ、單に音訓を寫すために漢字を用ひた場合があり、紀は純粹の漢文ではあるが、字句に拘泥して事實を失へる弊が無いとは言へない。記の寫本が名古屋市眞福寺所藏應永四年同五年僧賢瑜の寫せるものを最古とせるに反し、紀には京都田中勘兵衛氏所藏の應神紀を最古とし、岩崎家の推古紀・皇極紀、前田家の仁德紀・繼體紀・雄略紀、その外北野神社・向神社・熱田神宮・桃木武平氏・御巫清白氏等の所藏で、平安朝から應永前後までの古寫本が十種以上もあることは、兩書流布の廣狹を示唆するに足る。記が現在の如く一般に讀まれるやうになつたは、徳川氏中期以後に於ける國學者の推輓によるものと言はざるを得ない。

天平文化の遺物中、書誌學に關係あるものを最も多量に收藏せるは奈良の正倉院と法隆寺とである。正倉院はもと東大寺に屬し、初は南北の二倉より成り、後に中間に一倉を加へて三倉一棟となつたもので、桁行十八間餘、梁行五間餘、高さ五間、床下九尺あり。床の高きは庫内に濕氣の滲入するを防ぐ用意なるに相違なからんも、これが爲に焼亡の厄を免れたることは、



第三圖 東大寺獻物帳(二分の一)

地上に
面せる
床板に
焼痕を
見る我
等の先
づ戦慄
し、尋
いで感
激する
所であ
る。天
祐神助
三倉に
收めら

れた御物は、日本の至寶としてまた世界の至寶として、永に瞻仰せらるであらう。

正倉院御物は、天平勝寶八年六月廿一日から天平寶字二年十月一日に至るまで前後五回に、光明皇后及び孝謙天皇より盧舍那佛に奉獻せられた聖武天皇の御遺物・藥種・二王(玉義之・王獻之)の書卷・藤原不比等の書屏風等を主とし、その目錄は東大寺獻物帳に明細に見える。中には後日倉庫より御取出しのまゝ、還納せられざるもあれど、それと反對に獻物帳掲載以外に今日倉庫に收藏せられてゐるものも夥しい。二三の實例を擧げて之を示さう。

雜集 一卷 白麻紙 紫檀軸 紫羅縹 綺帶

右平城宮御宇 後太上天皇御書

孝經 一卷 麻紙 瑪瑙軸 滅紫紙縹 綺帶

右平城宮御宇 中太上天皇御書

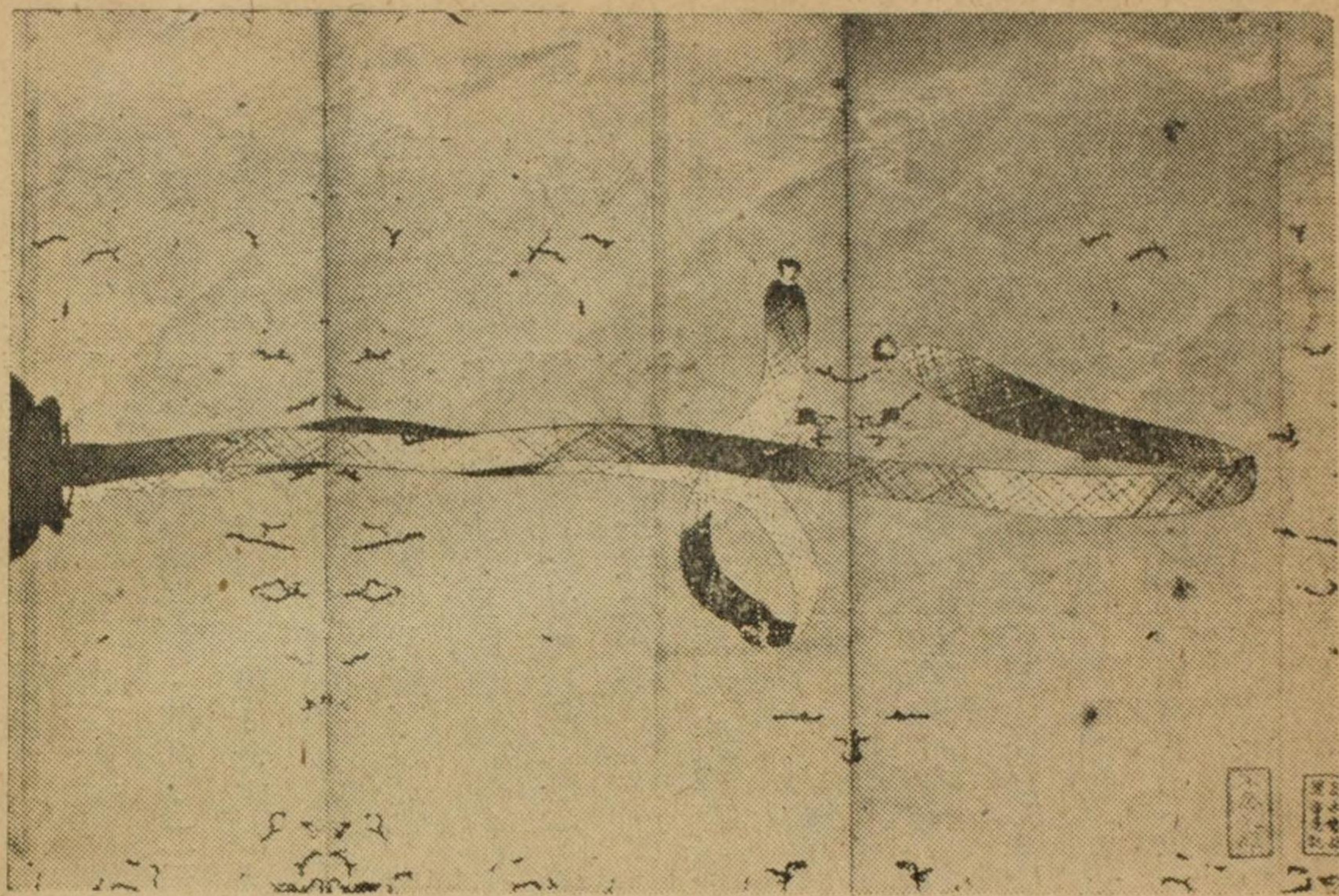
頭陀寺碑文並杜家立成 一卷 麻紙 紫檀軸 紫羅縹 綺帶

樂毅論 一卷

右二卷皇太后御書

以上は書名・卷數・筆者・用紙・軸・縹表・帶紐を列擧した獻物帳の一部で、執筆者であらせ給ふ平城宮御宇後太上天皇は聖武天皇、同中太上天皇は元正天皇、皇太后は光明皇后を申し奉る。この中右傍に、點を施した分は現存し、然らざるものは傳はらない。さうして現存の分は古く印刷局で出版した寫真石版により、また近年佐々木信綱氏複製の扶桑珠寶により拜察することが出来る。樂毅論は短篇ではあるが卷末に「天平十六年十月三日藤三娘」と記されてゐる。藤三娘は藤原氏の第三女の義で、光明皇后を不比等の二女とする説は、この御署名により成立しなくなる。

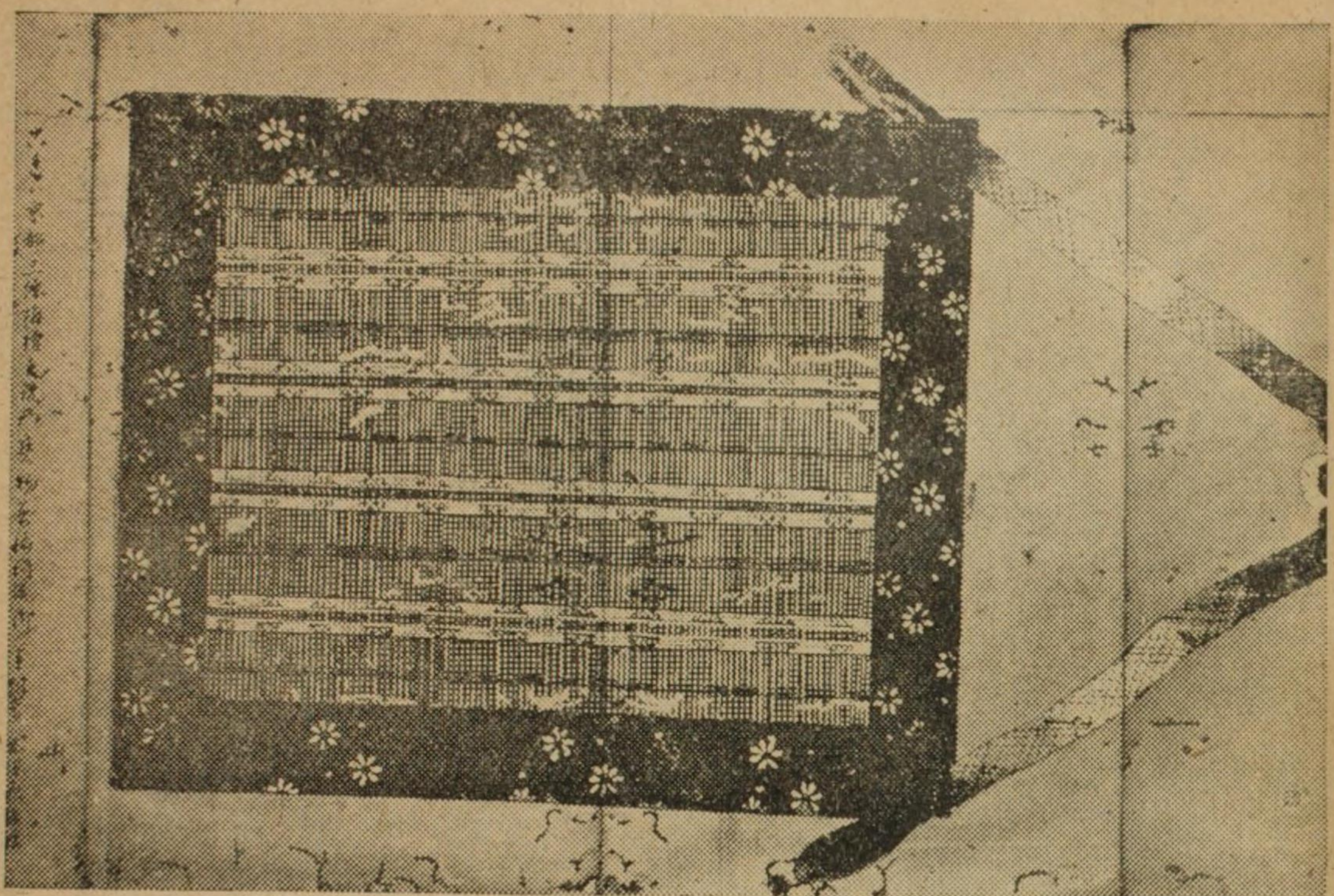
中倉の階下には書誌學關係の資料が多々ある。銅版詔書・竹帙・詩序・筆・墨・硯・紙等枚舉に遑あらず。銅版詔書は一面、



(五分の一)

に菩薩戒弟子皇帝沙彌勝曼去る天平十三年國毎に國分寺及び尼寺を造らんとの大願を發せしが、天平勝寶五年大佛殿の造營已に畢つたるを以て、その功德により君臣和順國家萬歲の本願疑あるべからずとの意味を記し、他面には東大寺に封五千戸水田一萬町を寄せたまへる旨を記し、最後に天平勝寶元年平城宮御宇太上天皇法名勝滿とある。勝曼また勝滿は聖武天皇の御法號です。竹帙は細い竹を色糸で編んだ簾の四邊を錦繡で包んだもので、經卷を開く時はその上に置き、又經卷を閉じた時之で巻く。さうして帙内の經卷の書名を知るために經名を記した籤がついてゐる。竹帙計六枚中、一枚は聖武天皇が國分寺の七重塔に頒布せられた金字の最勝王經の帙で、帙の上に「天下諸國、每塔安置、金字金光最勝王經、依天平十四年、歲在壬午、春二月四日勅」との三十二字が、十六字づつ帙の上に織出されてゐる。惜しい哉中味の經卷は無い。筆は計十七管、軸及び筆帽は竹であるが、筆帽は恰も閉じた雨傘の骨の様に見える。筆鋒は雀頭といつて、雀の頭のやうに短い。その筆端に墨を含ませて書くから勁い字體となるのだ。墨は唐墨で中央部が凹んでゐる。長崎名産のからすみはその形状がこの唐墨に似てゐるからの稱呼であらう。紙の中で吹繪紙一卷三

第四圖 竹帙圖



十張の中、紙上に禽獸草花模様が白く抜けてゐるものが十七張ある。紙上に型紙を置き、繪具を融かした水を口中に含んで吹いたものであらう。縦九寸八分横一尺三寸五分。色麻紙は一卷百張内外で計十九卷、縦九寸餘横一尺五寸餘ある。

詩序とあるは王勃集の一部で、色麻紙廿九張、朱軸紙標の卷子本で、卷尾に「慶雲四年七月廿六日」とあるといふ。生憎自分の所持する印刷局複製本は最後の一篇を缺いてゐるので、明言しかねるが、若しその年月に書寫されたとすれば、現存日本人最古の鈔本といへる。王勃集はもと三十卷あつたが、本篇の外、卷二十八、二十九、三十の三卷が本邦に存在してゐる。但しそれらは支那人の手に成る古鈔本と認められてゐるだけ、本篇は一段と珍重すべきである。

御物中分量の最も多いものは、正倉院文書と聖語藏舊藏の經卷類とである。文書といへば通例一紙を通例とし、長文なりとも數紙に止るものと合點する人々もあらうが、正倉院文書は之と異なり、天平十二年遠江國濱名郡租帳は麻紙八十張より成る卷子本であり、また東大寺山堺四至圖は長九尺八寸五分幅七尺三寸の大圖である。天保四年の御開封に際し、民間の穂井田忠友が文書整理

の大任に當り、正集四十五卷を編纂したを發端とし、維新後屢々之を繼續し、明治三十八年に至つて漸く完結した。通計七百七十九卷、細分すると正集四十五卷・續集五十卷・續集後集四十三卷。續集別集五十卷・塵芥集三十九卷・續々集四百四十卷・東南院文書百十二卷となる。それを更に整理して東京帝國大學史料編纂掛から發行した正倉院文書は二十二卷まで出てゐる。聖語藏といふは東大寺内の尊勝院の經藏で、維新後正倉院境内へ移轉せられたものである。庫中の經卷は隋經二十二卷・唐經二百二十一卷・天平の願經七百五十一卷・景雲經七百四十二卷を主とし、その他の古寫經古版經を合して計四千八百卷に上る。偉なりといふべしだ。

願經とは個人または團體の發願により、刊寫奉獻した經卷を指すのであるが、天平の願經といへば、直ちにそれが天平十

十輪經卷第三

皇后藤原氏光明子奉為
尊者贈正一位太政大臣府君
姓贈從一位橋氏太夫人敬寫一切
經論及律莊嚴既了伏願憑斯勝
因奉資冥助永莊菩提之樹長延

(久原文庫藏)(二分の一)

二年五月一日光明皇后の寄進したまへる一切經であることを人々が了解する程、それ程有名なものである。謹んでその跋文を拜讀しよう。

皇后藤原氏光明子、尊者贈正一位太政大臣府君、尊姓贈從一位橋氏太夫人、敬寫

般若之律又願上奉 聖朝恒延
福壽下及寮采共盡忠節又光
明子自發誓言弘濟沈淪勤除障
障妙密諸法早契菩提乃至傳燈
無窮流布天下聞名持卷願經
空一切遠近會歸覺路

第五圖 天平の願經

一切經論及律、莊嚴既了、伏願憑斯勝因、奉資冥助、永庇菩提之樹、長遊般若之津、又願上奉、聖朝、恆延福壽、下及寮采、共盡忠節、又光明子自發誓言、弘濟沈淪、勤除障障、妙密諸法、早契

菩提乃至傳燈無窮、流布天下、聞名持卷、獲福消災、一切迷方、會歸覺路。
天平十二年五月一日記

現存する願經は天武天皇十四年のものを最古とし、神護景雲二年までに十數種あるが、その一半は天平年間の願經である。書寫した經卷は單に跋文によつて考査すると、大般若波羅密多經六百卷が三回、それすら大事業と思ふに、一切經律論が五回まで敬寫されてゐる。果して文字通に事實と信じて宜いか。然し天平十二年光明皇后及び神護景雲二年孝謙天皇御發願の願經で、聖語藏に收められてゐる分が、雙方七百五十卷内外あるから、少くともこの二回は實際に行はれたものと考へられる。去りながら、前者の中支那から將來した經卷に跋文のみを加へたものがあり、また後者には跋文を缺き、單に書體か

ら景雲經と認定したものが多數あることを、心得て置かねばならぬ。

一切經書寫の如き大規模な事業が、如何に朝廷において施行せられたか。我々は初め寫經司後に寫經所と稱する官衙が存在し、その分局として寫疏所寫後經所があつたことを知る。東大寺寫一切經所、石山寺奉寫大般若經所等、寺院附屬の寫經所の組織も、之によつて類推し得られよう。

寫經司に勤務する者は(一)經師又は經生と稱し、寫經に従事する者、(二)校生と稱し、校正に従事する者、(三)裝潢と稱し、表裝に従事する者である。題師といつて經卷の題目のみを書くものは、經師中の先輩故老であり、さうして彼等の中の若干名は終日禮佛をこゝとした。校正は必ず初校と再校とその人を異にし、また裝潢は紙を接ぐこと、紙を打つこと、軸を付けること、緒を着けること、竹を削つて表紙に附けること、黄檗を以て紙を染めること、界線を引くこと等に從事する。經卷の界線は時代の古い程細く且つ正しいから、經卷書寫の年代を考察する場合の一條件となる。この外瑩生ケイセイと稱し、金泥を以て寫經する場合、猪の牙で用紙を瑩もがくもの、經卷の見返ミカヘに佛畫を描く畫師、また稀には筆工ヒツウもゐた。さうして以上の人員の外に、多數の舍人・仕丁・童子がゐる雑務に従事した。

寫經は敬佛の致す所である。従つて寫經に従事する者も亦十分その意を帶した。彼等は業に就くに先立ち衣服を改めた。今の所謂作業服を纏ふとは相違し、袴・汗衫アサギ・禪・帶・襪ズキまで改めたので、さうしてそれ等は皆官給品であつた。この外食事も官給で、之を掌るものを膳部といふ。經師及び裝潢は一日料米二升、校生は一升六合、史生・雜使・膳部は一升二合、その外雜穀・海藻・漬物・醬・未醬・酢・鹽・油を給はるのですが、何といつても經師と裝潢とが上位を占めてゐる。彼等は寫經所に起臥し、病氣或は事故で私宅に歸臥せんと欲する時は、請暇願を出さねばならなかつた。之は一寸意外ですが、清淨といふ點から起つたのであらう。

布施即ち賃銀の規定を見ると、

經師	寫龜經又論	紙四十張 <small>付</small> 布一端	八十張 <small>付</small> 絶一疋	一張 <small>付</small> 五文
	寫註經又疏	紙三十張 <small>付</small>	六十張 <small>付</small>	一張 <small>付</small> 七文
	寫結願文			一張 <small>付</small> 二文
校生	校經	紙一千張 <small>付</small>		五張 <small>付</small> 一文
裝潢	造紙	紙四百張 <small>付</small>	八百張 <small>付</small>	二張 <small>付</small> 一文
題師	題經	經一百卷 <small>付</small>		一卷 <small>付</small> 二文
瑩生	瑩紙			一張 <small>付</small> 二文

となつて、一年四回即ち三月・六月・九月・十二月の末に支拂はれる。この規定中龜經とあるは本文のみの分、註又は疏は細字に書かねばならぬから、龜經の寫字料より高い。一張は一枚、天平經は麻紙一枚二十四行一行十七字詰に書くのが通例です。然し文字の大小には色々例外があり、俗に大聖武と稱する賢愚經は文字が大きい、一行十二字、一字八分四方餘ある。これを大聖武と稱するは、聖武天皇の宸筆で大字であるからだといふが、天皇の宸筆といふ證據は無い。またその用紙を茶毘紙といふは、茶毘の灰を混じて漉いたからだといふ。成る程紙面に點々たる隆起はあるが、果してそれが茶毘の灰であるか、覺束ない。往時の鑑定家は随分無茶な説を唱へたものだ。

經師の誤字脱字校正の粗漏に對する辨償も規定せられてゐるが、餘り詳細に互るも如何と考へ、省略する。

寫經所の人員とその能率とを對照することは頗る興味ある題目であるが、資料の不足により、同年同月における兩者を比較することが出来ない。寫經所人員の最高レコードは天平勝寶二年四月で、經師總延人員三、三九一人、内譯經師二、五五七人、裝潢一八七人、校生一八九人、舍人その他四六八人となり、寫經の速度はその前年三月が最高レコードで、法華經六十部四百八十卷用紙九、六〇〇張を費してゐる。

寫經が本邦でかく盛大に行はれてゐながら、光明皇后の願經中隋經唐經を流用したものがあつた。例へば聖語藏にある隋經佛本行集經卷十一には清河長公主楊の識語の次に、また唐經瑜伽師地論卷六十四及び卷七十一には貞觀二十一年云々の識語の次に、光明皇后の願文が加へられて居る類だ。需要が供給より一層大きかつたことは之で立證せられよう。經理については便宜上叙述を次期に譲る。

我が國に存する支那の古寫經では、隋經が一番古いと思つてゐたところ、それより更に古いものが二點まで西本願寺の寶庫にあることを傳聞した。晋の「元康六年三月十八日寫已」の奥書ある諸佛要集經及び西涼の建初七年辛亥七月廿一日の奥書ある妙法蓮華經である。是等が何時如何なる徑路を経て同寺の有に歸したか、多分明治の末から大正へかけて、橘瑞超師等が法主の命により新疆地方へ探險に往かれた時の獲物であらうが、尙委しく知りたいものである。それは差置き近年になつて燉煌發掘と稱する古寫經が多數日本に輸入せられたことは蔽ふべからざる事實だ。

燉煌は支那本土から所謂西域地方に通ずる大道の一要點です。一九〇七年英人オーレル・スタインが同所の千佛洞を發掘し、建初元年の律(失題)北魏延昌元年の成實論經卷十四、その他多數の文書繪畫類を獲たので、翌年佛國からもポール・ペリオー Paul Pelliot が出張して、これも亦多大の成績を挙げた。清國政府は躍起となつて該地方の官憲を督促し、發掘品の殘部を北京に取寄せたが、その中の幾分か日本に流入した。

六朝若しくは隋唐の古寫經と天平若しくはその前後の古寫經とを併せ執り、單に書風用紙から甲が支那經であり、乙が日本經であることを區別することは、なか／＼凡眼の及ぶ所ではない。東大寺獻物張に王羲之王獻之の書卷や王羲之の榻本臨本等があることを思へば、日本人は古く習字に骨を折つたのである。さうして紙は支那から輸入せられ、或は支那紙を模造したものを用ひたとすれば、筆者の人名執筆の年月の明記なき限り、支那人の書寫か或は日本人の書寫かを間違なく區別することは、困難なりと言はざるを得ない。

以上は經卷以外の典籍についても同様である。例へば玉篇の零卷が八箇所に所藏せられて居るが、その中神宮文庫本は卷末に「延喜四年正月十五日收爲典藥頭宅書」とあるから、邦人の書寫したものに相違ないが、その他については甲の説く所と乙の説く所と、必ずしも一致してゐない。玉篇集零本四卷中、正倉院所藏の分は前掲の如く邦人最古の鈔本と言はれてゐるが、殘餘はどうか。玉燭寶典・漢書・世說新語・文館詞林・春秋經傳集解等の零本で、諸家に分藏せられてゐるものかどうか。彼此の零本を一堂に集めて研究するのが唯一最良の方法であらうが、それを實現するまでの困難を考慮に入れて、我等は徐に機會の到來を待たなくてはならぬ。

本邦最古の詩集は懷風藻一卷で、天平勝寶三年十一月の序文がある。載する所の詩凡一百二十篇、作者の姓名の明記せられたるもの六十四人、最後に亡名氏五言歎老の詩あり。編者を或は淡海三船とも、或は石上宅嗣とすれども確證はない。

こゝに石上宅嗣について一遺事を話さう。即ち彼を以て本邦私立圖書館長の鼻祖となす説である。辭句聊か奇矯に走る傾があるが、その因由は續日本紀天應元年六月の條に、

宅嗣辭答閑雅、有名於時、每值風景山水、時把筆而題之、自寶字後、宅嗣及淡海真人三船爲文人之首、所著詩賦數十首、世多傳誦之、捨其舊宅、以爲阿闍寺、寺内一隅、特置外典之院、名曰芸亭、如有好學之徒、欲就閱者、悉聽之、仍記條式以貽於後、云々

とある。前半は彼が詩賦に秀でたることをいひ、後半は彼が舊邸の一隅に、芸亭と名づくる書院を置き、外典即ち佛書以外の書籍を貯へ、希望者に閱覽を許したことを語つてゐる。尙前の引用文の末に「其院今見存焉」とあるから、續紀編纂當時に芸亭の建物は存在したのである。然しながらその藏書は何々であつたか、彼の墓後何うなつたか、杳として分らない。

本邦最古の歌集は萬葉集二十卷で、仁德天皇の御代から天平寶字三年正月までに詠まれた長歌・短歌・旋頭歌約四千五百首を集めてゐる。撰者については古來色々の説があるが、大伴家持の私撰とする説が有力である。本集の作者は上天皇より下

庶民に至り、無名の作者も亦甚だ多い。彼等は外國文化の影響を受けてゐるものゝ、尙國民固有の思想感情を自由に表現し、雄渾率直、頗る後世の歌風と相違する所がある。萬葉集の尊重と研究とが平安朝以來連續するのみか、殊に近年に至り一層増大した所以はこゝにありと考へる。

参考書

- 日本書紀 千二百年記念展覧目録（大正八年五月十日於京都）
- 開館九周年 古事記・日本書紀展覧會目録 昭和十四年十月 天理圖書館
- 眞福寺善本書目 同續編 黑板勝美 昭和十年、同十一年
- 正倉院の栞 小野善太郎 大正十年 西東書房
- 東大寺獻物帳 明治十三年 博物館
- 寧樂正倉院御物目録 寫本（家藏）
- 舊尊勝院聖語藏經卷目録 寫本
- 舊尊勝院聖語藏古經卷目録 昭和十五年（奈良市玉井大次郎氏が先考菩提のために開板せるもの）
- 古經題跋上下譯場列位 鶉飼徹定 三册 明治二年、木活字本（譯場列位とは經卷の末に、續經成就の年月日、譯者・筆受者・證義者・監督官等の氏名を録したものをいふ）
- 寫經より見たる 奈良朝佛教の研究 石田茂作 昭和五年 東洋文庫
- 英國博物館所藏スタイン寫本寫眞帖 矢吹慶輝 大正十三年（啓明會紀要二）
- 敦煌出土古寫佛典に就いて 矢吹慶輝 昭和七年（啓明會講演集一二）

第四章 四種の陀羅尼

今度は日本最古の、同時に現存世界最古の印刷物のお話をして、我等の祖先が文化に貢獻したことの偉大なるを悦ぶと共に、我等も亦祖先に劣らじと發憤努力せざるまい。

スタイン及びペリオールが敦煌で獲得した經卷は數千卷に上るが、大部分が寫經で刊本は僅に數點に過ぎず、その中スタインの獲た咸通九年の刊記ある金剛般若波羅密經はロンドンの博物館に、ペリオールの獲た唐韻切韻二種はパリーの國立圖書館に入つた。後者は零本で刊年を缺くが、前者は本文六葉挿畫一葉、每葉縱一呎横二呎半（挿畫は幅狭し）全長十六呎に及ぶ卷子本で、立派に「咸通九年四月十五日王价爲二親敬造普施」の刊記がある。寫眞を一目しても、それが原始的の印刷物でなく、木版彫刻及び印刷技術が既に大いに發達した時代の産物であることが直ちに分る。

本書發行以前に若干の印刷物が支那にあつたに相違ないが、實物はまだ發見されない。また文獻によると、唐の柳玘の家訓の序に「中和三年癸卯夏、變輿在蜀之三年也、余爲中書舍人、旬休閱書於重城之東南、其書多陰陽雜記占夢相宅九宮五緯之流、又有字書小學、率雕版印紙、浸染不可曉」とある。蜀即ち今の四川に書店があつて、教養の乏しい民間の需要に應じてゐるが、何分印刷が拙いため、文字が浸んで読みかねるといふのですから、中和三年に版本の書物が販賣せられてゐたことは確ですが、惜しい哉、この文章は咸通九年以前に支那に版本があつたといふ證據にならない。何故ならば中和三年は西紀八八三年に當り、咸通九年より十數年あとですから。

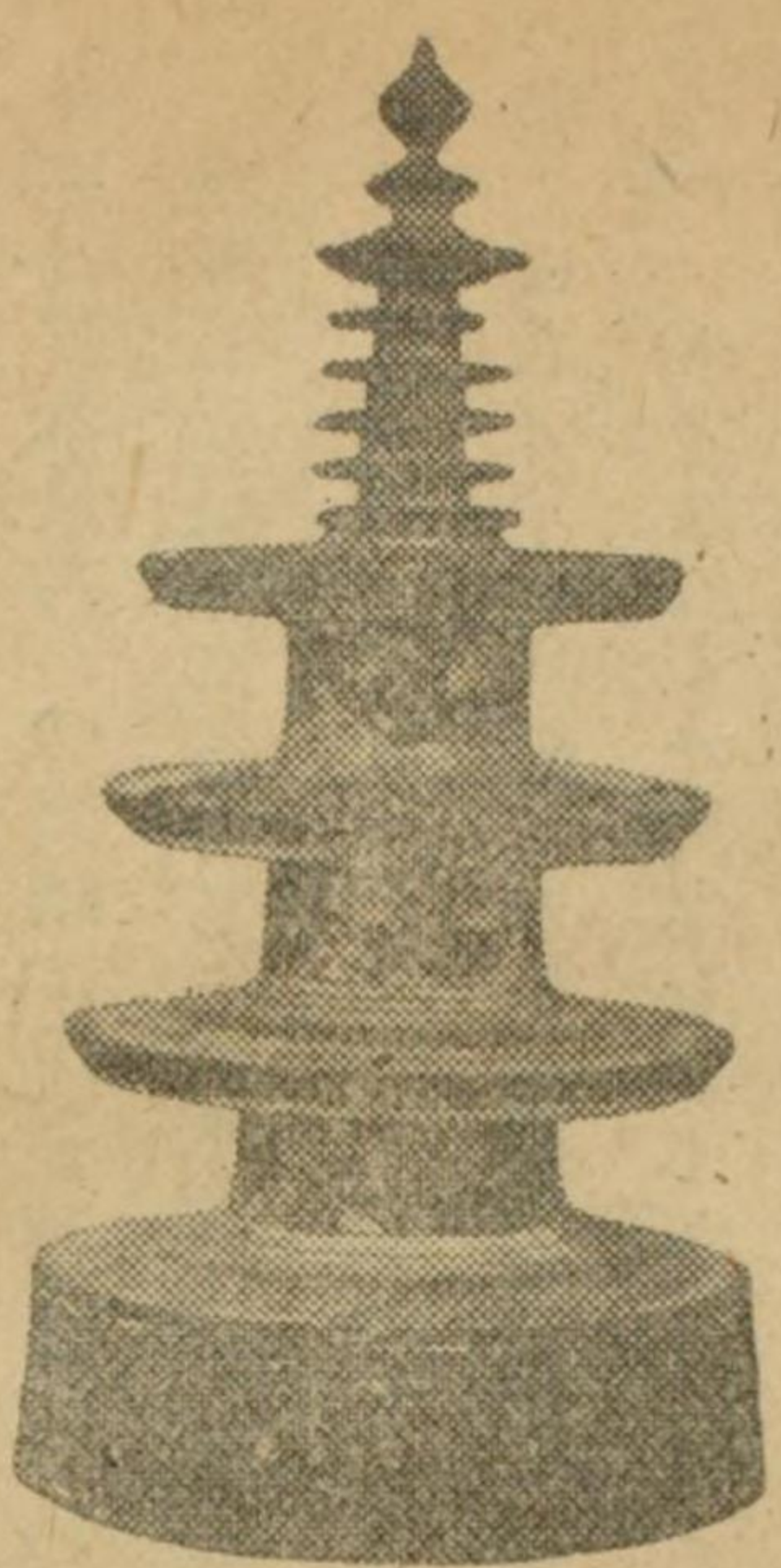
然るに日本では之に先立つこと一百餘年、稱徳天皇の勅願によつて印刷せられた陀羅尼經を収めた木製三重の小塔百萬基が製作せられ、その中完全といはるべき小塔三百餘基陀羅尼經一千八百餘卷が法隆寺に現存してゐる。

續日本紀稱德天皇神護景雲四年四月の條に、

初天皇八年亂平、乃發弘願、令造三重小塔一百萬基、高各四寸五分、基徑三寸五分、露盤之下、各置根本・慈心・相輪・六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺

とある。八年亂平は天平寶字八年惠美押勝の亂が鎮定に歸した時の意、露盤は塔の項に立つ九輪、陀羅尼は一種の呪文、四種の陀羅尼中、慈心とあるは自心印の訛、さうして最後に諸寺とあるは所謂七大寺、即ち大安寺・元興寺・興福寺・藥師寺・東大寺・西大寺・法隆寺と四天王寺・興福寺・弘福寺とを指す。但し最初は右の通十大寺に十萬塔づつ分置せられたが、多年の間に法隆寺以外の分はすべて滅んでしまつた。

露盤の下に置かれた四種の陀羅尼は、黄紙、縦一寸八分、横は本文の行數に應じ長短あり。(六度最も短くして七寸三分、根本最も長くして一尺五寸三分)各卷第一行に無垢淨光經と題し、次に陀羅尼の種類を記す、本文は毎行五字小字を以て發音及び句數を示してゐる。



第六圖 百萬塔(法隆寺藏) (高サ四寸五分)

番號名稱	縱	横	本文行數	現存卷數
(一)根本	一八	一五三	三八	三一
(二)相輪	〃	一一八	二一	四一〇
(三)自心印	〃	一三六	三〇	九八〇
(四)六度	〃	七三	一三	七

無垢淨光經にある六種の陀羅尼は(一)根本陀羅尼(二)相輪中陀羅

尼(三)修造佛塔陀羅尼(四)自心印陀羅尼(五)大功德聚陀羅尼(六)波羅密陀羅尼の順序で掲載せられてゐるが、百萬塔内の陀羅尼は(一)(二)(三)(四)の四種だけで(五)(六)が無い。然し我が邦では最初から四種だけを印刷したのである。根本を一、相輪を二、自心印を三、六度を三とし、順序は淨光經と同様でありながら、番號に缺がないので立證せられる。



第七圖 無垢淨光經自心印陀羅尼(原寸)

ここに珠勝に感ずるは毎卷卷首に本文と同質の用紙を接ぎ、之を以て帙となし、帙の上に一二三三三の番號が記してあることと、塔の基部に同じく一二三三三の番號が打たれてゐることとで、塔と塔内所收の陀羅尼とが一致するやう考慮された結果と思はれる。もつとも現在は帙を存しない陀羅尼や基部の番號の識別し難い塔が多數ある。

明治四十一年平子鐸嶺氏の調査によれば、百萬塔の法隆寺に存するもの四萬三千九百三十基、その中完全といはるべきは三百餘基に過ぎず。陀羅尼の見るに足るべきは一千八百餘卷、斷片二千三百餘卷といふ。

専門家の鑑定によれば、塔の下部即ち三層の部分は檜、上部即ち相輪の部分は水木犀モッコク或は桂ならんといふ。製作に轆轤を使用したことは、塔の底部を一望すれば容易に知られる。さうして出来上つた塔を全部胡粉で塗つたのであるが、極めて稀に他の色彩を用いたものがある。相輪の底部に人名、塔の基底面に年月人名を墨書した分がある。これは製作に従事した工人の名及び成功の年月日である。例へば云二四廿、右秦八千万呂の如し。云は神護景雲、二四廿は二年四月廿日の略であり、又秦八千万呂が工人の氏名であるに相違ないが、右の一字は字義聊か不明だ。通例右を以上はの意に用ふるが、人名の上に左と書いた分もある。さうなるとこの左右は對照の意に用ひられたものと考へねばならぬ。むづかしいことだ。

百萬といへば或は單に多數を意味すと解する人もあらうが、之は左様ではない。今日法隆寺にある分四萬餘基といへば、每寺十萬基、合計百萬基を造られたは事實であらう。同寺には以上四萬餘の小塔の外に、十萬節塔と稱する十三重塔一基、相輪を除き高さ一尺七寸一分、及び千節塔と稱する七重塔一基、相輪共高さ一尺五寸八分あるものを有す。節塔とは數取のために作る塔なりといへば、小塔十萬毎に十萬節塔を作り、一千(萬の訛ならん)毎に千節塔を作つたものであらう。印度では修善滅罪のために小窣堵波を作り、その數一拘胝(千萬の億をいふ)に滿つる毎に大窣堵波を建て、衆僧を招いて盛に供養を修めると大唐西域記に見える。小塔は勿論節塔を作ることまで、日本は印度の風を傳へたのであらう。

四種の陀羅尼は如何にして印刷せられたか。同一種の陀羅尼に異版のあることは動かすべからざる事實だ。然しそれだけで木版か金屬版かを決定することは出来ない。或人は「印刷の墨色と字形とは到底金屬版たるを疑ひがたし」と稱へ、更に一步を進め、原版は蓋し銅印鐘銘等の如く、先づ鑄成して後、これに鑿磨の工を加へたものであらう。山城國妙心寺に文武天皇の朝に成れる鐘があるばかりか、その頃多數の銅印が鑄造せられてゐる點から推考すると、陀羅尼印版の意匠は恐らくは銅印押捺より創意せられたのであらうと言つてゐる。

成る程、或人の説く通、陀羅尼經は墨色薄く、字形散漫である。然しそれだけで原版が金屬版であることを承認せしめようとするのは不十分である。陀羅尼の用紙は堅い。木版で印刷しても墨色は濃く出まい。字形の散漫に流れるは、鑄成した後に鑿磨を加へた金屬版より、寧ろ初期の木版彫刻の陥り易い傾向ではないか。印 Seal が印刷の一起原である論は成立つが、日本古代の銅印は大きな方で方三寸前後である。これさへ押捺するは容易ならぬのに、縦こそ二寸以内なれ、横一尺數寸を越ゆる金屬版をどうして押捺したか、或は印刷したか。金屬版を主張する或人が、印刷の點につき黙して言はざるは如何。自分は日本印刷物の起原として最も平凡な木版説を主張したい。

陀羅尼中經文を書寫したものが三卷ありといふが、特異なものだから論外とする。

支那の書籍雕版は何時を起原とするか、隋代にありとする説は、隋文帝開皇十三年十二月八日「敕廢像遺經悉令雕撰」と隋の費長房の歷代三寶記にあるを、後人或はその文を引用して「此印書之始」の一句を附加し、或は令彫撰とあるを令雕板と改作したによる。敕語の趣旨は、廢像を彫り遺經を撰せしめられたので、開板の意は毫も無い。然らば隋代に彫版ありといふ説は成立たない。されど前掲咸通九年の金剛經を一見すれば、同年以前に若干の印刷物あつたは疑を容れない。然し實物又は文獻によつて之を證明することの出来ないのは如何にも残念だ。

之に反して百萬塔内の陀羅尼は遠慮なくいへば印刷物として隨分原始的のものであるに拘らず、尙それより以前に印刷物があつたと主張する學者もある。天平勝寶元年武藏國多摩郡大領大伴赤麿なる者が死んだ。然るに翌年黒斑の犢が生れた。その斑點を能く見ると、赤麿在世中寺財を横領したため、牛となつたとあるので、眷屬同僚震駭し、後世を誠めるため、その趣を印行し、六月一日諸人に傳へたといふ日本靈異記の記事を證據としてゐる。靈異記の文章は「此事可報季葉楷模」と通例讀んでゐるのを、この學者は「此事可報季葉楷模」と讀んだ。この一句を後人の誠として傳へるべくと解せず、後人に傳へる爲に版行すると解した。日本で模を版木の意味に用ひたことは確にあるが、楷も模も法也、式也と解するのが通例である。文字の論は扱置き、武藏のやうな文化の中心を距る遠き地において、神護景雲以前に印版ありとは、常識論からして受取れぬ話だ。

參考書

- 百萬小塔肆致圖 平子鐸嶺 明治四十一年
觀古雜帖 穗井田忠友 天保十三年序
埋藏發香 穗井田忠友
日本書籍刊行考 黒川眞頼 學士會院雜誌四編一號(黒川眞頼全集六)

第五章 平安朝の寫經と刊經

聖武天皇が、若し我が寺興復すれば天下興復し、若し我が寺衰弊すれば天下衰弊すといはれたのは、佛教の盛衰と國家の隆替とその軌を一にすとの御意と拜察する。然し奈良朝時代の佛教は皇室の恩遇により、堂塔伽藍の林立、名僧智識の輩出、國帑の濫費、政教の混同等、善惡兩方面を遺憾なく露出した。是を以て延暦十三年桓武天皇の平安京に遷都せられるに及び、奈良の諸大寺は一として京都に遷るを許されなかつた。最澄空海相次いで唐土より歸り、甲は法華經を最高至上の寶典とせる天台宗を傳へ、比叡山延曆寺を開き、戒壇の設立を奏請して南都の諸大寺と論争し、また乙の傳へた眞言宗では、盛に加持祈禱を行へるため、彼が入寂の地として撰べる高野山金剛峯寺の外に、嵯峨天皇は彼に京内の東寺を賜ひ、教王護國寺と違せしめ、仁明天皇は宮中に眞言院を設けられた。甲に傳教大師、乙に弘法大師の大師號あるも宜なりといふべきだ。

平安朝初期の佛教は此の如くにして奈良朝佛教の惡弊から遠ざかつたが、文德天皇の皇太子を定め給ふに當り、空海の弟子にして東寺の長者に任せられたもの二人、相分れて某々親王のために立儲を祈るの醜態を演じ、天台宗も亦慈覺門徒智證門徒の二派に分れ、智證門徒は園城寺に據り、叡山を占據せる慈覺門徒と戰ふに至つた。僧兵は必ずしも公卿や國司を相手取つて朝廷に嗾訴するにあらずと知るべきである。それから延曆寺の僧徒が日吉神社の神輿を、興福寺の衆徒が春日神社の神木を奉じ、一團となつて大舉入京するやうなことは、本地垂迹説即ち神佛混淆の致す所と見るべきであらう。

墮落は反動を生ず。佛教が貴族上流社會に專屬し、攘災招福の加持祈禱を主とするに至り、貴賤を問はず、たゞ人は行住座臥念佛を唱へて淨土往生を期すべしと説いた源信(惠心僧都)の説が、如何に貴賤上下の間に行はれたかは、彼の著往生要集の刊行仁安三年及びその所信を實行した人々の事蹟を傳へた日本往生極樂記、續本朝往生傳等の著作を以て知るべきである。

經卷の鈔寫刊行は前代に引續き行はれた。然し天平時代朝廷で行はれたやうな一切經鈔寫の大事業は再び繰返されぬ。後白河法皇が嵯峨の神護寺に寄附せられたといふ金字一切經及び奥州の豪族藤原清衡が隔行交互に金字銀字を以て書寫せしめたといふ一切經は相應多數現存してゐるが、京都は兎に角、奥州のやうな邊土で一切經書寫が實行されたか覺束ない。また文獻には堀河天皇康和五年以來、金字一切經の供養が數回行はれたと見えるが、その都度果して一切經を書寫せられたとは思はれない。

一部の經典で卷數の多いのが大般若波羅密多經で、これには仁壽三年法隆寺の相慶大法師を願主としたものと、貞觀十三年前上野國權大目安倍朝臣小水磨を願主としたものとの二部がある。相慶は上宮聖德法王帝説の傳領者として署名してゐる相慶と同人であらう。また小水磨の願經は相應部數後世に傳はつたと見え、その跋文は市野光彦によつて墨帖風に覆刻せられてゐる、曰く

無災殃而不消、無福樂而不成者、般若之金言、真空妙典、被稱諸佛之父母、聖賢之師範也、所以至誠奉寫大般若一部六百卷、三世大覺、十方賢聖咸共證明、我現當之勝願、必定成就、貞觀十三年歲次辛卯三月三日權主前上野國權大目從六位下安倍朝臣小水磨

この期の寫經で自分が最も殊勝に感じたは、往年大阪上野理一氏邸で一見した法華經卷八の奥書である。願主が運慶及びその女阿古丸であるので、先づ目を見張つたが、仔細に跋文を吟味して、彼等父子の間に法華經二部書寫の件を商議したは壽永二年四月であること、色紙工に命じて料紙を儲け、また之を打たせ、出來上つたは同月廿八日であること、翌廿九日僧珍(Chō)賀榮印二名を書手とし、同日同時に書寫に着手したこと、上野氏所藏の卷八は珍賀の筆で、六月五辰時に始め、同七日酉時に書畢つたこと、硯の水には横河根本の水、園城寺の水、清水寺の水を使用したこと、書寫中毎日三回の供養を行ひ、禮拜結縁の人々五十餘名、その人々は晝間禮拜五萬返、念佛十萬返、法華經寶號十萬返に及んだこと、その外在地で結縁し

た人々もあつたこと、軸作者は源兼弘、軸座作は銅細工源友正、軸の材料は夢想の告により、六月四日人を遣はし、東大寺焼失の柱の残木を取寄せたこと等を知つた。さうして軸木にも之を取寄せた趣旨を記し、「若及末代孫子等中、欲修理者出來者、此木不可爲疎」とある。よつて二百年後、永享六年修理を加へた時にも、此の軸木は保存された。

經卷を尊重すれば、之に繪畫その他の裝飾を加ふるは必然の勢で、平安朝の後半期において、所謂繪經色紙經の流行したは偶然にあらずといふべきだ。この名稱は恐らくは和田維四郎氏が訪書餘録に使用せられたのが最初で、經文中に繪畫を加へたを繪經、料紙に色紙を使用したを色紙經と稱した。名稱の雅俗を論ぜず、自分も亦便宜上之を使用しよう。

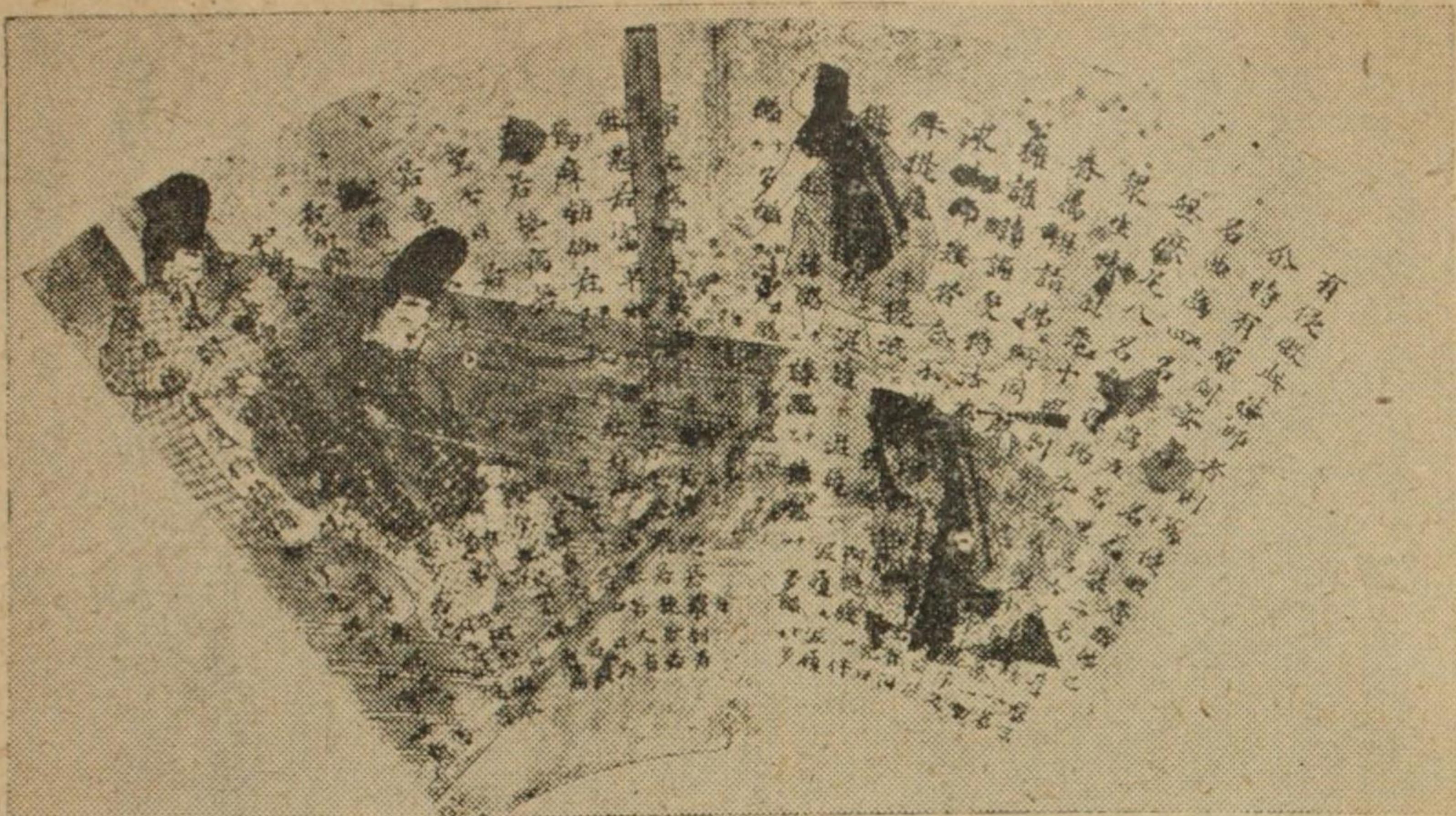
繪經は既に天平時代にある。過去現在因果經がそれで、紙面を上下二段に分ち、下段にある釋迦一代の經歷を彩色畫で上段に現はしてゐる。畫そのものは純朴で硬い。京都醍醐の報恩院に第三卷を、東京美術學校に第四卷下半を藏してゐる。本書を以て「聖武天皇天平七年勅筆也」とする説がある。然し第三卷の末に「四月七日寫書生從八位」とあるから、宸筆説は成立しないが、天平物であることは疑ない。

平安時代の繪經には二種ある。第一種は本文と何等の關係なき極彩色の風俗畫を扇面形の料紙の上に描き、その上に直ちに經文を書寫したもので、それ等の風俗畫の輪廓は版畫なりといふ。四天王寺及び東京國立博物館所藏の扇面經之に屬す。もと法華經八卷開結二經二卷、併せて十卷具足したものが散在したので、今日は天王寺に五十一葉、博物館に十一葉、その他に若干葉存在してゐるだけである。第二種は表紙及び本文の表裏に金銀泥箔及び各種の繪具を以て人物・草花・禽鳥その他意匠の及ぶ限りの裝飾を施したるもの、久能寺及び嚴島神社の法華經の類である。前者は小杉榎邨博士舊藏の古寫法華經模本によると、法華廿八卷中四卷を缺き、開結二卷を併せて二十六卷、毎卷筆者を異にし、皇族には鳥羽上皇・高陽院鳥羽天皇・美福門院・待賢門院・二條大皇后宮あり、その他は女房・公家・僧侶で、就中學者とし又藏書家として有名な前日向守通憲鳥羽天皇即ち少納言入道信西が結經の筆者である。さうして是等筆者の履歷から推して、經卷は崇徳天皇の保延五年から永治元年まで三年の間に書寫せられたものであらうと論じてゐる。左に掲ぐる高陽院御筆の功德品第十八の裝飾説明によつて、八百餘年前の昔を偲ばう。

表紙紫ウス絹、繪蓮、花紫、ヘリ白ロク、葉綠青、所々ニ切金箔
裏紙ウス葉紫村濃、金銀切ハク、大小細金銀松葉、繪蘆手極彩色、蓮、
花金、葉綠青紺青、地紙黃ナルヘシ、古色サタカナラス、金銀丁子引所
々ニ銀泥畫キ連、花葉共ニ、系・金、系ノ内地共に模様同ジ

後者は法華經二十八卷、開結二經、阿彌陀經般若心經各一卷、計三十二卷具備し、別に平清盛の願文一卷が添つてゐる。筆者は清盛以下一門三十二人、長寛二年から仁安二年まで四年間に完成した。表紙・本文の表裏は勿論軸・帶・題簽に至るまで善美を盡くし、その裝飾は資料・意匠・技巧の三者において前者に優るとも毫も劣る所はない。勇猛を以て鳴る福島正則さへその美に打たれ、外箱を獻じて是等經卷の保存を計つた位であつた。

是等の繪經を見て、自分は想を遠く歐洲の畫入寫本 Illuminated Manuscripts に奔せた。西羅馬帝國滅亡後歐洲の寫本は六世紀から八世紀にかけて、まづ愛蘭に起つた。どうして愛蘭のやうな邊鄙な地に起つたかといへば、それは支那や日本同様宗教―耶蘇教に關係した經典の書寫から始まつたのである。勿論初は讀めれば宜いとしたに相違ないが、それに満足せず、先づ頭字に裝飾を施し、次に本文の周邊に裝飾を加へ、終には本文に畫を挿み、之に彩色を加へるといふ風に發達して畫入寫本とな



第八圖 扇面古寫經(五分の一)

つたのだ。日本では天平時代に既に畫入の經卷として因果經があり、又平安朝時代には信貴山緣起・伴大納言繪詞のやうな立派な繪卷物があり、畫と文章と相待つて事件の展開を示してゐる。西洋の畫入寫本にせよ、日本の繪卷物にせよ、畫と本文と密接な關係あるに反し、扇面經では兩者が全然無關係なるのみか、光彩陸離たる風俗畫の上に、經文が墨痕鮮かに認められ、ひき目かぎ鼻の美人の面も哀れ眞黒々となつてゐる。異様な趣味と言はざるを得ぬ。

紺紙に銀泥を以て書寫せる經卷は既に天平時代にある。東大寺二月堂の燒經ヤケキョウと稱するものを以て知るべしだ。聖武天皇が毎國の國分寺に奉納せられた金字の最勝王經は、金泥で書いたものに相違無いが、料紙が後世のやうに紺紙であつたか、遺物がないので明言が出来ぬ。兎に角金銀泥經の起原は天平にあつたとしても、盛に行はれたは平安朝時代で、著名なのは陸中尊寺に藤原清衡が奉納した一切經と、清衡の子基衡が亡父追善のために奉納した一千部の法華經である。清衡奉納の分は卷首に金泥の佛像畫あり、本文は紺紙に銀界を引き、金泥銀泥を以て隔行に書寫してゐるが、基衡奉納の分は金字だけで、久安四年六月の年月を記したものである。

平安朝になつてから、最初に印行せられた經卷として、現存するものは、聖語藏所藏寛治二年の成唯識論である。神護景雲に後るゝこと三百年餘、この長期間四種の陀羅尼に示された彫版印刷術が、襲用せられなかつたと信ずることは、殆ど不可能であるといへる。弘仁年間最澄（傳教大師）が所謂傳教版を開版したといふ或人々の主張は、或はこの不可能説に基づくのではないか。

寛治刊行の成唯識論十卷三四兩卷は、第十卷の末に堂々たる刊記がある。その文に曰く、

興福伽藍學衆諸德、爲興隆佛法利樂有情、各加隨分財力、課工人、鑿唯識論一部十卷模、寛治二年三月廿六日畢功、願以此功德、廻向諸群類、往生內院、聞法信解、證唯識性、速成佛道、模工僧觀增

と。以て開版者の名前、開版の場所・由來・成功の年月日等を知るに足る。玄奘三藏譯の成唯識論に引續き、その注疏と稱すべき成唯識論述記及び成唯識論了義燈が、寛治以降鎌倉時代までに出版せられたことは、興福寺法隆寺その他に現存する兩書の零本の奥書を以て知られる。但し兩書の出版が一回であつたか、數回であつたか、是等の奥書が加點又は授受の年月を記すに止るを以て決定し難い。

以上を以て鎌倉時代に盛行した春日版の先驅と爲すことについては、何人も異存はあるまい。

興福伽藍學衆諸德爲
興隆佛法利樂有情各
加隨分財力課工人鑿
唯識論一部十卷模
治二年三月廿六日畢
功願以此功德廻向諸
群類往生內院聞法信
解證唯識性速成佛道
模工僧觀增

第九圖 憲治版成唯識論刊記（二分の一）

御堂關白（源賴朝）記寛弘六年十二月十四日の條に、「中宮御産間、立願數體等身御佛造初、又大内御願千部法華經摺初」とある。御堂關白は有名な藤原道長、中宮は同人の女彰子、一條天皇の中宮で、本文の意味は、その御安産を祈つて、等身佛數體の造立及び法華經千部の印刷に着手したといふので、これを摺佛養と稱した。この場合寫經の書寫に對して摺寫又は模寫の二字を用ふ。本來模字を用ふべきであるが、模模字形相類する所から混用せられる至つたのであらう。

これを最初として、その以降の文獻を見ると、佛體を作り、經卷を印刷する外に、摺佛と稱して佛像

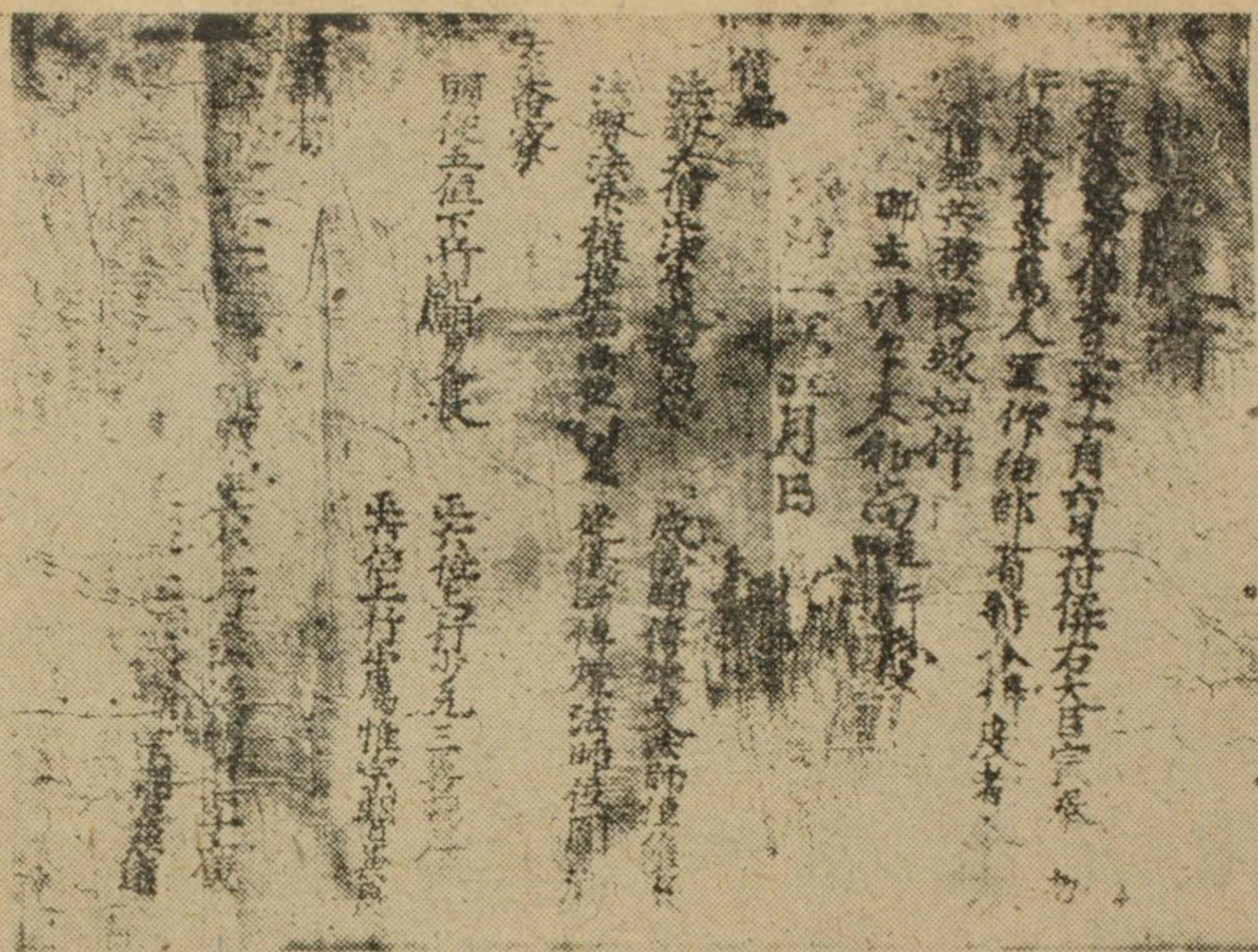
の圖畫を印刷したことも屢々散見する。佛像は大小區々、一丈六尺の金色阿彌陀如來もあれば五寸の藥師如來像千體を作つ

たこともある。摺佛には三尺薬師如来を作つたこともあれば、四十一年間日別一體の毘沙門天合計一萬五千八十體を作つたこともある。摺經の種類を言へば妙法蓮華經と、その開結二經即ち無量義經と觀音賢經とが斷然多く、般若心經と阿彌陀經とが之に次ぎ、薬師經と壽命經とが之に次ぐ。

當時の摺經で現存するものは(一)安田文庫所藏の妙法蓮華經第二、(二)石山寺所藏の六字神咒王經、(三)久原文庫所藏の大孔雀明王經卷下等數種に過ぎず。以上いづれも刊記を缺き、開版の年月願主の氏名等を知る能はず、僅に卷末に墨書せる識語により、開版をそれ以前と推定するだけで、(一)には、承曆四年、(二)には保安元年、(三)には保安三年及び寛治五年の識語がある。

以上摺經に關する文獻及び遺物により、吾人は平安朝中期以後、病氣平癒息災延命の加持祈禱が如何に上流社會に流行したか、換言すれば、台密即ち叡山を中心とする密教と、東密即ち東寺を中心とする密教とが、京洛の間に盛行したかを知る。

石清水文書^{卷二}に沙彌慶清の度縁一通がある。本文は保安三年十月六日の太政官符に一萬人を度すとあり。これによつて康治二年四月日「法印大和尚位行慶」師主となり、沙彌「慶清」を得度せしむといふ意味で、治部省、玄蕃寮の役員各々三人、僧綱四人が連署して「」を施した人名だけが筆寫である。度縁一萬枚を要すとせば、豫め



第十圖 沙彌慶清度縁(三分の一)

る。面白いことはこの度縁が一枚の木版刷で上文に「」を施した人名だけが筆寫である。度縁一萬枚を要すとせば、豫め木版を以て必要の字句を用紙に印刷して置くことの便利なるはいふまでも無い。歐洲の活字印刷物中正確な紀年のある最古のものは、一四五四年教皇ニコラス五世の許可を得て發行した四枚の贖罪符なりといふ。東西一脈相通する所ありといふべしだ。

参考書

- 傳教大師將來目錄 文政四年 叡山淨土院
- 請來新譯經等目錄 空海 印刷局
- 古寫法華經摸本 寫 小杉樞郵舊藏
- 帙圖 寫 屋代弘賢高木壽顯舊藏
- 影印寛治版成唯識論 ^{附卷春日版彫造致} 大屋徳城 昭和十五年 便利堂
- 古活字版之研究 同附圖 二册 川瀬一馬 昭和十二年 安田文庫

第六章 詩文、和歌物語

支那固有の文化として、日本が採取に力めたは、彼の律令格式であつた。今傳はるは、元正天皇の養老二年藤原不比等に勅して撰ばしめ給ひし律令各十卷あり、然れども未だ格式の編纂に及ばず、平安朝に至り、嵯峨天皇は弘仁格式を、清和天皇は貞觀格式を、また醍醐天皇は延喜格式を撰せしめらる。格は三部を併せ、分類して檢閲に便にしたるもの、類聚三代格の名にて傳はり、弘仁貞觀二代の式は延喜式五十卷中に包含せらる。格は詔敕官符を以て律令の定法を改め、或は臨時の新制を設けたる類、式は諸官を分ち、その官中の事務を記せるものをいふ。律令撰定の際、本邦の事情を參酌して、唐制を修正ありしは勿論なるが、尙改廢を要するもの多かりしを以て、格式の撰定となつたのである。

然しながらその結果は必ずしも良好ならず、却て一層の紊亂を招けるものさへあつた。試みにその一二をいへば、嵯峨天皇の御代藏人所檢非違使廳の設置により、令に見える大政官の制度は有名無實に歸した。天平年間公廩稻の利益を地方官に分配してから、中央官吏とこれに相當する地方官吏との間に、收入の懸隔を生じ、遙任と稱し、京都にゐる高位大官で國司を兼任するに至り、地方政治の荒廢を來たした。また朝廷は土地の分配を平均し、國民生活の安定を計つて班田收授法を布いたが、一方には貴族寺院の懇田私有を許したため、班田法の實行難に陥り、平安朝に入つては六年毎に行はるべき班田が、二十年三十年中絶するに至つたため、政府は租調庸を完全に收納するを得ず、雜徭出舉の制も徒に下民を苦しめるに止つた。一條天皇永祿元年尾張國の郡司人民が、國司藤原元命の非政三十一條を列舉上申した尾張國解文の正中二年の古抄本が名古屋市眞福寺にある。

律令格式に關する古抄本は比較的豊富に存在するが、鈔寫の年月を明記したものはない。石山寺の延曆交代式を始とし、九條家の鬮訟律斷簡、猪熊信男氏の令義解零本(神祇令僧尼令)等概ね短篇で、九條家の延喜式廿八卷本の如く、大部のものは極めて稀有である。

日本書紀に次ぎ、平安朝時代には延曆十六年に續日本紀四十卷、承和七年に日本後紀四十卷、貞觀十一年に續日本後紀二十卷、元慶三年に文德實錄十卷、延喜元年に三代實錄五十卷が出来た。書紀以下を總稱して六國史といふ。皆勅を奉じて當代の學者が撰進した所である。古抄本としては金澤文庫の黒印ある續日本紀が尾張徳川家に、また六國史の事蹟を部門別にした類聚國史二百卷の中、第百六十五・百七十一・百七十七・百七十九の四卷が前田家に存してゐる。通説では菅原道眞を本書の撰者としてゐるが、一部を藤原良房の撰とする説もある。六國史中日本後紀は今傳はるもの僅に十卷、類聚國史は六十二卷、前者は寛政十一年享和元年塙保己一により、また後者は文化十二年但馬出石藩主仙石政和により校刊せらる。藤原季綱の孫通憲(入道信西)が、鳥羽法皇の密詔を奉じて久安六年から着手した本朝世紀は、朱雀天皇承平五年より近衛天皇仁平三年に至る。同人の撰べる法曹類林、惟宗允亮の撰べる政事要略と同じく闕脱多きは遺憾である。

雜史に將門記あり、天慶三年六月即ち平將門伏誅後數月を出でざる時の記録で、眞福寺所藏の古抄本には「承徳三年正月廿九日於大智房西時許書了」の奥書がある。

當代の公卿の日記として有名なのは(一)御堂關白記十七卷・(二)兵範記五十一卷・(三)台記十四卷・同別記八卷・(四)明月記五卷等で、(二)は一生涯に四たび太政大臣となつた藤原道長、(三)は兵部卿平信範、(四)は悪左府といはれた藤原頼長、(五)は歌人として名高い藤原定家の日記である。

嵯峨天皇以來種々の儀式が制定せられ、凡そ朝臣たる者は服飾器械より座作進退に至るまで、一に儀式に依らざるを得なかつた。これが日記執筆の大きな動機となつたのである。かく日記は他日自己又は自己の子孫の便宜のために書殘すものであるから、文章辭句を練る要も時間もなく、書名を附する要もなかつた。日記の文章が消息物同様和字を交へた漢文であ

り、一部の日記に後人の附けた數種の異名のある理由はこゝに存する。日記には殘缺が多いから、寫本の日記を手にした時は、必ず記録便覽家記書目備考のやうな目錄と對照して、完本か否かを調査する必要がある。

風土記の勘進は醍醐天皇延長三年十二月の太政官符による、されど是より先和銅六年畿内七道諸國に命じ、郡郷・山川・原野の名稱と所由、土地の肥瘠、産物、古老相傳の舊聞遺事を撰進せしめられたればこそ、延長の官符の冒頭に「右如聞、諸國可有諸國風土記文」と、宣りたまへるのであらう。今存するは常陸・出雲・播磨・豊後・肥前風土記の五部で、この外伴信友狩谷核齋等の諸名家が古書に引用せられた風土記の逸文を集めたものが數種ある。但し日本總國風土記と稱するものは、後人の偽作だから採用してはならない。

盛唐の文藝に對する上流貴族の憧憬は、嵯峨・淳和・仁明天皇の御獎勵と相待つて一段と昂揚した。學令を見るに大學は大學寮に屬し、その教官は博士一人・助教・音博士・書博士・算博士各二人とし、博士助教は「取明經堪爲師者」とあるから、これは養老五年の詔に見える明經第一博士及び第二博士に當り、周易・尙書・周禮・儀禮・毛詩・春秋左氏傳・孝經・論語を學生に教授したのである。尙同じ詔の中に見える文章博士は、後の紀傳博士の専門とする三史即ち史記・漢書・後漢書の外、文選にも併せ通じ、その位階は他博士の上にあるのみならず、後日大臣納言に進んだ人もある。學生には五位以上の子孫及び東西史部の子を取る。八位以上の子は請願すれば聽されるが、初位の子及び庶人の子は聽されず、年齢は十三歳以上十六歳以下で聰令なるものを取り、人員は四百人と限られてゐた。學生は先づ經書の素讀に通じ、然る後講義を聽くのであるが、十日に一回の休日があり、その前日には必ず試験を受ける。この外講義の方は毎年七月に一年分の試験がある。さうして最後に舉人となり、國學より送つた貢人と共に、秀才・明經・進士・明法等の數部に分け、式部省で試験を受け、及第してやつと正八位上以下の低い官位を得る。

京師に大學あり、國々に國學あり、その外弘文院・勸學院・學館院・獎學院・綜藝種智院等の私學もあつたのだから、學校の設備は十分整つたのである。文章博士菅原清公が大學に東西二曹を設けて紀傳道を講じてから、その子は善、門人大江音人東西に分れて清公の遺業を繼いだといへば、是善の子道眞が右大臣に累進したには、父祖の學業が背後の支柱であつたと考へられる。また博士世襲の風が、紀傳道では是善音人の時に始つてゐるので、漢學の流行がこの時を絶頂とし、爾後衰頽に傾いたことも考へられる。

獨り紀傳道が菅江二氏の世襲となりしのみならず、中古に至り明經道は清原中原二氏、明法道は坂上中原二氏、算道は三善小槻二氏、陰陽道は賀茂安倍二氏の世襲となつたことが職原抄に見える。世襲の學問に發達のあらう筈がない。家傳秘説と稱して自己の城壁を固守するのみである。その弊は漢文に施すヲト點が家々寺々においてそれ／＼相違してゐるので分る。

文章博士の地位は明經明法兩博士より高く、三史及び文選は周易尙書よりも、律令格式よりも尙ばれた。當時の日本は詩文を以て經國の大業と認めたと稱しても過言ではあるまい。

本邦最古の詩集懷風藻に引續き、嵯峨天皇は勅して凌雲集文華秀麗集各一卷を、淳和天皇は慶雲より天長に至る上下百二十年間の詩文集として經國集二十卷を撰ばしめられた。以上三部いづれも古抄本なきのみか、經國集は今六卷を存するだけである。また本朝文粹十六卷は藤原明衡の撰で、嵯峨天皇より一條天皇までの詩賦文章を部類を分つて編輯したもの、その續篇たる續文粹は藤原季綱の撰で、もと十四卷あつたが、今は十三卷となつてゐる。前者の鎌倉時代の古抄本二卷一帖は眞福寺に、後者は紅葉山文庫の舊藏で、金澤文庫の印記あるもの十三卷が内閣文庫に保存されてゐる。空海の文鏡秘府論六卷は詩法・文法・音韻のこと等を論じたもの、口遊クハスツビ天祿元年源爲憲が一貴紳の童兒のために撰んだ讀本で、雙方當代他に類例の無い著述である。

朝野群載三十卷は詩文及び公私の文書を分類編纂したもので、今傳はるは二十一卷、撰者は算博士三善爲康、序文に永

久四年編次とあれど、その後増補追加せしと見え、永久四年以後天承元年までの年月を記した文章が可成ある。猪熊信男氏(Shimozu Nobuo)所藏の零本は鎌倉時代を下らざるものといふ。明衡往來一名雲州消息三卷は藤原明衡の作、正月より十二月に至る消息文例を集めたもので、消息物一に往來物の祖といふべき(Shimozu Nobuo)。古代の消息文は純粹の漢文であつたが、次第に崩れて漸く和字を交へ用ふるに至つたことは、記録文に同じ。前掲將門記の文も同斷である。

天長八年東宮學士因幡介滋野貞主等が奉勅奏進せる秘府略一千卷は、稀有の大編纂物と稱すべく、彼はまた前掲經國集の編者の一人でもあつた。秘府略は支那に所謂類書の一つで、部類を設け類を分ち、之に適應せる記事を秘府所藏の文書中より拔萃列擧せるにより、この書名を題したのである。現存するもの僅に二卷、卷八百六十四百穀部中は徳富猪一郎氏、卷八百六十八布帛部三は前田家の所藏で、共に平安朝中期を下らざる古抄本である。

醫書には本草倭名二十卷あり。新抄和名本草とも倭名本草とも稱せらる。大醫博士深江輔仁の奉勅撰進する所にして、今卷一卷二を缺く。之に次ぐは永觀二年に針博士丹波康頼が奏覽した醫心方三十卷で、卷一・五・七・九・十の古抄本五卷は仁和寺に、二十二の一卷は徳富猪一郎氏に所藏せらる。

近年に至り、萬葉集の研究が一段博く且つ深く行はれ、その結果の一として、自分等如きものすら平安朝時代の古抄本數部を知るに至つたは慶賀に堪へぬ。

(一)桂萬葉集 これは卷四の殘卷で紫・白・藍・黄・朽葉・茶・草・薄赤の八種の式紙を繼合せ、金銀泥で草木花鳥等を畫ける卷子本である。筆者不明といへど平安朝中期の書寫にかゝり、現存せる萬葉集古抄本中最古のものといふ。前田利家夫人芳春院の舊藏品で、後年同家より桂宮に上り、今は御物となる。

(二)藍紙萬葉集 銀砂子を散らせる薄藍色の用紙に書けるを以てこの名あり。現存するは卷九の大部分を存する卷子本と卷十卷十八の斷簡となり。

(三)金澤萬葉集 唐紙に金銀の砂子を散らせる粘葉綴(デツナヨ)一帖にて、平安朝の中期藤原行成の後なる定信の書する所といふ。明治四十三年 明治天皇前田家に臨幸ありし際、同家より獻上せるものなり、粘葉綴とは二つに折つた紙の折目と折目を糊で堅めて冊子形にしたものを指す。

(四)天治萬葉集 平安朝時代の萬葉古寫本中、書寫の年代の明白なるはこの一卷のみ、京都福井氏の秘藏にして有界の仙華紙に記され、卷末に「天治元年六月廿五日書寫了」とあり。第十三の卷完備す。

(五)元曆萬葉集 鳥ノ子の飛雲紙を用ふ。古河家に第一・二・四・六・七・九・十・十一・十三・十四・十七・十八・十九・二十の十四帖を、高松宮家に第一・四・六・十・十二・十九の六帖を秘藏せらる。第二十卷の末に「元曆元年六月九日、以_レ或人_二校合了_一、右近權少將」の奥書あり。

以上の外、類集古集二十卷は今九・十・十八・二十の四卷を缺く。細川幽齋・鳥丸光廣・中山家を経て大谷家に傳はる。鳥ノ子粘葉綴、また古葉略類聚抄十二卷は今八・九・十・十二及び卷名未詳の一卷を存し、その内第八は佐々木信綱氏、殘餘は興福院の所藏、袋綴の冊子で、卷九の奥書に「建長二年九月書寫之」とある。二書とも萬葉集の歌を分類編輯せるものであるので、此處に附記する。

嵯峨天皇が詩集を敕撰せしめられたに對し、醍醐天皇は紀貫之等四人に勅し、萬葉集以後の和歌一千一百餘首を撰ばしめ給ひ、延喜五年を以て成つた。古今和歌集がそれである。天曆五年村上天皇は宮中に和歌所を置き、源順清原元輔等に勅して後選和歌集を、また一條天皇は藤原公任に勅して拾遺和歌集を奏進せしめられた。以上を三代集と稱す。更に白河・崇徳・近衛・後鳥羽四代の御代々に成つた後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集と、後鳥羽上皇の院宣により、土御門天皇の御代に成つた新古今和歌集とを合せて八代集といふ。以上の中金葉詞花二集は每部十卷、殘る六種は每部二十卷ある。

萬葉集の雄渾質朴な格調は古今集には見えない、古今集の作家は漢文學の影響を受けて優美流麗を主とし、技巧の發達著しきものがある。然るに延喜以後の和歌が題詠を首とし、歌會歌合に優劣を争ふに至つては、和歌は上流社會の一種の遊戯となつた觀がある。但し平安朝の末期に至り、藤原俊成僧西行の如く、技巧を斥けて眞情流露を主とした新派が出た。要するに平安朝における和歌の隆替は、漢詩漢文より一層よく時勢に昭應してゐる。

西本願寺舊藏の三十六人家集と三井高保氏藏の古今集とは、料紙装幀の美において藤原時代の雙璧と稱せらる。

我々相互の間に意志思想を傳ふるに當り、支那から輸入した純粹の漢字漢文を使用するより、日本で出來た假名を主とし、必要な場合に漢字を從として使用する方が、適當簡便であることは言ふまでもない。とはいへ隋唐の文化にのみ依存した餘弊として、當初は假名を女文字といひ、女子専用のもものと輕視する風さへあつたが、平安朝の中期以後和歌和文の勃興となり、女流作家の輩出となり、女性の執筆に擬した紀貫之の土佐日記さへあるやうになつた。

和文で記された(一)物語類は竹取物語伊勢物語を最初とし、宇津保物語落窪物語等これに次ぎ、一條天皇の御代紫式部の源氏物語五十四卷を以て絶頂に達したといへる。「紫式部が源氏物語作り出して侍るは、さらに凡夫の所行とはおぼえず、日本紀をはじめとし諸家の日記に至るまで、あきらかにさとり得たりとて、時の人日本紀の局と號し侍りける」とあれば、漢學の教養の尋常ならざるを知る。(二)日記には紫式部日記和泉式部日記、(三)紀行には土佐日記更科日記、(四)草紙には枕草紙、(五)雜史には榮華物語・大鏡・今鏡がある。この中榮華物語大鏡は藤原氏一門の榮華を描くに努め、道長を以て殆ど理想的の人物としてゐる。以上十三部中作者不明のもの七部、殘六部中五部まで女流の作なのは眞に駭くべきことならずや。

書道も亦平安朝の半頃に至つて一變した。嵯峨天皇・僧空海・及び橘逸勢を以て世に三筆と稱するが、なるほど空海の筆蹟を見れば十分唐風を存してゐる。之に反して高松宮家御所藏小野道風筆の秋萩帖、御物藤原行成の倭漢朗詠集を拜すれば、漢字と假名とが甚だ善く調和してゐる。僧虎關が異制庭訓往來に、我が國の書法を論じて「本朝延曆大同之昔者、和漢同其

芳躅、天曆天喜之比、和漢異其闔域」とは、之をいふのであらう。

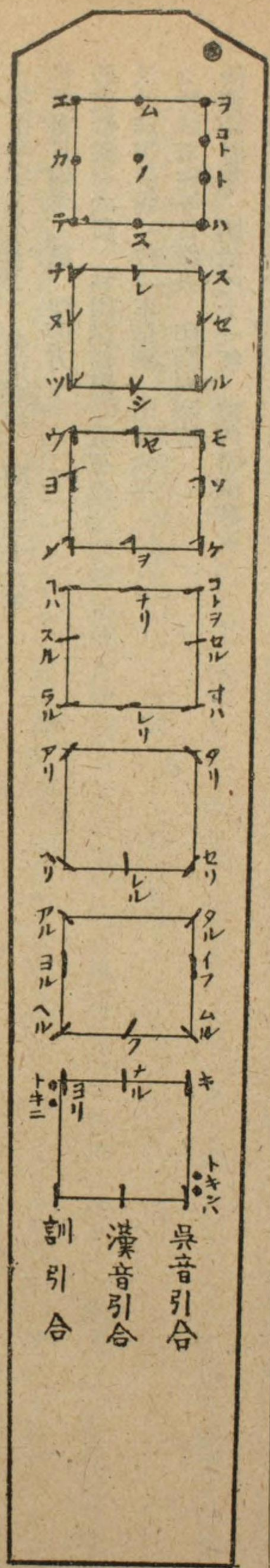
参考書

- 尾張國解文眞福寺本 大正十四年 名古屋温故會
 將門記眞福寺本 寛政十一年 序 植松氏藏版 (大正十三年 古典保存會本)
 口遊眞福寺本 大正十三年 古典保存會
 記録便覽 寫
 家記書目備考 寫 伴直方
 古物語類字(雲水遺稿卷二) 黒川春村 明治三十二年
 物語書目備考 寫 伴直方
 訪書餘錄 六册 和田維四郎 大正七年
 扶桑珠寶解説 佐々木信綱 昭和六年
 上新請來經等目錄表 印刷局藏版
 倭漢朗詠集 明治四十一年 宮内省御藏版

第七章 チコト點 辭書書目

假名の發達と共に、我等は一應ヲコト點一にテニヲハ點について心得置かざるべからず。これは漢字を正方形と見做し、その四隅・四邊・中央等一定の場所に點または線を描き、それで音訓・切點・返點等を示したもので、例を示せば、左の通。

●經 孝經論語易尙書毛詩春秋周禮禮記孟子老子莊子楊子荀子文中子等用之



第十一圖 家藏點笏模造品(二分の一)

これは家藏の點笏テンコツの一面を寫したのであるが、その右側面に●經 孝經・論語・易・尙書・毛詩・春秋・周禮・禮記・孟子・莊子・老子・楊子・荀子・文中子等用之とあつて、孝經以下の經書講讀に用ふる點なること、又裏面に掲げた點圖は、▲紀傳・史記・文選・前漢書・後漢書等用之とあつて史記以下の紀傳に用ふる點なることを示してゐる。然らばこの點は博士家で用ふる點で、僧侶が經卷を讀誦する時は、別種の點を用ひた。博士家點に菅家點・江家點・清家點等五種あり、釋家點に喜多院點・西墓點・仁都波迦點・妙法院點・水尾點・禪林寺點等二十三種ありしといへば、その煩雜なること推知すべく、さうしてその煩雜の一因が家説擁護の秘密主義に基づけることは、甚だ唾棄すべきことであつた。

岩崎文庫が所藏の古鈔本尙書零本一卷及び日本書紀卷廿二・同廿四・二卷を複製するに當り、訓點を加へた眞狀を示さんた

め、前者の三葉及び後者の九葉を特に木版彩色摺とし、吉澤義則博士執筆の解説一篇を添へられた。それによれば岩崎本尙書點は延喜を下らざる時代に加へられた菅家點であらうし、また書紀の點は菅家點より分出した江家點で、寛弘前後に施されたものであらうとある。

漢文訓讀の必要は漢文渡來の初よりあつたに相違ない。然しヲコト點がそれと同時に起つたとは言へない。現存の古經卷で最も古い加點の年號を有するものは、石山寺の大智度論第五十卷で、「天安二年山階寺傳大詮大德所講」とある。點が平安朝以前に用ひられたといふ證據はまだ出て來ない。

ヲコト點は朱書、假名は墨書するのが通例で、古書の識語に屢々、「加ニ朱墨兩點ニ畢」と見える。假名の字體や點の如何によつて逆に刊寫の年代や弘布の廣狹を推知し得ることもあるから、注意すべきである。

新撰字鏡十二卷は僧昌住編、本邦人の手に成る最初の字典で、所載の字數合計二萬九百四十餘字、別に小學篇の字四百餘字あり。序文によるに、彼は寛平四年一旦草案を竟つたが、爾來致々として補綴を怠らず、昌泰中玉篇及び切韻を得るに及び、遂に大成すといふ。小學篇より取入れた文字といふは、わが國にて製した文字と見え、訓はあれど音なく、また親族部・草木異名・雜字・重點・連字・臨時雜要字等あり、字書としては尙體裁の統一を缺くといつて可い。天治元年四月若しくは五月の奥書ある抄本十二卷、安政年間京都吉田の祠官鈴鹿連胤の發見する所にて、今東京國立博物館の有に歸す。奥書によれば法隆寺にて一切經書寫の際、その音義を質すために署名の各人一卷づつを書寫せりとある。

東寺觀智院所藏の類聚名義抄は篇目一卷本文十卷より成る。漢字を偏傍によつて分ち、之に音及び訓も附した字書である。文化十年伴信友が本書を新寫し、異本を以て校合し了りたる時、叙を作つて「類聚名義抄者、爲何而作、古人爲譯漢字而作也、其爲書也、字體多特異、音譯亦奇古、苟欲涉獵和漢之古書、得置諸座右、其裨益豈少々哉」といつてゐる。本書を菅原道眞の父是善の作とするが、それは西念本の本書殘篇の端に「菅原是善卿作」とあるからで、他に確證はな

い。觀智院本の最後に「書本云、仁治二年^{辛丑}九月六日於賀茂奄室交點畢云々」といふ識語がある。仁治二年は鎌倉幕府創立後九十年であるが、新撰字鏡・和名抄・色葉字類集等、小字書類の續出から推して、本書を平安朝後半期の著作と認めて大過なからう。

本書は玉篇によつて體裁を立てたといふが、漢字そのものは偏傍ばかりで檢出することは出来ない。撰者自身が「於次第一取相似者置隣也、於字數少者、集爲雜部」と稱してゐる位で、排列法は決して完全とはいへぬ。小山田與清が自用のため本書の訓を集めて伊呂波別にした索語九卷を作つたはこれが爲である。

源順の倭名類聚抄は十卷本二十卷本の二種あり、孰れを正本となすべきか。狩谷掖齋は箋註倭名類聚抄を撰ぶに當り、十卷本を以て定本としたが、近年和田英松氏は二十卷本を以て原本に近きものとした。その理由は權記寛弘八年十一月の條に、和名類聚抄四帖とある。保阪潤治氏所藏の同書古抄本は高山寺舊藏本で、平安朝末期を下らざるものであるが、第六郷里部より第十居處部に至る五卷を一帖に仕立て、あるから、二十卷を四帖としたもので、權記の記事に合すといふ點にある。十卷本は二十四部百廿八門、二十卷本は三十二部二百四十九門となつて居るが、序文を見ると「上學天地、中次人物、下至草木、勅成二十卷、卷中分門、部中分門、四百部二百六十八門」とある。さすれば今の二十卷本も原本とはいへまい。

順は嵯峨天皇の皇子源定の孫で、勘解由次官能登守となり、永觀元年七十三歳で卒してゐる。本書は順が醍醐天皇第四の皇女勤子内親王のために撰進したものである。名古屋眞福寺所藏の十卷本類聚抄斷簡は鎌倉初期の古文書及び具注曆の紙背に書寫せらる。具注曆の紙背が屢々古書の抄寫に利用せられてゐることは注意に値する。

色葉字類抄三卷は内膳典膳橋忠兼の撰で、同人の跋文に「自天養比、至于治承卅餘年、補綴无隙、部類如舊、更加星點、云々」とあれば三十餘年の補訂を経て大成したものである。蒐輯した詞全部を伊呂波四十七篇に分ち、毎篇天象・地儀・植物・動物・人倫・人體・人事・飲食・雜物・光彩・方角・員數・辭字・重點・疊字・諸社・諸寺・國郡・官職・姓氏・

名字の二十一部門を立て、排列し、片假名で訓を注してゐる。詞を部門別にするのは和名抄と同じ形式であるが、更にこれを伊呂波別にして檢索の便を計つた所に本書の特色がある。前田家本は中卷全部と下卷の一部とを缺くが、本書完成同時代か、さうでなくとも完成後間もなく抄寫せられたものであることは、下卷跋文の上部に、天養から治承の次の養和に至る

傳教大師將來台州錄

日本國求法僧寂澄等勘定合疏記等壹佰貳部貳

百肆拾卷之中

別編圖壹卷但疏紙
陸行捌佰玖拾陸紙

妙法蓮花經玄義十卷

智者大師出

二百七十二紙

妙法蓮花經玄義釋十卷

荆溪和尚撰

三百四十三紙

妙法蓮花經文句疏十卷

智者大師出

三百二十七紙

妙法蓮花經文句疏記十卷

荆溪和尚撰

五百一十五紙

第十二圖 傳教大師將來目錄(二分の一)

までの年號と年數とが列記されてゐるので證明せられる。尙内容において殆ど本書と同様で、世俗字類抄と題するものが彰考館に存し、卷首に源周光撰とありといふ。實物を見たのではないから兎角の議論を避けよう。

天平七年吉備眞備が唐から歸朝の際に將來した漢籍目錄があつた證據はあるが實物は傳はらない。芸亭の目錄も同斷である。天平二十年の寫經疏目錄に漢籍四十三部と國書一部（帯紀とを載せてゐるが、之は佛書を主とした目錄で、佛書の目錄なら寫經疏目錄以前に二部あり、平安朝に入つてからは、傳教・弘法・慈覺・智證等各大師の將來目錄をはじめとし、數々ある。漢籍の目錄として現存するは、仁和寛平の頃藤原佐世が敕を奉じて撰録した日本國見在書目錄

上新請來經等目錄表

入唐學法沙門空海來言空海著以延
曆廿三年銜 命留學之末阿津
萬里之外其年臘月得到長安廿四
年二月十日在勅配任西明寺爰別
周遊諸寺訪釋師依幸遇青龍寺
頂阿闍梨法辨惠果和尚以為師主其
大德則大興善寺大德智不空三藏

第十三圖 上新請來經等目錄表（二分の一）

ら寫經疏目錄以前に二部あり、平安朝に入つてからは、傳教・弘法・慈覺・智證等各大師の將來目錄をはじめとし、數々ある。漢籍の目錄として現存するは、仁和寛平の頃藤原佐世が敕を奉じて撰録した日本國見在書目錄

が最古のものである。

國書の目錄は承安四年後白河法皇の院宣により、吉田經房等十餘人が蓮華王院の寶藏に會して目錄撰進に従つた記事はあ

るが、その結果は傳はらぬ。現在世に存するは（一）本朝國史目錄（二）本朝法家文書目錄（三）和歌現在書目錄の三部で、（二）は六國史の目錄だから、延喜元年六國史完成以後の著なるに相違なく、（三）は平治の亂に殺された通憲入道の藏書目錄に見え、また（一）は日本國見在書目錄の名稱を襲つたもので、仁安三年の序文がある。嘉永年間塙氏が木版本續群書類從の見本として頒布した數部中、第四百六十には和歌現在書目錄及び和歌合略目錄の二部を收め、第八百八十四には日本國見在書目錄を載せてゐる。書名において父子の關係ある二目錄を開版したのは、一奇と言はざるを得ぬ。

日本國見在書目錄は卷首に正五位下陸奥守兼上野權介藤原佐世奉勅撰とある。佐世の小傳を按ずるに、彼は式部卿宇合の裔、貞觀中對策及第して文章得業生に擧げられ、陽成天皇始めて孝經を讀ませ給へる時、都講となり、元慶八年大學頭、寛平三年陸奥守に任じ、昌泰元年卒す。子孫相次いで儒を業とし、世に式部家と稱すとある。さすれば本書の撰進が寛平三年以後であつたことは明白だ。とはいへ京師を距ること數百里外の陸奥國において、書目の編輯は不可能と思はれる。陸奥守に任ぜられてから間もなく本書を上進したに止り、編輯はその以前に成就したものと見てよからう。

日本國見在書目錄

合次家

正五位下行陸奥守兼上野權介藤原朝臣佐世

奉勅撰

易家、尚書、詩、禮、春秋、孝經、論語、異説、小學、正史、古史、雜史、西朝史

第十四圖 日本國見在書目錄（三分の一）

軒の文によれば、「貞觀乙未冷泉院火、圖書蕩然、蓋此目所因而作、而所以有現在之稱也」とある。成る程貞觀十七年正月廿八日の夜冷然院に火災あり、屋舎五十四宇に延焼し、秘閣收藏の圖書

文書を擧げて灰燼となつたことは正史に見えてゐる。秘閣收藏の圖書と雖も、時節到來すれば灰燼に歸す、須らく現在の書目を編輯して後鑑に備へよといふ趣旨で、本書が編輯されたとすれば、書名の見在の二字は意義甚だ明瞭であるが、編輯着手が貞觀火災直後か三五年後か、一向判然しない。それから本書を通覽すると、隨所書名の下に冷然院或は冷泉院と注記して、その書が嘗て冷然院に藏せられてゐたことを示してゐるが、冷然院を改めて冷泉院と稱したは貞觀火災後八十年天曆八年三月のことである。然らば冷然院冷泉院を混用した續類從本の底本は、天曆八年若しくはその以後の寫本で、決して原本でもなく、また原本を忠實に寫したものでないといへる。

續類從本の底本は大和室生寺の舊藏で、京都の書林某の手許にありし時、橋本經亮は之を一覽しながら、「寫し置かざりしは遺恨なり」と、後日に至り彼の梅窓筆記に記してゐる。文政年間狩谷校齋入洛の節、價を厭はずして本書を購ひ歸りしより、博く學界の知る所となり、校齋歿後諸家を轉々すること三十年、門人森立之の手に歸し、明治十三年立之より筆墨商高木壽頌に傳へ、同人より更に帝室博物館（今の國立）に寄贈した。箱蓋裏に、明治庚辰春日七十四翁森立之の記文一篇がある。

本書は縦九寸三分横五寸七分の粘葉綴で、表紙・本文・裏表紙を加へて合計四十八張、全部同質の斐紙を用ふ。表紙に外典書籍目録と題し、左下に室生寺と記せど、内題には日本國見在書目録とあり。本文は一紙の両面に書寫し、一面六行の白界を施す。本文第七張裏に大和室生等の朱印、終張末行の下に校齋の黒印、初張書名の下に森氏開萬冊府之記、第十八張裏に森氏、裏表紙内面に「高木壽頌藏書之記」の朱印がある。

支那における書籍目録で現存するものは、漢書藝文志を第一とし、(甲)隋書經籍志(乙)舊唐書藝文志これに次ぐ。今見在書目録の撰修年代を(甲)(乙)のそれと比較するに、(甲)に遅ること二百三十年、(乙)に先立つこと四十餘年である。若し佐世が見在書目録編修に當り、範を支那の書目に求めたとすれば、(甲)によるより外はない。試に兩者を取つてその分類法を對照すると、殆ど同一と稱して宜い。見在書目録の分類左の如し。

- (一)易家 (二)尚書家 (三)詩家 (四)禮家 (五)樂家 (六)春秋家 (七)孝經家 (八)論語家 (九)異說家 (一〇)小學家 (一一)正史家 (一二)古史家 (一三)雜史家 (一四)霸史家 (一五)起居注家 (一六)舊事家 (一七)職官家 (一八)儀注家 (一九)刑法家 (二〇)雜傳家 (二一)土地家 (二二)譜系家 (二三)簿錄家 (二四)儒家 (二五)道家 (二六)法家 (二七)名家 (二八)墨家 (二九)縱橫家 (三〇)雜家 (三一)農家 (三二)小説家 (三三)兵家 (三四)天文家 (三五)曆數家 (三六)五行家 (三七)醫方家 (三八)楚辭家 (三九)別集家 (四〇)惣集家

兩者の相違は、經史子集の四部が彼に存して我になきこと、彼に緯書とあるを我は異說家とし、彼に地理家とあるを我は土地家とせる三點だけである。

我はまた彼に倣ひ、四十家の下にそれ／＼卷數を注記してゐる。例へば(一)易家百七十七(二)天文家四百六十一卷の詩類であるが、(三)家(八)儀注家(三)小説家には何等の注記が無い。如く本とは、この寫本の底本にある如く、書名を列舉した意、私略之とは、書名中省略したものがあつた意と解せらる。室生寺本が原本でもなく、また原本の忠實な寫本でもないことは、冷然院冷泉院の新舊二名を混用することによつて既に證明せられ、今また各家の下にある二様の註記によつて證明せられた。誤字・脱字・文字の顛倒・連續の不完全等、一々擧げれば際限が無い。従つて彼の目録には每部の部數卷數は勿論四大部の部數卷數を擧げてあるが、我が部數卷數の惣計は、學者により區々として一定してゐない。或は一五七九部一六七九〇卷といひ、或は一五八六部一六七三四卷といふ。

日本見在書目録は稀有の目錄である。假令室生寺本が不完全不十分の寫本であるにせよ、吾人は本書によつて、如何なる漢籍が、一千年以前の日本に存在して、本邦の文化に貢獻したかを研究し得るばかりか、夙に支那に散佚した古典籍にして我國に存在するものを、再び彼に還す名譽を得た。即ち安政中林述齋は佚存叢書中に古文孝經孔傳一・五行大義五・臣軌二・樂書要錄三・兩京新記一・李嶠雜詠一・文館詞林四を刊行して清朝學者の激賞を被り、又清國公使黎庶昌氏は古逸叢書中に御

注孝經一・玉篇零卷三・玉燭寶典十一・文館詞林十・瑞玉集二・日本見在書目一等を編纂刊行して、書誌學界に不朽の名を残した。

支那との國交は菅原道眞の奏請によつて斷絶した。その主なる理由は唐末の衰亂にあることは言ふまでも無いが、唐亡んで宋起るに及び、兩國間の交通はまた開けた。東大寺の僧齋然は弟子數人を伴ひ、永觀元年八月を以て眞先に入宋したのであるが、彼の歸朝に際し、朝廷から大藏經一部と新譯經二百六十八卷とを賜はつたことは、書誌學上の一大事件である。宋では開寶四年から太平興國八年へかけて大藏經の雕版が成就してゐるから、齋然に下賜せられたはこの新刊に相違ない。さうしてこの大藏經は無事に日本に將來せられ、齋然寂後藤原道長の建てた法成寺に安置せられた。尙この外道長は刊本の白氏文集を宋から歸朝した僧念救から貰つたこともある。以上は道長の日記に見える所であるが、刊本即ち摺本が特に愛重せられた状態は藤原頼長の日記にも見ゆ。平安朝の末期摺經摺佛の流行は支那將來の印刷物に負ふ所大なりと考へる。

學者であり且つ藏書家であつた少納言藤原通憲即ち入道信西の末路は、藤原頼長同様極めて悲酸である。通憲の二大著述は完全に残らないが、彼の藏書目録は群書類從卷四九五に收められてゐる。

參考書

- 諸家點圖 (經濟雜誌社本群書類從第十七輯)
- 古點譜 乎古止點譜 (國書刊行會本續々群書類從第十)
- 文藝類纂一二
- 尙書及び日本書紀古鈔本に加へられたる乎古止點に就て 吉澤義則 岩崎文庫 大正八年
- 新撰字鏡四考異 二册 享和三年
- 同 (經濟雜誌社本群書類從第十七輯)
- 同附改並索引 七册 大槻文彦 大正五年 六合館

- 類聚名義抄國書院本 五册 昭和十三年 (日本古書全集第六期)
- 和名類聚抄 元和活字本 七册 源順 昭和七年 (日本古書全集第四期)
- 箋注和名類聚抄 十册 狩谷掖齋 明治十六年 印刷局
- 伊呂波字類抄 十册 大正七—九年 (日本古書全集第三期)
- 色葉字類抄 二册 (尊經閣叢刊) 大正十五年
- 本朝書籍目録考證 和田英松 昭和十一年 明治書院
- 國語學書目解題 赤堀又次郎 明治三十五年 東京帝國大學藏版
- 日本現在書目録 藤原佐世撰 續群書類從八百八十四 (木版本)
- 日本國見在書目録 古典保存會本 大正十四年
- 日本現在書目證注稿 狩谷掖齋 日本古書全集刊行會本 昭和三年
- 室生寺本日本現在書目録攷 中根肅治 寫
- 日本見在書目録に就いて 和田英松 昭和五年 (史學雜誌四十一卷九號)
- 日本國見在書目録解説稿 小長谷惠吉 昭和十年 (書物の周圍二卷一、二號)

第八章 春日版

春日版といふ名稱は何人が使用し出したか、何ういふ種類の出版物の總稱であるか、明白な定義は無い。然し春日燈籠、春日机といふ名詞から類推すると、奈良の春日神社に特有の出版物と解釋せられるが、こゝでは神恩感謝の意味を以て、開版の上、神社に奉獻せられた經卷類を指すのである。

平安朝の半頃から未曾有の權力を有した藤原氏の氏神が春日明神であり、氏寺が興福寺であり、さうしてまた興福寺が春日神社の實際の支配者である點から考へれば、興福寺の出版物が春日神社に奉獻せられたことは容易に首肯せられる。春日版といふ名稱はこの意味で起つたものと思ふ。然しながら多數の經卷の中には、末尾にある刊記によつて、春日版であることを明白に立證し得るものもあるが、得ざるもあり、また全然刊記を缺くものさへある。前章に記述した寛治版の成唯識論の刊記には、それが興福寺衆僧の協力によつて成つたことは明記されてゐるが、春日神社に奉獻したか否かに就いては一向觸れて居らぬ。とはいへ寛治から鎌倉時代に互り、成唯識論及びその注疏が度々興福寺で開版され、さうして同書が興福寺の屬する法相宗において、最上の聖典である點から推考すると、寛治版を以て現存春日版最古のものとして認めて差支あるまい。要するに、春日版は寛治の成唯識論を先驅とし、主として鎌倉時代において、興福寺その他南都の諸大寺で刊行せられた經卷類を指す、と解釋するのが穩當であらう。

平安時代の寫經と刊經とを比較すると、雙方一行十七字で、書體も亦甚だ類似してゐる。強ひて相違を挙げれば、一方は有界行間の罫線を界といふ他方は無界であるだけだ。古代の刊行物が、當時流行してゐた寫本に、成るべく接近せんと力めたことは、日本ばかりでなく、歐洲も同斷で、活字發明後先づ流行したは、當時の寫本に見るやうなきごちないゴチック活字で、優美

なローマ活字は後から出た。鎌倉時代の春日版は平安朝時代の様式を襲つてゐるが、前期と相違する點は、料紙が強靱になつたこと、墨色が著しく漆黒となつたこと、及び裝潢において卷子本の外に折本、粘葉綴デフチヨウのものを見るに至つたこと等である。

治承四年十二月平重衡の南都焼討により、興福東大兩大寺をはじめとし、幾多の堂社佛閣は灰燼となり、死者一萬二千三百餘人(二〇三)に及んだ慘狀は、詳に長門本平家物語卷十に見え、その一節に「然るべき所々は院の御堂、長者の御塔、四面の廻廊、門樓、一切經藏、章疏形木シヤクキ、率川社佐保殿もやけにけり」とある。形木は模即ち板木のこと、經藏に收めた經卷は勿論板木に至るまで焼亡したといふ意味だ。然しながら鎌倉初期に於ける復興の勢は凄まじいものがある。今日大工事と認められる東大寺大佛の修補さへ難なく成就した。經卷の開模印刷は倍舊の勢を以て進行し、成唯識論十卷の如きは、建仁元年・承久三年・文永四年と、引續き三度まで開版せられた證據がある。尙この時代或はその前後に異版が出て居りはせぬかと注意してゐる位だ。

漏九根一切皆是具知根性有頂雖有遊觀
无漏而不利非後三根二十二根自性如
是諸餘門義如論應知

成唯識論卷第七
文永三年冬

東大寺

第十五圖 成唯識論卷第七(三分の一)

(1)、(2)は刊記により、(3)は卷末の墨書による。(1)の刊記の末に「建仁元年八月十三日始之、至同二年六月廿日終功畢、施入沙門要弘」とある。十卷の板木を作るに十ヶ月を要してゐる。また(2)の刊記の末には「沙門弘睿蒙滿寺衆命、造唯識論模二矣、承久辛巳初秋下旬彫刻功畢」とあるのみだ。(3)の墨書は挿書を見よ。三は四の異體字なり。

承久に成唯識論を開版した弘睿は、是より先、興福寺真心上人の命により、都鄙の貴賤を勸進して瑜伽師地論百卷の開版に着手し、建曆二年を以て成就したのみならず、承久以後更に四部二十五卷、即ち因明正理門論卷一及び辨中邊論卷三を貞應元

年に、大乘莊嚴經論卷十三を翌二年に、妙法蓮華經を嘉祿元年に開版してゐる。かく印刷史上有數な彼の經歷につき、その生歿年月すら判明せざるは千秋の恨事である。

鎌倉時代に至り、經典の開版者として指を屈すべきは、興福・東大・西大・法隆の四大寺である。従つてその出版物が各寺の屬する宗派、例へば興福寺が法相宗、東大寺が華嚴宗、西大寺が律宗に關する經典を主としたは勿論であるが、興福寺の僧侶の手で、法相宗に特別の關係ありとは思はれぬ法華經や最勝王經が、一再ならず開版せられ、更に大般若經の如き大部のもの、彫刻さへ、貞應に始り嘉祿に完成してゐる所を以て見れば、當時の出資者及び出版者は、氣宇開豁、一宗一派に偏せず、佛法王法のため、一途に隨喜協力したものと云へる。さうしてこの協同の精神は文永弘安の外寇撃退以後一層盛大となり、日本佛教の最初の恩人聖德太子に對し奉り、追慕崇敬の念を白熱化せしめたのであらう。

その第一は承久二年佛子乘願が悲母の十三年に當り、太子の手澤本を以て校合した梵網經二卷を開版したことで、この經卷の題簽は太子の御手の皮を貼つたものだ古今目録抄と傳へられてゐる。第二は弘安八年十七條憲法第一圖及び四節文本文は聖德太子傳の刊行、第三は寶治元年三經義疏の刊行で、この中刊記のあるのは法華義疏第二圖だけであるが、勝鬘維摩の二義疏が全然之と版式を同じうしてゐる所から見れば、三者の刊行が、假令同年ならずとも相接近してゐるに相違ない。前記第二第三は太子の御著作で、それ等の板木は文永三年菩提寺一名橋寺の比丘證圓開版の勝鬘經、翌四年東大寺眞言院住持聖守シヤウシュ開版の維摩經三卷の板木と共に、悉く法隆寺に現存する。但し三經中法華經の板木の無いのは聊か不審だが、同經は他の寺で刊行せられた分が、既に相應流布してゐたからであらう。

聖守は俗縁でいへば弟に當る圓照と力を勤めて戒壇院の律紀を振起し、また三論宗の本所である眞言院を再興してゐるが、出版者としては前掲維摩經の外に、即身成佛義・般若理趣經等五部の經卷を建長三年から建治二年に至る二十五年間に刊行してゐる。

戒壇院では同院の中興と稱せられた圓照の多數の弟子中、凝然(ギョウネン)が特に名高く、博學宏才、辯舌に長じ、後宇多上皇の御召に應じ、宮中で華嚴五教章を講じたといふ。この經は弘安六年彼の弟子禪爾により、縦九寸弱横五寸の大きな折本として開版せられてゐる。凝然は元亨元年入寂、世壽八十二歳(トクニ)。長壽であつたとはいへ、一代の撰述凡そ一千一百餘卷とあれば、假令それが「疏鈔」であつても、大した著述家と言ふべきです。然しその著述の大半は永祿の兵火に灰燼となり、元祿年間戒壇院に存するもの纔に十の一、それも多く蠹害を被つてゐると、目撃者の記事にあるのは悲惨だ。

弘安の五教章に比べて、開版の苦勞が五倍十倍したと思はれるのは法華義疏十二卷で、毎卷刊記を異にしてゐるが、それ等を通覽すると、永仁元年着手、同三年成功、板下の筆者は入宋二回の沙門慧策、彫刻者は勝弘・明眷・久信・盛祐・快賢・嚴順の七人、施主は廣隆寺衆徒・同寺桂宮院住持澄禪、東大寺三論宗學徒その他多數の僧俗男女で、都幹縁即ち世話役は沙門素慶とある。素慶の傳は遺憾ながら不明だ。廣隆寺は今眞言宗に屬するが、もとは眞言兼三論であつた。本書の如く彫刻者の氏名を列記することは未曾有の新例で、恐らくは宋本輸入の影響であらう。

西大寺は觀尊(コウシャウ)忍性(ニンシャウ)師弟相受け、奈良朝以後戒法の勃興この時を以て最も盛なりとすと稱せらる。兩師が持戒嚴正、博學にして講説に長じ、稀有の長壽を保つて照勉倦まざるは勿論、現代語を以て表現すれば、更に國家的社會的事業に従事し、布教の範圍を京畿に限らず、遠く關東に擴張したに因る所多しと言ふべきである。

弘安四年後宇多天皇南北兩京の僧五百六十餘人を招いて蒙古降伏を祈らしめ給ふ。觀尊その選に上り、男山八幡宮社前に衆を集めて仁王會を開き、神前に告文を奏せしが、已にして西海に大風雨あり、賊船悉く漂没すとの報あり。天皇觀尊を召して崇敬甚だ渇く、菩薩戒を受けて弟子の禮を執り給ふといふ。同じ頃忍性も亦執權北條時宗の請に應じ、稻村崎に仁王會を開いて、敵國降伏を祈つた。

是より先建長四年忍性は關東教化の任に當らんことを觀尊に請ひ、常州清涼院に留ること數年、弘長元年鎌倉に入り、執

權北條時頼以下一族將士の尊崇する所となつた。されば翌年觀尊の鎌倉に下向するや、大小の武士及びその家族殊に女性は忽ち彼の周圍に蟻集して隨喜渴仰し、數百人同時に授戒すること、敢へて珍しからず。彼の侍者の執筆に成る關東往還記に、「五月十七日最明寺禪門(時)於將軍御前、此上人之德行、超常偏之由、種々稱美、依之上下彌傾首、逐日競集。」また

常得不離見一切佛及諸菩薩聲聞弟子不離聞法不離親近於養衆信於諸善根常精進求心無厭足常於菩提種種行願心無厭足

古述記輔行文集第二

南太文永十一之夏至于建治第二之春杖
前光原集三載 華文真派通現代杖甚謹行矣
建治二年 二月二日西大寺沙門觀尊

金澤傳説

第十六圖 古述記輔行文集第二 (三分の一)

「十九日夜、上下三百八十五人受菩薩戒、今度者諸大名并妻子、評定衆奉行以下、所々家人等濟々受之。」とあるを以て知るべきだ。忍性は聖德太子の御遺業に倣ひ、所々に療病院悲田院を作つたが、その中桑谷の療病所では二十一年間に患者五萬七千二百五十人を收容し、全治者四萬六千八百人を出したとある。彼はまた土木及び建築に特別の才能があつたと見え、修營の伽藍八十三所、塔婆二十基、大藏經十四藏、諸州の架橋百八十九所といふ。大阪四天王寺の石の鳥居が彼の意匠に成つたことは有名な話である。

是等の事情を知れば、西大寺の出版物が他寺に比して群を抜いたことは容易に點頭ける。從來わが國の刊經は漢譯の佛經を翻刻するに過ぎず、聖德太子の御遺著三經義疏の出版は稀有の例であるが、西大寺では觀尊の著述大乘入道科分・同次第・梵網古述記科文・同輔行文集等を著者在世中に開版し、正應三年彼の入寂後も、尙引續き梵網經、古述記外數部を開版してゐる。正和五年後住信空の百箇日忌日に際し、律法弘通のため群集の僧侶に施した律宗作持羯磨及び教誡新學比丘行護律儀

は刊記に各、一千卷を印刷したことが記されてゐる。それから西大寺の出版物がその版式において、從來の奈良刊經と相違し、著しく宋版の影響を受けてゐることは特に注意すべき點である。

忍性は大藏經十四藏を造つた。是等の經藏には寫經を納れたか、奈良朝時代官府の力を傾け盡くして漸く一部の大藏經を書寫した程であるから、こゝでは刊經を納めたものと見るべきであらう。支那では宋の太祖の開寶四年から太平興國八年へかけて大藏經が彫造せられてゐる。日本の僧裔然(ウツク)はこの大藏經が出来上つた翌年即ち雍熙元年に入宋し、同三年歸還するに方り、その一部を賜はつた。その後入宋の僧侶も少からず、また高麗から數千卷の經卷を輸入した記事もある。例を挙げれば、京都泉涌寺の中興と稱せられる俊苧(シユンショウ)は、正治元年入宋、建曆元年歸朝してゐるが、その傳來する所、律宗の經鈔三百二十七卷、天台の章疏七百十六卷、楞嚴の章疏百七十五卷、儒書二百五十六卷、雜書四百六十三卷、凡そ二千百三卷といふ。支那朝鮮刊行の經卷類は多數日本に流傳したに相違ない。

泉涌寺は西大寺と同じく律宗で、眞言を兼ねてゐる。俊苧の將來せる宋版及び同寺におけるその覆刻が西大寺の出版物に影響を及せるは毫も怪しむに足らぬ。泉涌寺の出版物中特に注目すべきは、寛元四年道玄(俊苧の孫弟子に當る)の刊記ある比丘六物圖で、僧侶の衣服器具等を挿畫入で説明した粘葉綴の一冊本である。書物の挿畫としては、之が今日までに知られた最古のものであらう。

參考書

- 寧樂刊經史附錄 圖版 二冊 大屋徳城 大正十二年 内外出版株式會社
 春日版彫造致 大屋徳城 昭和十五年 便利堂
 元享釋書三十卷 師鍊 (經濟雜誌社本 國史大系第十四卷)
 本朝高僧傳三十二冊 師繼 寶永四年(貝葉書院新編)

第九章 高野版

鎌倉時代に至り高野一山の衆徒は開版事業に顯著な成績を示し、近年それ等の出版物を總括して高野版と稱することゝなつた。

弘法大師が金剛峯寺を開いてから、現存最古の高野版三教指歸(サンカワシキ)の刊年建長五年まで四百三十餘年、その間若干の出版物があつたらうとは、何人も容易に揣摩付度する所であるが、それを立證するだけの資料が無い。否、一二の記事は存するが、記事そのものに疑がある。例へば嘉保三年維範阿闍梨が法華經一部不動尊の板像一萬射を摺寫して供養したとか、建仁元年京都の經師大和屋善七が登山開店したといふ類である。摺寫は開版の義である。折角開版した法華經を僅に一部だけ印刷したといふ點は、何としても腑に落ちぬではないか。また經師の登山開店は印刷裝潢に關係ありとは認められても、大和屋といふやうな屋號が鎌倉初期にあつたか、覺束ない。

わが國の佛教諸派中、南都北嶺の如く、彼我拮抗對捍相讓らざるもあつたが、金剛峯寺と奈良諸大寺との如く親密融和相乖らざるもあつた。その最も著しい例として、東大寺眞言院の聖守が弘法大師著作の御身成佛義及び般若理趣經を開版してゐることを挙げよう。三論宗の本所の眞言院で、密教の經典を出版するとは、一應理解に苦しむが、當時の僧風が顯密二派に拘泥しなかつたと解釋すれば、之は容易に首肯せられる。そのみならず、初期の高野版が書體及び裝釘において春日版に類似してゐる理由も明白となる。

建長五年版の三教指歸(三)の刊記には、「酬四恩之廣徳、興三寶之妙道、此吾願也云々、仍謹開印板矣、建長五年(癸丑)十月日金剛峯寺阿闍梨快賢」とある。同人の名は同年から正嘉三年まで僅々七年間に出版せられた八部の經典に見え、その中十

住心論・釋摩訶衍論・性靈集は每部十帖、大毘盧遮那經疏は二十帖ある。さうして是等の中には刊記に快賢以外の人名を記した分もあるが、兎に角彼の名は高野版の先驅者として忘却すべからざるものなるに生歿年月學統等一切不明なのは殘惜し

悉曇字紀

弘安三年四月一日於金剛峯寺信藝書

為續三寶慈命於三會之出世
廣施一善利益於一切之衆生
是引中大師之遺言信令人心
小之又心願す以用常板六
弘安三年十一月日
從五位上行秋田城介藤原朝臣景盛

長蓮光塚房

五年泰盛が高野山に建てた町石チヨシによつて證明せられる。これは長さ九尺一寸幅一尺四角の五輪卒都婆で、里程標兼供養碑である。

安達氏と高野山との關係は景盛の時に始まり、泰盛に至つて一層親密の度を増した。景盛は大蓮房覺智と稱し、寶治元年三

浦氏の一門滅亡の際、山を下つて鎌倉に入り策畫する所があつたと言ふ。然るに泰盛の經典開版が、奉行任命以前の盛大なるに引替へ、任命以後頓に挫折し、彼及びその一門は三浦氏同様の運命に陥つた。

泰盛が開版した經典は建治三年から弘安三年に至る四年間に、合計七部三十一帖に達し、その中最も冊數の多いのは大毘盧遮那經疏二十帖で、これは建治三年八月から弘安二年四月へかけ、僅か一年半で完成した。第二十帖の尾にある金剛佛子良和の識語によれば、本書は願主泰盛が仁和寺二品大王に懇請借用した證本兩帙と當山中院明算阿闍梨の自筆本とを底本とし、學侶十數輩を招いて校訂に従事し、尙疑ある時は諸本を披いて審決したと記し、二三の實例をさへ擧げてゐる。古書校訂の難き、古今同一と言はざるを得ない。

泰盛版の刊記に見える一特徴は、所謂版下を書いた僧侶の名と書上げた年月日とが記されてゐること、書體は大體において奈良刊經のそれに類してゐる。是等の中最も名筆と思はれるのは信藝で、前記大毘盧遮那經疏は全部信藝の一筆である。

安達氏は亡んだが、開版事業は弘安九年金剛三昧院第十一代の長老となつた慶賢によつて繼續せられた。彼の最初の出版物は建治三年即ち長老就任以前であるが、就任後特に精力を盡くし、正應元年釋摩訶衍論記六帖及び釋摩訶衍論贊玄疏五帖の出版を完成してゐる。さうして後者の刊記に、本記は壽昌五年高麗國大興王寺の彫造で、仁和寺禪定二品親王の命により、太宰帥藤原季仲が高麗國より取寄せ、長治二年五月專使を以て差出したものだである。これと同じ文章が弘安五年刊釋摩訶衍論通玄鈔四帖の末に見え、それには金剛三昧院第十代良俊の識語がある。以上によつて吾人は高麗版の輸入とその翻刻との實例を得た。

慶賢は正安四年八十二歳の時、上新請來經等目錄表を出版し、その翌年を以て歿してゐる。彼が一生を通じて刊行した經卷は八部二十六帖に上り、建長以來五十年間、隆盛を極めた高野山の出版は、こゝに一段落を告げた。勿論彼の歿後慶賢に至る二百年間、高野版の刊行が絶無といふのではないが、微々として振はなかつたは蔽ふべからざる事實である。

水原堯榮師の研究によれば、高野版には(一)文應元年(二)正安二年(三)延慶四年(四)元應二年(五)元亨三年の寫本目錄五種が存在する。この中(三)の原本は元應二年四月に佛子了性(Chōshō)が書寫した折本(Chōhon)帖(Chō)で、もと如意寺、現在は親王院の所藏であるが、その影寫本が幸ひ自分の手許にあるから、それによつて若干の解説を加へよう。

第一帖は高野山印板聖教目錄と題し、大日經疏から禮懺に至るまで、三十七部の書名・帖數・丁數・若しくは卷數・枚數を擧げ、每部を上中下の三品に分つて、代錢を、また帖數卷數多き分は特に摺賃を記し、最後に「右注進如件 延慶四年四月 日」とある。書名に略稱(例へば大毘盧舍那成佛神變加持經を略して大日經といふ)を用ひ、著者名及び刊年を略したは、現時の目錄記載法に叶はぬが、代價摺賃等を明記した點から考へると、これは經師の書出した販賣目錄であらう。今日經師屋といへば、袿具を業とするものを指すが、古くは佛經を卷子本又は帖に仕立てるものを經師と稱し、摺寫も亦彼等の支配する所であつたらし。

第二帖は教相目錄及び(四)高野印板注文の二部より成り、前者は三十七部、後者は三十五部の書名を擧げ、(三)同様に帖數・卷數・直段附等を記入してある。教相目錄には筆者の氏名も書寫の年號もないので、それが何年頃の目錄であるか判定に苦しむが、直段附は(三)のやうに上・中・下三品の區別なく、單に一種で、而もそれは(三)の下品の分と全然同一である。之に反して(四)高野印板注文目錄の直段附は古定新定の兩種に分れ、雙方とも(三)の上・中・下三種の何れにも合はない。(三)の相距る十年を過ぎざるにかゝる相違があるとすれば、教相目錄は(三)と同年か、然らずとも其前後一二年の中に執筆せられたものであらう。

要するに以上皆販賣目錄である。とはいへその存在は決して輕視すべき問題ではない。徳川時代に入り、寛永から享和まで數回に互つて出版せられた書籍目錄が、實は販賣目錄であつたことを思合はすべきである。

自分は前章において西大寺と泉涌寺、また本章において金剛峯寺と仁和寺との關係を一言した。源賴朝が幕府を鎌倉に建

てゝから、朝廷は政權をこそ失ひたまひけれ、禮式及び和歌の中心として儼存し、洛中洛外の諸大寺も、前代に比して隆替の差あるに過ぎなかつた。經典開版が奈良高野に盛大を極めるに及び、京都方面がその影響を受けぬ筈はない。

就中活動したは東山知恩院を本山とする淨土宗である。この派は源信(Genjin)(惠心僧都)が往生要集を著して淨土往生を鼓吹したに始り、源空(Genkō)が九條兼實のために選擇本願念佛集を撰ぶに至つて大成したと稱して宜い。大衆の信仰と之を促す幾多の出版物とは互に因となり果となり、現在知られてゐる分だけでも、建仁から元亨に至る一百二十年間に開版せられたもの數十部に上り、就中選擇集往生要集の如きは、異版數種を見るに至つた。

是等の刊經は文字の風格及び裝釘において全く前代の系統を引いてゐる。然し全然新奇の一現象として、沙門了惠編の黒谷上人語燈錄(Kokoku)帖(Chō)が平假名交りで印刷せられたことを擧げたい。從來の出版物は假令純粹の漢文ならずとも、都べて漢字の連續であつたが、是に至つて始めて漢字平假名交りの文章が印刷せられたのである。同書の刊記は左の通。

元亨元年辛酉のとし、ひとへに上人の恩(On)徳を報(Uchi)したてまつらんかため、又もろくく(Mokuroku)の衆生を往生の正路におもむかしめんかために、この和語の印板をひらく。」

一向專修沙門南無阿彌陀佛圓智 謹疏

沙門了惠感歎にたへず、七(Shichi)十九歳の老眼をのこひて和語七卷の印(In)本を書く。

元亨元年辛酉七月八日終謹疏

法橋幸嚴卷頭

醍醐寺は眞言古義宗であるが、中世以來その座主が東大寺の東南院主を兼ね、且つその唯一の刊經大乘玄論帖(Daijō)が三論宗關係のものである所から推して、春日版の影響を被つたとも言ひ得る。本書の刊記は永仁三年三月比丘寂性の書いたものであるが、それによると、是より先弘安三年清瀧宮法樂のため本書を開印した所、回祿に遭つたので、改めて再版する云々とあ

書誌学正誤表

(頁・行) (誤)
 一・一一二 ビブリオグラフィ
 二・一一二 小宮山壽海
 六・一 フビトベ
 〃・四 判定
 一六・七 年以後のものが
 〃・一二 亞非利加
 一七・三 (60)
 一八・一八 六十二卷
 一九・二 盧舍那の
 二二・一六 租帳
 二四・二 四十三卷・續集
 二八・四 經理
 〃・一五 献物帳
 三一・三 スタイン
 三三・一 殊勝
 三四・一 列底
 〃・一〇 せられて
 三六・一〇 定せしめ
 三八・一八 輪郭
 四一・五 ついは

(頁・行) (正)
 ビブリオグラフィ
 小見山壽海
 フビトベ
 判定
 年以後のものが
 亞非利加
 (610)
 二十二卷
 盧舍那佛の
 輪租帳
 四十三卷・續集
 繪經
 献物帳
 スタイン
 殊勝
 列底
 せられて
 稱せしめ
 輪郭
 ついは

(頁・行) (誤)
 四一・六 (1039)
 〃・第九 憲治版
 〃・一四 せられる
 四四・一 (713)
 〃・一三 (1326)
 四六・一三 フビトベ
 四七・一六 タチスサビ
 四七・一六 口遊
 四七・一六 (070)
 四八・五 (833)
 四九・一五 後撰和歌集
 五〇・四 昭應
 〃・一 絶頂
 五五・二 完成同時
 五六・一二 ある。
 五七・八 (893)
 〃・一〇 編輯は不可
 〃・一一 思はれる。
 〃・一二 したに止り、
 五九・八一九 (三)家
 六六・上段一七 滋野親王

(頁・行) (正)
 (1009) 寛治版
 せられる
 (718)
 (1325) フビトベ
 タチスサビ
 口遊
 (970)
 (831) 後撰和歌集
 昭應
 絶頂
 完成と同時
 ある。
 (891) 編輯は實際上不可
 思はれるから
 したので、
 (三)詩家
 滋野貞主

る。但し弘安三年版の摺本は現在知られてゐない。

延曆寺では弘安二年から永仁四年に至る十八年を費して、法華三大部（玄義・文句・止観）とその注疏（玄義釋籤・文句疏記・止観輔行弘決）計百五十巻を出版した。刊記を湊合すると開印の願主は權大僧都承詮で、その目的は日吉山王法樂のためとあり。版下を執筆したのは從一位藤原良教前大僧正増忠等僧俗三十一人であるが、その中に一及び盧四郎と稱する宋人を見るのは珍しい。

参考書

- 高野版の研究 水原堯榮 大正十年 上弦書洞
- 高野板の研究 水原堯榮 昭和七年 森江書店
- 高野山印板聖教目錄 延慶四年（影寫本）
- 教相目錄 高野印板注文 元應二年（影寫本）

第十章 五山版

淨土・一向・及び法華の三宗が、鎌倉時代に一般民衆の信仰となつて盛行したやうに、禪宗臨濟派は武士社會の信仰となつた。禪宗は教義の研究に重きを置かず、禪即ち靜慮によつて道を悟るを第一とし、本邦武士の氣風と能く一致する所がある。奈良平安時代に傳へられた禪宗は、皆その傳を失ひ、建久二年榮西が宋より歸朝布教した臨濟禪のみ、法系その人を得たると、公武の外護とにより、京都鎌倉に盛行し、諸大寺兩地に競起し總稱して鎌倉五山京都五山といふに至つた。印度に五精舎十塔所、南宋に五山十刹の名稱がある。日本の五山十刹もそれ等に倣つたものであらう。

座位	寺名	創立年代	開山の名字諡號	外護者氏
五山之上	南禪寺	正應四年 (1153)	無關普門(佛心禪師)	龜山法皇
五山第一	天龍寺	延元四年 (1155)	夢窓疎石(大圓國師)	足利尊氏
五山第二	建長寺	建長五年 (1156)	蘭溪道隆(大覺禪師)	北條時頼
五山第三	相國寺	弘和二年 (1157)	夢窓疎石(春屋妙葩)	足利義滿
五山第四	圓覺寺	弘安五年 (1164)	無學祖元(佛光禪師)	北條時宗
五山第五	建仁寺	建仁二年 (1121)	明菴榮西	源頼家
五山第六	壽福寺	正治二年 (1191)	明菴榮西	平政子
五山第七	東福寺	寬元元年 (1179)	圓爾辨圓(聖一國師)	九條道家
五山第八	淨智寺	正應元年? (1150)	元菴普寧(三玄海)	北條宗政
五山第九	萬壽寺	弘長元年 (1160)	寶覺、覺空	北條時時
五山第十	淨妙寺	延應元年? (1169)	退耕行勇	北條泰時

五山に數へられる寺々とその座位とは、時代によつて相違があるが、至徳三年足利義滿はこれを上記の如く定めた。

春日版高野版と相並んで、五山版といふ名稱が屢々用ひられてゐる。京都鎌倉兩五山の出版物の總稱だと解釋すれば、甚だ簡單明瞭であるが、實際問題から言へば、妙心寺臨川寺等五山以外の出版物を五山版と稱し、また出版寺院は不明であつても、内容版式等より推して五山版と稱する場合もある。

五山版は鎌倉末期に始つた。然し間もなく北條氏が滅

亡したため、開版事業は京都五山の専有となり、應永年間まで隆盛を續けた。川瀬一馬氏の研究によれば、曆應二年から應永二十九年まで八十四年間に出版せられた五山版八十六部に及ぶといふ。

一たび榮西が入宋してから、彼我僧侶の往來は甚だ頻繁となり、殊に幕府が財政上の必要から遣明船を派遣するに及び、使節は勿論隨員に僧侶の多かつたことは、支那の詩人が「四千客路皆由海、數十陪臣半是僧」と詠じたので容易に想像せられる。所謂五山文學が鬱然として勃興したはこの結果に外ならぬが、之を數字的に示したは亡友閑堂上村觀光氏多年苦心の結晶である。氏は五山僧侶の著述を分類して、詩文集計壹百八部、日記類十九部、語錄五十五部、語錄・文集・傳記類の註疏二十八部、唐宋詩文の註疏四十三部、計二百五十三部とし、每部の書名・著者名・卷數・及び刊寫の區別を五山詩僧傳の總叙に掲載せられた。

併しながら以上は本邦五山僧侶の文學上の成果であつて、支那で出版になつた禪籍・儒書・詩文集等で、五山の翻刻或は模刻に成つたものを含んでゐない。それ等は五山版としては夥多しい部數冊數を占めるものではないか。また氏は刊寫の區別を記載せられたが、刊行の年代を缺くのは不十分を免れぬ。要するに川瀬氏の數字は一部分であり、また上村氏の目錄中、版とある分の合計を以て、五山版の部數冊數を認めることも出來難い。新しい研究を待望する所以である。

五山版の先驅を爲すものは何か。現存の資料からいへば、弘安十年刊の禪門寶訓を最古のものとして、それから後醍醐天皇の建武中興まで四十餘年間に十數部を數へ得る。書物の内容を論ずれば、主として宋代諸師の語錄であるが、時には禪林僧寶傳のやうな傳記もあれば、詩人玉屑や寒山子詩集のやうな外典もある。刊記によつて開版の年月・趣旨・及び願主の法名等を知り得るが、開版の場所を知り得るは「今將此板捨入建長禪寺正續卷云々」とある禪門寶訓集、「三聖寺住持沙門湛海謹記」とある應菴語錄、その外一二あるに過ぎない。三聖寺は東福寺の支院で本寺の北門の傍にあつたといふ。

後醍醐天皇の御英斷により、鎌倉幕府亡びて政權朝廷に返りしも束の間、武臣足利尊氏直義兄弟兵を擧げて京師を占有し、延元元年天皇は吉野に遁れたまうた。爾來所謂南北兩朝の將士殊死血戰するもの五十七年、明德四年天下再び一に歸したりと雖も、その間敵味方雙方に生じた悲話哀話は數ふるに遑なき程多かつたらう。「歌書よりも軍書に悲し吉野山」の一句が優に之を示してゐる。

後醍醐天皇は深く夢窓疎石を御信仰あり、鎌倉幕府に勅して師を南禪に請じ、また川端御所を改めて靈龜山臨川禪寺と稱し、師に命じて之を主らしめ、特に國師號を賜うた。延元四年天皇吉野に崩じ給ふや、疎石は尊氏直義兄弟に説き洛北嵯峨に天龍寺の大伽藍を營ましめ、前後六年を費して漸く功を竣へ、貞和元年同寺で舉行せる先帝の七周忌法會には、勅使の參向、兩上皇花園光嚴の臨幸、尊氏兄弟の陪從等、「天下之壯觀」を極めたと記されてゐる。さうしてこの法會に讀誦せられた諷誦文によると、尊氏兄弟が「自ら慙愧を懷いて僭尤を謝せんと欲し」、「扶桑國中州毎に一寺一塔を建立し、普く元弘以來戰死傷亡せる一切の魂儀のために覺路を資薦せんとす」とある。廣い意味における人類愛は將軍兄弟は勿論、その左右にある將士の胸裏に發現してゐたのであらう。

尊氏は觀應三年大般若波羅密多經を開版してゐる。刊記には僧尼及び在俗の男女十人の名を擧げ、次ぎに「大般若經一部六百卷爲宿願開板畢。觀應三年九月十五日正二位源朝臣尊氏」とある。さうして彼の第四子基氏が文和二年に、また第三子義詮が延文二年に開版した大般若經にも、宿願のためと刊記にある。父子兄弟の間に共通の宿願は何か。前記の諷誦文から類推し得られよう。自己の犯した罪障消滅と死亡者の慰靈とに外ならずと信ずる。

更に之を明白に立證するものは、文和三年尊氏が諸寺諸山の僧侶に命じ、筆寫校訂せしめたる一切經の殘本で、每卷の末に加へた木版の發願文に「願書藏經功德力 世々生々聞正法 後醍醐院證眞常 考妣二親成正覺 元弘以後戰亡魂 一切怨親悉超度 四生六道盡沾恩 天下太平民樂業 文和三年甲午歲正月廿三日 征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹誌」と

大般若波羅蜜多經卷第一百二十五

靈龜山天龍寺藏書

尊氏一教

並願文

願書藏經功德力

後醍醐院證真常

元弘以後戰亡魂

四生六道盡感恩

世々生々聞心法

孝悌二親成心覺

一切惡親悉超度

天下太平民樂業

征夷大將軍二位源朝臣尊氏 謹誌

第十八圖 足利尊氏願經(三分の一)

あつて尊氏の二字は彼の自署である。この一切經の殘本七百六十餘卷は園城寺に現存してゐるが、それ等の書寫期限は同年正月より三月までに完成し、筆寫校訂に従つたは臨濟宗三十四ヶ寺眞言・華嚴・法相宗二十六ヶ寺の僧侶無慮數百名に上り、その中には夢窓の法嗣で後に相國寺を開いた普明國師春屋妙葩の筆寫にかゝるもの一卷、校訂を加へたもの十二卷がある。尙尊氏の發願文と、文章又は版式を異にするものが、現在までに各々一種發見せられてゐる。恐らく尊氏は一切經書寫は迅速に遂行せられたものであらう。加州前田家秘藏の寶石經要品一帖は尊氏・直義・及び夢窓三人の合筆に成る稀品である。卷末にある康永三年十月附直義の跋文によれば、この一帖は是より先或人靈夢を感じ、なむさかふつせむむさひ(南無釋迦佛全身舍利)の十二字を、一つ／＼首句に冠らせた和歌を公家・武家・僧侶等廿七人に募り、募り得たる短冊百二十枚を繼合はせて一帖となし、その紙背に寶石經の要品を書寫して高野山金剛三昧院に寄附したものとある。以上の跋文中に見える或人は直義を指すに相違なからう。従つて本書はたゞ彼の根本

信仰を示すに過ぎずと論斷する人もあらう。成る程直義自身「爲令_レ彼詠歌之衆悉結_レ良緣寫_レ眞文於_レ其紙背_レ者也」と言つてはゐるが、それなら兄尊氏や疎石を煩はすに及ばぬことだ。兎に角彼の菩提心により、稀有の墨寶と稱すべき光明院宸筆五枚、尊氏兄弟各々十二枚、高師直一枚、和歌四天王中頓阿・兼好・慶運各々五枚、淨辨二枚の短冊が、本經の紙背、實は表面に保存されたのである。

夢窓と直義との問答を録した夢中問答集三卷が南禪寺の竺仙梵仙の二跋を附して康永三年に刊行せられてゐる。跋文によると、本書は在家無學の男女に讀易からしめんため、漢字片假名交り文を用ひ、また直義同様夢窓に參禪した大高若狹守が費を捨て、印行したもので、書誌學上興味が深い作品の一つである。

最後に高師直が開版した首楞嚴義疏註經十卷帖（十帖）について一言する。これは宋本の覆刻で、上下に單線の輪郭あり、初印本は帖裝本、後印本は大抵袋綴となつてゐる。次の刊記は、本文の正楷なるに反して行書體であるが、或は師直の自筆を刻したのかも知れない。

師直熟思、今生懃尤不可勝計、剋是曠劫罪障、何以消除、因茲謹開此

眞詮之板、以拔_二績業之根_一、所冀上報_二四恩_一、下資_二三有_一、同出_二妄想昏域_一、共入_二

楞嚴覺場

曆應二禩季春中澣武藏守高師直敬誌

これを読むと、彼は最も力強く過去の罪障を認識し、本書の開版によつて昏想の妄域を脱却せんことを冀つてゐる。彼が本書を刊行した曆應二年が、尊氏の大般若經刊行に十餘年も先んじてゐることは注意すべきだ。

室町初期において五山版の開版に最も偉功を樹てたは、人で言へば天龍寺の春屋妙葩、寺でいへば臨川寺である。妙葩は

夢窓の一族、十七歳の時南禪寺に入り、夢窓に就いて下髪受衣し、爾來京都及び鎌倉において諸老に參し、また天龍・等持・臨川の諸寺に遷る。康暦元年丹後より南禪に還り、翌年正月後圓融院より國師號を賜はる。敕書に曰く

天下太平興國南禪寺住持春屋和尚、乃正覺國師○光明院より夢窓に賜はつた國師號之上足、親受國師付囑、深明心法根源、道著一代、德被萬邦、所謂僧中之龍、法中之王者也、朕辱迎內殿、受付衣之儀、而執弟子之禮、開法之恩皇天罔極、爰加智覺普明國師之號、以旌普天之下一人尊

終一志願、來時、（一）此善相等法性普聞無量果
主界一念多劫修苦行、（二）無上備甚提

宗鏡錄卷第一百

應安辛亥結制日
天龍東堂比丘春屋妙葩命工雕之
江南東 善榮刊刀

第十九圖 宗鏡錄（三分の一）

と。將軍義滿も亦敕を奉じて妙葩を僧錄司に任じた。これが本邦僧錄司の權典である。嘉慶元年入寂、壽七十八。彼が相國寺の開山に請ぜられた時、之を先師夢窓に讓つたは彼の謙虚を示すものであり、又火災によつて灰燼に歸した天龍臨川二寺や荒廢朽腐の南禪寺を繼承し、期年ならずして舊觀を復したは、彼の事務的才幹を示すものである。「萬頃の津湊に非ざれば、萬艘の舟船を容れ難し」で、開版印書の難事業も、彼にとつては易々として遂行せられただらう。

この方面における妙葩の事蹟は、康永元年南禪寺において古林和尚語錄冊三の開版を助けたを最初とし、至徳元年相國寺において佛德禪師語錄を刊行したを最後とし、中間四十年間天龍寺において開版したもの十三部に及んでゐる。内容から言へば語錄類が半数以上を占め、その中には、夢窓國師の語錄冊二あり、また語錄以外には同國師の年譜や詩法源流・范德機詩集

の如きものもある。卷數の最も多きは宋の延壽の宗鏡錄百卷二十五冊で、第百卷の末尾に「應安辛亥結制日 天龍東堂比丘春屋妙葩命工雕之 江南陳孟榮刊刀」と三行に記されてゐる。讀者よ、願はくばこの刊工の氏名を姑く記憶に存して置かれたい。

臨川寺の出版物としては、曆應四年刊行の佛果園悟眞覺禪師心要及び翌年刊行の靈源和尚筆語が最も古く、而も文字は稍、大型であり又版式も極めて精緻である。それから應永十一年刊行の園悟禪師語錄までに前後八部を出してゐるが、冊數の多いのは貞治六年刊行の禪林類聚二十卷で、元版の覆刻である。幹縁は僧希杲、助縁の僧俗百二十餘人、衆力結成の効果大なるを見るべきだ。

以上の外建仁・南禪・東福諸寺における出版物にも亦注意すべきものがある。即ち建仁寺では貞和四年延文三年補刻景德傳燈錄三十卷及び貞治七年に五燈會元二十卷を、南禪寺では嘉慶二年に義堂周信編集の貞和類聚祖苑聯芳集十卷を、又東福寺では永和三年延文三年補刻年虎關師鍊の元亨釋書三十帖を刊行してゐる。

景德傳燈錄と元亨釋書とは、二つながら聖僧高德の列傳である所に一致し、記述の範圍が、彼は漢土を、此は本朝を主としてゐる所に相違する。師鍊は壯年の比寧一山に建長に見え、儒釋古今の書を雜へて審詢するや、話頭屢々本朝高僧の事蹟に互り、師鍊答へ得ざるもの多し。一山曰く、公の傳辯異域の事に涉りては章々悦ぶべく、而も本邦の事に至つて頗る酬對に苦しむは何ぞやと。師鍊その言に慙ぢ且つ服し、爾來遍く國史並びに雜記に考へて終に元亨釋書を成すといふ。我等後學の徒の服膺自戒すべき一好話である。

彼が畢生の大著に着手した年は不明であるが、それが成功した時、彼が本書に添へて後醍醐天皇に上つた表は、元亨二年六月附で、同年彼は四十二歳であつた。延文六年本書が大藏經の一部と認められたは全く後光嚴院の御思召による。さうして本書は比丘單况等が貞治三年衆縁を募つて開版に着手してから、前後十三年を費して漸く成功した所、完成後數年ならずし

て焼失したため、性海の墓縁により明德二年重刊せられた。傳燈録の版本も同様の運命で、大半焼亡したが、これは宗任の幹縁によつて延文三年補刻せられた。

本邦における漢文漢詩が五山僧侶の手によつて未曾有の發達を來たしたことは明白な事實である。疏・偈頌・讚・祭文・銘から拈香・陞座に至るまで、凡そ禪僧の日常行事は漢詩漢文に精通せざれば不可能であつた。さうして見れば五山僧侶の中に詩文の名手巨擘を出したことは敢へて怪しむに足らぬ。

詩文集にせよ、語録にせよ、本邦で最初に出版せられたは支那人の著作で、原本をその儘覆刻したものさへ多く、之に反して五山僧侶の語録詩文集で成稿當時から明治初期まで多年寫本のまゝ存するも尠からずあつた。されば明治末季上村閑堂氏編輯五山文學全集詩文部四冊の刊行は、氏豫定の計畫の一半に過ぎぬが、後世に與へた裨益は大きい。

五山版で最初に出た詩集は寒山詩で正中二年の刊、次は杜工部詩集^{二十}で永和二年の刊、それから蘇東坡・黃山谷・趙子昂・范德機と續き、又文集は前項に記した柳文韓文を最初とし、比較的大部なものがある。以上は皆個人の著作であるが、諸家の詩文を編輯したものには古文眞寶・三體詩の類があつた。

特に注意すべきは聚分韻略^五で、著者は虎關師鍊である。漢字を四聲音韻によつて分類し、更に之を乾坤・時候・氣形・支體等の十二門に配置した本邦最初の韻書で、一に三重韻と稱するは、毎紙を三段に分ち、平・上・去、三聲の漢字を列舉し、最後に入聲の文字を擧げてゐるからである。この書の原形を存する諸本は孰れも刊記なく、文明以後の刊記ある諸本は三重韻で、京都の外周防・日向・薩摩・美濃・駿河等で開版せられてゐる。

五山詩僧としては何人も指を義堂周信及び絶海中津に屈する。義堂は十七歳の時夢窓を拜して師とし、參問久しうして遂に玄旨に契ふ。鎌倉にあつては管領基氏に招かれて圓覺寺に居り、京都にあつては將軍義滿に請はれて先づ建仁寺に居り、至徳三年南禪寺に移る。さうして是歲義滿京都鎌倉兩五山の位次を定め、南禪寺を以て五山の首位に陞したを見れば、兩者

の深交知るべきである。嘉慶二年寂す。享年六十四。

絶海は夢窓の弟子で、義堂同様、深くその師から將來を囑望せられた。鎌倉京都にあつて基氏及び義滿の優遇を受けたこと、明德應永の間三たび相國寺に住し、その間相國寺が寺位を陞せて五山第一となつたことも、義堂と南禪寺との關係同様である。たゞ兩者の異なる所は外遊の有無で、絶海は洪武九年明の太祖帝に召され、紀州熊野にある徐福の祠について帝と唱和した逸事を殘してゐるが、義堂にも之に匹敵する一好話がある。即ち或人が義堂の遺稿を携へて明に入ると、之を見た楚石琦公が、支那人の作であらうといつて承知しない。段々事情を説明すると、楚石も遂に我を折り、日本にもかゝる人があるかといつて歎賞したといふ。

義堂の著作には義堂和尚語録^二空華集^{二十}空華日用工夫集^{四十八}貞和類聚祖苑聯邦集^十がある。絶海は應永十二年俗齡七十で寂してゐるが、著述の分量は義堂よりも遙かに少く、語録に絶海録、詩文集に蕉堅稿^二があるのみだ。空華は義堂、蕉堅は絶海の號である。

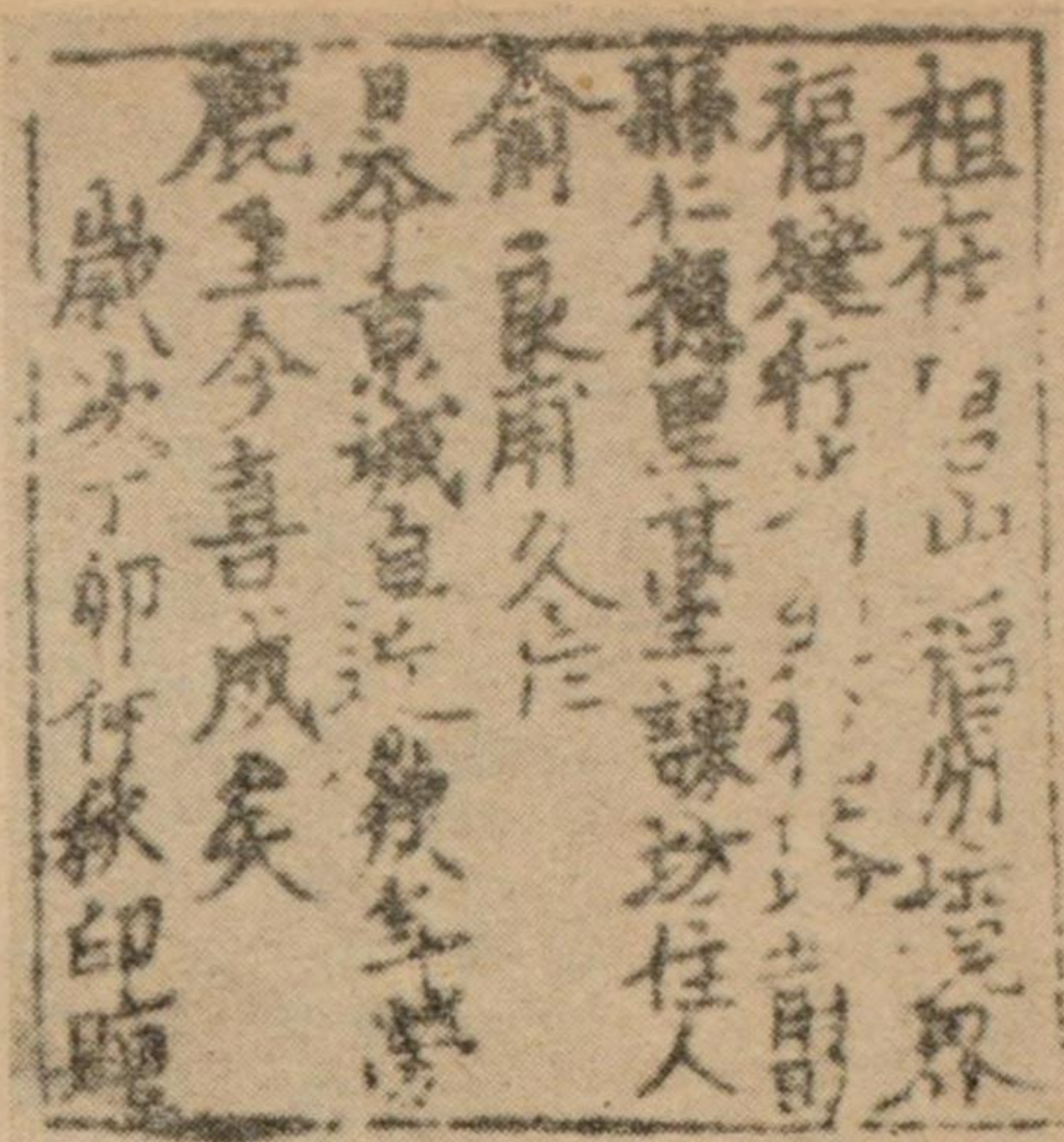
江村北海兩詩僧を比較して「絶海義堂世多並稱、以爲敵手、余嘗讀蕉堅稿、又讀空華集、論學殖、則義堂似勝絶海、如詩才、則義堂非絶海敵也、絶海詩、非但古昔中世無敵手也、雖近時諸名家、恐棄甲宵遁」といひ、本邦古今諸名家の作は「唯我邦之詩耳如絶海、則不然也」と論じてゐる。前掲楚石の批評と對照意味すべきである。

兩師以後傳ふるに足る詩僧が五山に出なかつたかといへば、決してさうではない。瑞溪周鳳・萬里集九・了庵桂悟・桂庵玄樹・桃源瑞仙・景徐周麟・策彦周良等、枚舉に遑あらずといふべしだ。然し詩文集に關して既に相應に紙數を費したから、こゝに割愛する。

五山僧侶の日記記録類で、室町時代の政治・外交・乃至幕府と五山との關係を知るに必要なものが甚だ多い。蔭涼軒日録は相國寺内蔭涼軒、鹿苑日録は鹿苑寺の僧侶が累代書繼いだもので、記載の年代は長期に亘つてゐる。個人の著述としては義

堂の空華日用工夫集、瑞溪の臥雲日件録・善隣國寶記、了庵の壬申入明記、天與の戊子入明記、策彦の初渡集・再渡集がある。さうして是等の中、善隣國寶記だけが、徳川時代に、その他は明治以後に出版されたといひ得れば、結構だが、まださう明言は出来ない。日用工夫集の如き、折角活字とはなつたものゝ、それが完本でなくて抄略本であるのはなさない。

五山僧侶の著作の一面に所謂抄物がある。儒釋史傳詩文を問はず、著名な漢籍を口語體に解釋し、漢字片假名交り文で書下したので、言文一致の鼻祖と稱すべきだ。例へば義堂の百文清規抄・禪儀外交抄、萬里の帳中香(山谷抄)・天下白(東坡抄)、桃源の史記抄・百衲襖(易抄)の類で、部數冊數の多いこと、書名のみでは何書の抄か了解し難い場合があること、一つの書物に對し、著者を異にした數部の抄あること、徳川時代の初期に若干の抄物は出版せられたが、抄物の惣計部數から見れば極めて少數なること等が、その特徴である。



第二十圖 五百家註音辯唐柳先生文集卷四十五 俞良甫木記(原寸)

嵯峨、是爲「菩薩」^(從之)、去年渡唐渡日本唐人也、形木開之輩也^{カキヅノ}とある。形木開之輩とは木版彫刻者の意味だ。それから宗鏡録を仔細に檢すると、孟榮良甫等三十餘名の刻工の名を發見する。但し孟榮の名が本書の末尾に特記せられてゐる所から考へると、一行中の長老であつたらう。

良甫は姓を俞といひ、孟榮同様江南の産といふ。來朝後久しく嵯峨に住んでゐた。應安三年刊行の月江和尚語錄^二に關與したを第一とし、至徳元年には傳法正宗記^六、嘉慶元年には新刊五百家註音辯唐柳先生文集^{四十五卷}を刻してゐる。本屋仲間

で之を柳文と稱してゐるが、柳文と全く同一版式の韓文、正しくいへば五百家註音辯昌黎先生文集^{四十卷}も良甫の手に成つたと考へられる。然し春秋經傳集解及び李善注の文選を同人の刻とする舊説には賛成し難い。後者は今原本を存せざるを以て審査に由なく、また前者の版式が柳韓文に類似すといふ前提には俄に同意し難いからである。

良甫は刻工であると同時に出版者であつた。傳法正宗記の刊記に「福建道興化路蕭田縣仁德里住人俞良甫、於日本嵯峨寓居、憑自己財物、置板流行、歲次甲子孟夏四月日謹題」とあるからだ。我々はこの點につき特に彼に對して敬意を表する。以上兩名の外、多數の支那刻字工がゐたことを反復御注意する。

參考書

- 五山文學小史 上村觀光 明治三十九年 裳華房
- 五山詩僧傳 上村觀光 明治四十五年 民友社
- 五山文學全集 四册 上村觀光 明治四十一年 裳華房、民友社 (本書第二版には前記二書を第五冊に収録す)
- 足利尊氏願書の大藏經 上村閑堂 大正三年(禪宗二三四號二三六號)
- 同書寫校合人名錄
- 寶積經要文 昭和四年 育徳財團(尊經閣叢刊)
- 訪書餘録(前出)
- 舊刊影譜 川瀬一馬 昭和七年 文求堂

第十一章 金澤文庫 足利學校

源頼朝が府を鎌倉に開くに當り、中原親能・大江廣元・三善康信等を京都より招致して機務に參與せしめた。中原氏は明法、大江氏は文章、三善氏は算術の家で、それらの學藝に通達した人々が、頼朝の左右に缺けてゐたからであらう。それから三十年後、承文三年六月北條泰時が兵を率ゐて西上し、途に院宣を拜し、之を讀む者を索めた所、麾下五千人中僅に藤田三郎一人を得たに過ぎなかつた事は、如何に鎌倉武士が武藝を以て本領とし、文事を輕んじて「非職の才藝」としたかを證するに足るといふべきだ。

かういふ空氣の中に成長した北條氏の一門金澤實時は、幕府の樞機に參與する旁、讀書修學を怠らず、所領武州六浦庄金澤郷に別業を建て、附近に文庫を創設して内外の籍緒を收藏し、而も是等を死藏することなくして借覽を許したりといふ。實時の子顯時、顯時の子貞顯、能く父祖の遺業を守れるのみならず、貞顯は元弘三年鎌倉陥落に際し、一門と俱に東勝寺で潔よく自盡し、武士の面目を全うした。三代の佳名特筆大書するに値すと言ふは、必ずしも自分一人ではあるまい。

實時は北條義時の第五子實泰の子で、少年の頃から將軍の左右に侍し、長じて諸要職に歴任した。建長の初、博士清原教隆が將軍の師範として西下するに及び、之に師事するもの十六七年、その間教隆より左傳及び令の講義を受け、又彼に請うて群書治要を加點せしめた。但し文永二年から彼の歿年建治二年までは、公務繁忙なるに拘らず、書寫校勘殆ど彼一人の手に成りしと知つては驚嘆するばかりである。然も彼が金澤の別墅に隱退したのは實に逝去の前年であつた。

實時が建設した金澤文庫についての古い叙述は、近藤守重の右文故事及び同書附録に、また關靖氏の新しい研究は、歴史地理六十一二卷に載つてゐる。この外新舊の學者の所見は色々あつて、仲々一定しないが、問題の第一は、文庫は實時の別

居君子之往而為之人行者其志也
王也

群書治要卷十七

建治元年六月二日、勾動なるも
馬殿板橋の村に事一、本を
渡邊重光、為久、高江流、日
れ、合持所、馬下、之、右、卷
右、版、二、品、千、七、カ、カ
日、り、之、父、之、年、後、月、回、極、成
之、聲、に、所、傳、を、今、も、た、ま、し、ら
前、の、事、を、勿、動、と、も、あ、く、同、を
又、は、は、る、ま、な、を、あ、り、す、

起、り、利、史、本、

第二十一圖 群書治要卷十七(四分の一)

業、後に稱名寺となつた建物内に設けられたか、別業以外に存在したか。藏書の貸附借覽を許可したか、しなかつたかの二點にある。

關氏の研究によれば別墅と文庫とは別建物である。今の金澤文庫は大正四年舊別墅の跡に建てられたもので、その側の洞穴を通つて自地に出ると、其所を文庫ヶ谷といひ、今昭和塾のある邊が昔の金澤文庫の跡だといふ。然し茲に一つ困つたことは、守重が稱名寺の古圖と題して右文故事に引用した繪圖は、その説明に同寺第三世湛睿が結果の法を行ふ時に描寫した圖で、歴世傳來した故圖だとあるが、現時同寺の國寶となつてゐる同寺所藏元亨三年湛睿の結果圖と比べ、可成異同があることである。守重が摸寫した原圖は國寶圖であるか、或は別の圖であるか、疑問はまだ決しない。

關氏は金澤文庫所藏の古文書中、書籍貸借に關するものを相應多數發見せられ、その實例として次頁の一通を示された。宛名の無いのは遺憾だが、署名人の劔阿は稱名寺第二世で北條氏滅亡後尙數年在世したといふ。文庫と稱名寺とは特別な關係がありながら、この證書を見ると、書名・冊數は勿論、今日の函架番號に相當するものが記載されてゐる。思・寢・召は千字文にある文字で、支那では大藏經のやうに一部で冊數の多いものを整理するに當り、千字文の一

思	一家務簡要抄 一帖
	一世間雜事抄 一帖
寢	一商名錄 一卷
召	一能治集 一卷
	以此狀可被擬借書候賦、先度借書可返給候恐々謹言 劍阿

此の如く戰國亂離の時代において文庫の藏本は散佚した。應長六年徳川家康が江戸城富士見亭に金澤文庫を移したといふ記録はあつても、當時家康の手に歸したは僅少の部數であつた。世人は金澤文庫といふ四字を刻した藏印さへあれば無暗に珍重するが、關氏の調査によると、それ等の藏印は合計十七種に及び毎印使用の期限は勿論判明せずといへば、藏書印のみによる審定は危険千萬と言はざるを得ぬ。

- 左に金澤文庫舊藏本中、著名なもの若干を擧げ、現在の所藏者を註す。
- 寫本
 - 群書治要 四十七卷四十七軸 圖書寮 ○春秋經傳集解 三十卷三十軸 同上 ○齋民要術 九卷九軸 黎明會
 - 文選集註 十三卷十九軸 金澤文庫 五卷七軸 東洋文庫 三卷三軸 小川陸之助氏 ○兩京新記 一卷一軸 尊經閣
 - 白氏文集 二十一卷二十一軸 久原文庫 五卷二軸 田中忠三郎氏 二卷二軸 三井源右衛門氏 一卷一軸 保坂潤治氏
 - 刊本
 - 尙書正義 二十卷十七冊 圖書寮 ○論語注疏 十卷十冊 同上 ○外臺秘要方 十一卷十一冊 同上
 - 太平聖惠方 百卷目一卷五十一冊 黎明會 ○太平御覽 一千卷目十五卷百十四冊 圖書寮
 - 文選 六十卷目一卷二十一冊 足利學校

第七章に掲載した日本國見在書目録が、目録編纂當時本邦に現在した漢籍の目録であるに反し、本朝書籍目録は同一意味を以て編纂せられた和書の目録である。寛文十一年長尾平兵衛刊行の横本の外、群書類從雜部にも收められてゐるが、是等と同一の内容で、書名を異にする寫本が少からず、甚だしきは御室書籍目録などと題し、一見して仁和寺の藏書目録にあらずやと思はしむるものさへある。況んや編者の氏名編纂の年代等を明記した分は一つも無い。

本書を室町時代の成立とする學者の中には、編者を清原業忠とする説と、外史中原氏とする説との二派あり、南北朝の成立にして撰者を冷泉爲富とする説あり、又鎌倉時代の成立にして、寛文の刊本・群書類從本・及び若干の抄本の奥書に「此抄入道大納言實冬卿密々所借賜之本也」(118) 永正二年八月四日書寫之(119) 師名在判」とある永正は、永仁の誤なるべしとの説もある。三説中傾聽に値するは第三説で、奥書に見ゆる實冬は滋野井中納言公光の子、正應二年權大納言となり、翌三年出家、乾元二年薨去六十歳、また師名は大外記師淳の子、弘安十一年大外記に任じ、歿年は實冬に同じといふ。さすれば入道實冬及び大外記師名が並び存した時代は正應三年から乾元二年まで、その間年號に永字を冠したは永仁あるのみである。さすれば前記の奥書に見える永正は永仁の誤なること明白で、實冬所持の本書は永仁二年か若しくはそれ以前の抄本であつたと言へる。然し何年以前の編纂と分つても、何年以後の編纂であるかゞ分明せぬ限り、成立年代の推定は實は不十分である。それには本書に収録せられた四百九十三部の圖書中、その成立年代が確實に永仁二年以前で、而も最も之に接近してゐるものを検出せねばならぬ。亡友和田英松氏は本書(三)和漢の篇に載つてゐる和漢兼作集が、「後宇多天皇の弘安三年以後の撰集で、伏見天皇の御代に増補せられたものだから、本書は弘安の末から正應の始にかけて數年間に成立したらうと推定せられた。

高倉天皇の承安四年、後白河法皇の院宣により、吉田經房等が蓮華王院架藏の「本朝書籍及諸家記」の目録撰定に従事した記録はあるが、目録の成否は不明である。その後本朝書史目録・本朝法家文書目録・和歌現在書目録の三部が出来たが、い

づれも一部特殊の目録に過ぎない。吾人が國書の總目録として特に本朝書籍目録を尊重する所以は實に此に存す。本書収録の書名合計四百九十三部、篇目二十を立て、之を分載すること左の如し。

- (一)神事六部 (二)帝紀四十四部 (三)公事三十四部 (四)政要八十四部 (五)氏族九部 (六)地理五部 (七)類聚八部 (八)字類十一部 (九)詩家六十五部 (一〇)雜抄八部 (一一)和歌 (一二)和漢五部 (一三)管絃二十二部 (一四)醫書十部 (一五)陰陽十部 (一六)人々傳四十八部 (一七)官位二十八部 (一八)雜々十五部 (一九)雜抄二十七部 (二〇)假名五十四部

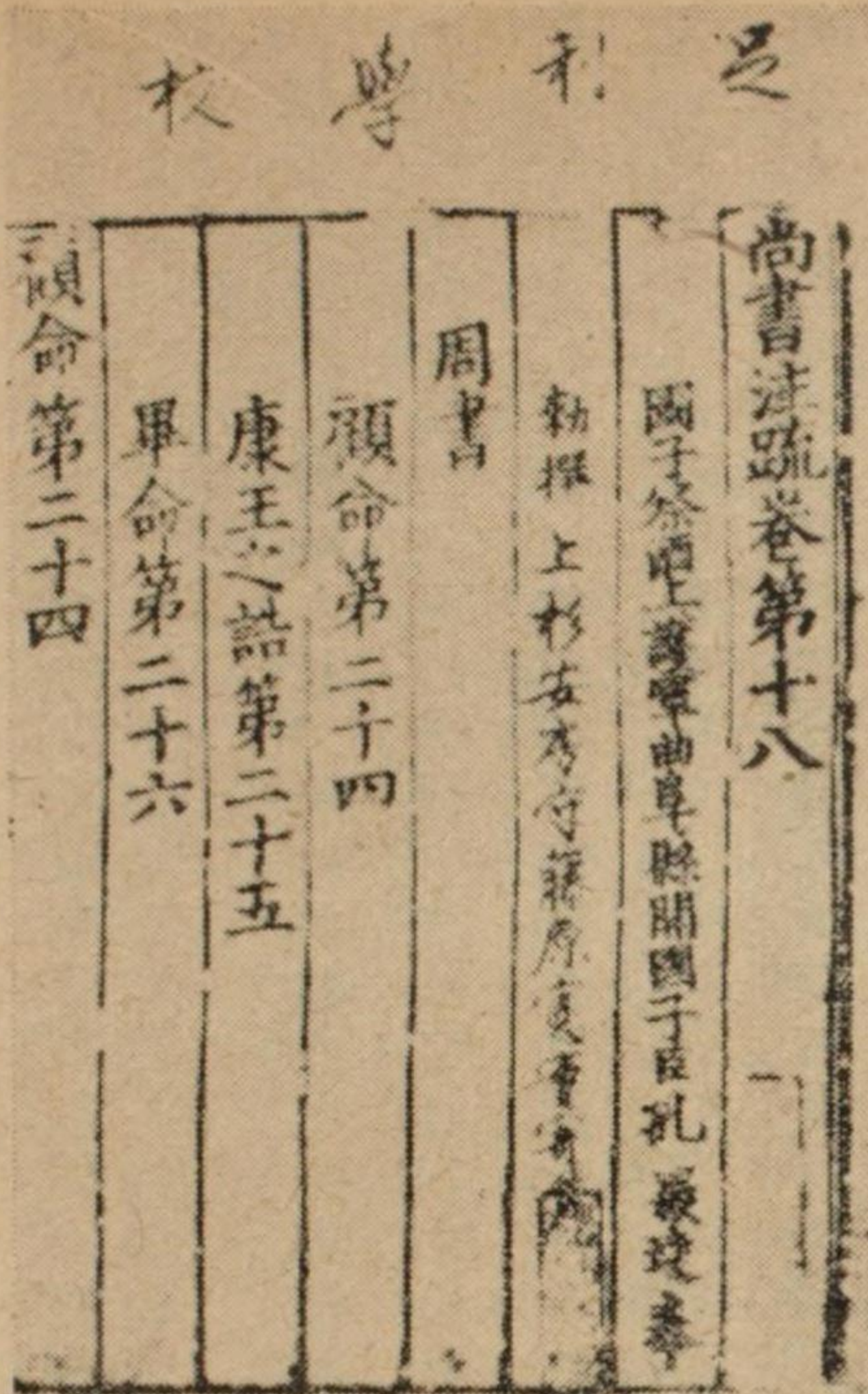
この中和歌は篇目のみで書名が無く、「勅撰以下別有目録」、勅撰家集等外、如抄物打聞之類、七十部有之、然而見懷中抄歟之間、略之」と説明してある。勅撰集以下には別に目録があるから略する。また抄物打聞の類七十部については、懷中抄に譲つて略すといふ意味であらう。なる程和歌には和歌現在書目録・和歌合略目録等がある。懷中抄は今書物が傳はらぬから明言は出来ぬが、抄物打聞の類の目録らしく、それ等に譲つて本篇は書名を略すと解して意義が能く通ずる。(一〇)(一九)雜抄が二篇まであつて、更に類似の(一八)雜々があつては、如何にも重複の嫌があるが、之は本書の編纂が始終一貫せず、前後二回に分れたものと解釋するより外はない。

本書の寛文刊本及び多數の寫本には、卷末に「諸家名記」を副へてゐる。記録類の目録で、本文同様鎌倉時代の成立と認められる。蓮華王院架藏の「本朝書籍及諸家記」の目録は傳はらぬが、少くもその書名は本書に襲用せられてゐるといへよう。

足利學校は何時何人により何處に創設せられたかといふと、一向定説が無い。然し創建者としては足利義兼説が比較的有力であるやに考へられる。義兼は豆州走湯山の眞言僧理眞を招いて、邸内持佛堂に居らしめたといふが、義兼は後に入道して鏗阿といひ、理眞が同寺開山となつてゐる。然らば鏗阿寺が義兼の邸第跡なること、並びに足利氏の一族子弟を教ふる小規模の講堂が邸内若しくはその附近にあつたことは想像に難くない。

足利莊は足利氏發祥の地である。足利氏が天下の政權を掌握するに及び、莊内の寺院講堂を荒廢に委する筈はない。尊氏が多々良濱の戦に大捷を得たは、義兼の祀つた聖廟の懿徳によるものとし、之を再造したといふ説は、信用するに足らぬとしても、南北朝から室町初期に互り、鏗阿寺に相當な學僧が居て、經書を談じ、詩文を教授した事實は、二三存在してゐる。

かくの如く起原や沿革の十分判明しない足利學校は、永享年間關東管領足利持氏の執筆上杉憲實の庇護により、顯著な進歩を遂げた。學校を再興したことが其一であり、鎌倉圓覺寺の僧快元を迎へて庠主即ち校長としたが其二であり、希有の圖書を寄進して講學の便を圖つたことが其三である。憲實は越後の



高書注疏卷第十八
國子祭禮上儀曲草院關國子監孔廟殿
勅撰上杉五郎義兼傳
周書
願命第二十四
康王之誥第二十五
甲命第二十六

書を寄進して講學の便を圖つたことが其三である。憲實は越後の上杉房方の三男で九歳の時山内上杉氏を嗣ぎ、應永の末には既に執事職にあつた。父祖好學の遺風を承けたのみならず、公務の餘暇日々諸老を延いて道を談ずるを樂み、三十歳前後にしてその名は既に瑞溪周鳳や惟肖得嚴の知る所となつた。

漢文に譯したものが、續本朝通鑑に載つてゐる。彼は寄進の後半において、今本朝に僅に残存してゐる國學では、率ね僧侶がその主となつてゐる。然し文字の教授はそれで可能である。故に自分は五經注疏若干卷を學舎に安置した。今から怠りなく講習したら、文化は家から郷に達し、州に達し、天下に達すること日を期して俟つべしと言ひ、偉大な抱負を表白するかと思へば、條目においては細心熟慮圖書の保管及び閱覽規定を設けてゐる。

其一曰、收著之時、固其扁輪緘膝、勿浪借與人、若有志於披閱者、就舍內看二册、畢可輒送還、不許將歸出闕外、其二曰、主事者進退時、新舊兩人相對、檢定每部卷數、而後可交代、

其三曰、借讀者勿_レ以_二丹墨加_一妄句、勿_レ令_二紙背生_一毛、勿_レ觸_二沾汗_一、
 其四曰、夏月梅雨濕潤、則_三至風涼_一、可_レ曝_二乾之_一、勿_レ中_二屋瓦之漏濕_一、至_二冬月_一、則_三可_レ嚴_二火禁之備_一、
 其五曰、或質_二于庫_一、或鬻_二于市_一、或爲_二穿窬所_一獲、則罪莫_レ大焉、
 永享十一年己未閏正月吉日 前房州刺史藤原憲實

憲實が寄附した五部中、尙書正義八本禮記正義三十五本毛詩注疏三十本春秋左傳注疏二十五本は現存し、每本「足利學校公用」
 或は「足利學校之公用也」、「此書不_レ許出_二學校闕外_一憲實」諱の下に花押を「上杉安房守藤原憲實寄進」等、憲實自草の墨記ある
 のみか、彼の遊印「松竹清人」の朱印が捺してある。但し周易注疏十三本は早く闕けたが、今在る本は憲實の男憲忠の寄進す
 る所である。以上いづれも宋槧本であるが、就中周易注疏は毎卷末に端平元年から二年へかけ、陸放翁の第六子陸子適の識
 語があるので有名だ。

尊氏が義詮を將軍とし、その弟基氏を關東管領としたは、血縁關係による政局の圓滑を期したのであるが、最初から兩者
 の間に融和を缺き、その子孫に至つては互に兵を執つて雌雄を決せんとすること再三に及んだ。憲實深く之を憂へ、東西の
 融和に奔走したが、彼が將軍義持の知遇を得るに従ひ、主君持氏の猜疑を増し、永享十年八月持氏兵を發して憲實を誅伐せ
 んとするや、彼は已むを得ず上州に奔つて事情を將軍に聞し、將軍は持氏追討の宣旨を奏請するに至つた。戦争は小規模に
 終始し、翌年二月持氏の鎌倉永安寺における自盡によつて終止符を打つた。

憲實は主家の存續を慮り、舊主の助命願さへ出した。然し百事志と齟齬し、形の上からいへば、鎌倉御所を滅したは憲實
 なり、と非難せられる苦境に陥つた。かう考へると彼が戰後急に剃髮して高岳長棟庵主と號したこと、永安寺で自殺せんと
 したこと、弟清方に執事職を譲り、伊豆の國清寺に隱退したこと等、一切が能く了解せられる。かゝる懊惱傷心の間にあつ
 て、憲實は尙學校を忘れず、文安三年釋長棟の署名を以て公布した學規三條は、(一)學校において教授すべき課目、(二)在庄不
 律の僧侶を許容する百姓武士の處分、(三)學問を爲すと稱して庄内に下向するも、徒に山水に放浪する僧侶の處分等を嚴定し

てゐる。(一)は舊規により、學校において三注・四書・六經・列・莊・老・史記・文選の外、斷じて他の談義を許さず、庄内
 においては儒學以外を嚴禁すと明言してゐる。之を勵行すれば、(三)は當然の結果といはざるを得ぬ。(二)は文意、聊か晦澁で
 あるが、當時學生は僧徒に限られ、在俗者と雖も受講中は剃髮して僧形を装つたといひ、又學生の大部分は在地各地の寺院
 又は士族の家に宿泊したといへば、本文の僧侶を學生、許容を止宿許容と解して宜からう。

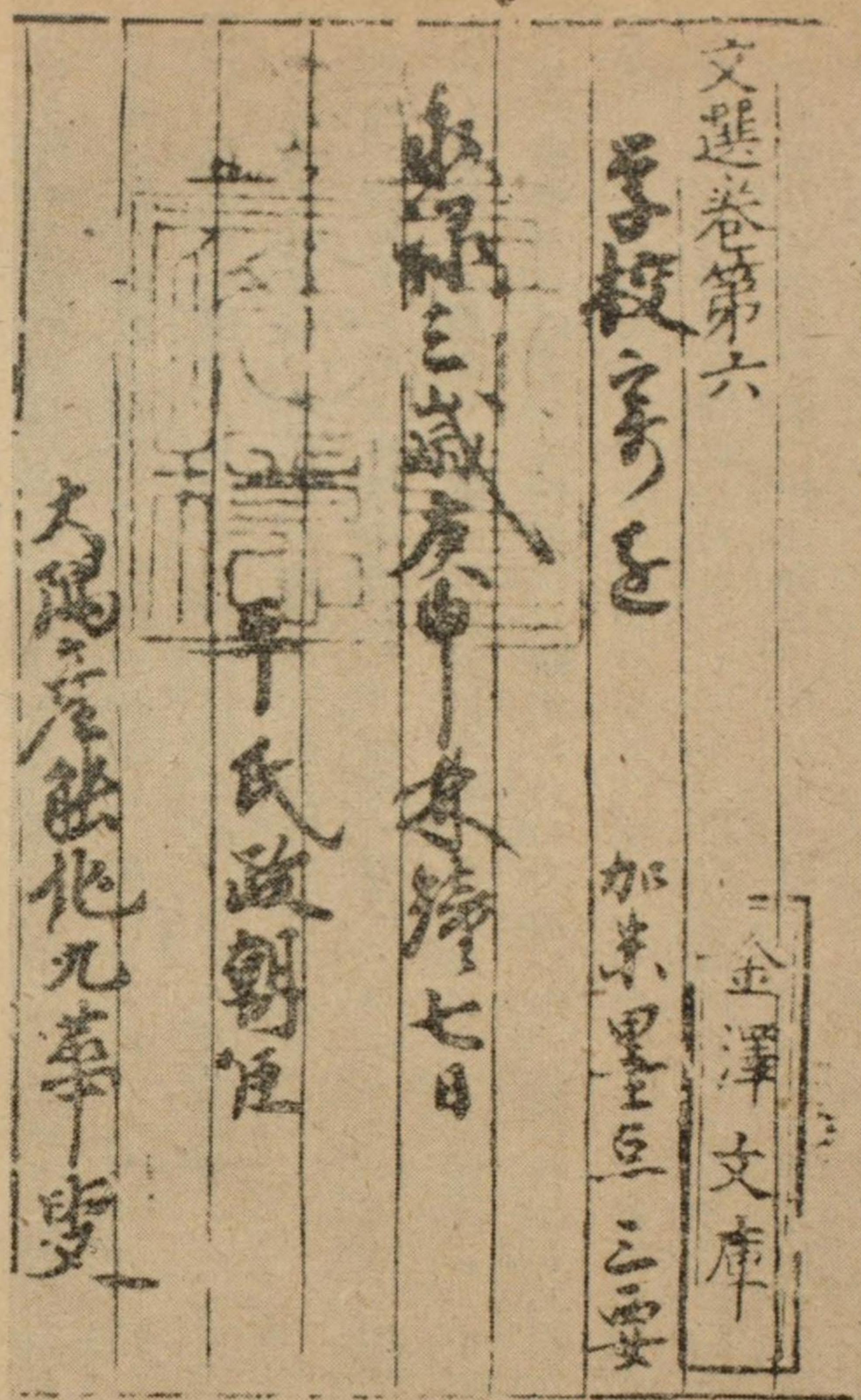
憲實は晩年國清寺を出でて諸國を歴遊し、寛正七年長州の大寧寺で歿してゐる。年五十七、山内上杉氏との關係は彼の子
 憲忠・孫憲房を限りとし、その以後は絶えた。憲忠の寄進にかゝる宋本周易注疏と、憲房の寄進にかゝる元槧本後漢書二十
 本は學校に現存し、それ等の識語は父祖憲實同様である。

學校で教授する所は儒學に限られ、教乘・禪錄・詩注・文集等は一切禁止せられてゐる。さうして儒學の中易學を主とし
 たことは學校の異采で、第一世快元以來歴代の序主必ず之を開講し、中には在任中、講義數回に及んだものもあり、學生も
 亦易學修業を目的として諸國から蟬集したのであつた。特に易學から出た占筮術は、武家の日常及び非常生活に缺くべから
 ざるものであつただけ、その講習は頗る旺盛であつたらしい。長坂長閑が卜筮の達人徳嚴を信玄に推薦した時「占は足利に
 て傳授か」と信玄が問返したといふ話が、甲陽軍鑑に載つてゐる。甲陽軍鑑は俗書だが、占筮術の傳授を足利學校で受ける
 ことを重んじた風習はこれで分る。第七世九華に師事した三要素信が家康に近侍し、酒輒祖傳が直江山城守兼續の顧問の位
 置にあつたこと等、例を挙げれば際限がない。

桂菴和尚家法俊點に、「大唐一府一郡其外郡縣皆有學校、日本畿足利一處學校、學徒負笈之地」とあるは學校の名譽を宣揚
 したものと見える。但し、それに引續いて、「然在_レ彼而稱_二儒學教授之師_一者、至今不知_レ有_二好書_一、徒就_二大唐所_一破棄_二之
 注釋_一、教_二懷諸人_一、惜哉」と言つてゐるが、之は新注派古注派學派異同の然らしめた所で、學校に現存する新注書籍の分量か
 ら見て、この非難は當らないといへる。

九華の時代は學校の最盛時で「學徒凡有三千」といふが、之は天文二十二年同人が認めた「下野州足利庄講堂再造勸進帳」中の辭句を引用しただけで、實數とは思へない。勸進帳によれば、講堂は近年再三の火災にかゝり、剩へ關東八州兵亂相次ぎ、到底獨力を以て再建成就覺束なき旨を訴へてゐる。火災のことは委しく分らないが、八州の兵亂とは、小田原北條氏の勃興により、川越城を中心として北條氏對古河公方及び山内扇谷兩上杉氏間に展開した戰鬪を指すのである。

學校再建は容易に進行せず、永祿三年九華六十一歳、庠主を辭して故郷大隅に歸らんとし、途に小田原に立寄り、北條氏康、氏政父子の請に應じて易と三略とを講じた所、氏康父子は大いに九華の歸國を惜しみ、學校再建の意を示して、彼を抑留した。この間の事情は、氏康父子が九華に贈つた金澤文庫舊藏の宋本文選卷第三十に「隅州産九華行年六十一之時、欲赴于郷里、過相州、大守氏康氏政父子、聽三略、講後話柄之次賜之、又請再住于講堂」とある九華自筆の識語によつて明白である。かくて九華は再び學校に歸り、庠主たること約三十年、天正六年七十九歳を以て歿した。彼の自筆本・書入本・及び手澤本は多數學校に現存してゐる。



第二十三圖 宋刊本文選卷第六 (二分の一)

天文十八年日本に最初に渡來した耶蘇會神父聖フランシスコ・ザビエーは、到着後百日ならずして鹿兒島から發した第一信に、

京都には有名な一大學がある略○中この外日本には五ヶ所に主な學院がある。(高野)コーヤ・(長束)ネグル・(比叡)ヒソ・及びオミヤの四學院は京都の周圍に接近存在し、各々約三千五百の學徒を有し、日本國中最も大きく又最も有名な坂東の學院は、京都を距ること甚だ遠い。坂東は一大領土で六人の領主に分割せられてゐるが、その中一人が最も富強である。

といひ、爾來再三足利學校のことを海外に通信してゐる。日本の名譽と言ふべきだ。

金澤文庫足利學校の藏書を説明するに當り、屢々宋槧の二字を用ひた。一體支那の刊書は隋に始つて唐に暨び、宋及び五代に至つて始めて盛なりと言はれてゐる位で、支那の讀書人の宋版を尊重することは非常なものである。陸心源の如きは、宋版二百部を有するを誇として「ヒョクソウ宋樓」と稱したが、彼の遺書が明治の末年岩崎文庫の手に歸した時、これは日本にとつて慶賀すべきことだと考へたものでした。

宋版の貴ぶべき所以は、五雜俎の記事に盡きてゐる。曰く「書所_三以貴_三宋板_二者、不_三惟點畫無_二訛、亦且箋刻精好若_三法帖_一、然凡宋刻分_三肥瘦_二一種、肥者學_レ顏、瘦者學_レ歐、行款疎密任_レ意不_レ一、而字勢皆生動、箋古色而極薄不_レ蛀、元刻字稍帶_レ行、而箋時用_レ竹、視_レ宋紙稍黑矣」と。即ち文字に一點一畫の誤なきこと、彫刻の精好なること、料紙が極めて薄くて蟲害がないこと、の三つが宋版を貴ぶ所以だといふ意味で、顔は顏眞卿、歐は歐陽詢の略、それから元版の文字は多少行書風で、料紙に竹紙を用ふる場合もある。宋代の料紙に比べると色が若干黒いとある。

以上は宋版の美點を擧げた丈で、一口に宋版といつても、時代を以て區別すれば北宋本あり南宋本あり、出版者を以て區別すれば、中央地方の官衙・書院の刻書、私宅・家塾の刻書、及び坊刻書即ち民間書林の刻書あり、精粗良否一概に論ずべからざるは勿論である。

宋本木記又は碑牌と稱し、刊本の首尾又は序文目錄の後に、墨線を以て方形を畫し、出版の趣旨・年月、出版者の氏名・堂號等を記載することは、宋代に始り、元明以後多く之に倣つてゐる。

版心といつて、書物の中央折目に當る所の下段に、刻工の氏名を記すことも、宋版に始つてゐる。わが國の五山版に此の風を移したものがあつたが、五山版では版心よりも寧ろ匡廓の左右の外部下方に刻工の氏名を刻した分が多い。

参考書

- 右文故事十六卷、附錄五卷、餘錄四卷（卷三缺）（近藤正齋全集 第二 明治三十九年 國書刊行會）
 金澤文庫の再吟味 關靖（歴史地理 第六一卷二、三、四、第六二卷一、二、三、五、六）
 金澤文庫本圖録 上卷 關靖 昭和十年 巖松堂幽學社
 本朝書籍目錄考證 和田英松 昭和十一年 明治書院
 足利學校專蹟考 川上廣樹 明治十三年
 足利學校の研究 川瀬一馬 昭和二十三年 大日本雄辯會講談社
 足利學校藏書目並附考 吉田篁墩 寫本
 足利學校秘本書目 長澤規矩也 昭和八年 東京書誌學會

第十二章 新氣運到來 印刷文化の地方進出

書誌學の上から言へば、東洋と言はず、西洋と言はず、最も古くから鈔寫せられたは、宗教に關するものであつた。例を本邦にとれば、奈良朝以來盛行したは佛教の經卷類であるが、眞に漢譯の經卷類を理解し、之を尊重する迄には、特殊の教養を要する。然し特殊の教養は一般の善男善女に望むべくも無い。源空の念佛宗を創め、親鸞の一向宗を唱ふるや、彼等は上下翕然として之に歸し、さうして一方武士階級には談理よりも悟道を主とした禪宗の流行を見るに至つた。

この平易化・大衆化は時勢で、宗教にのみ限つたことでは決して無い。源賴朝の武家政治は、侍所・公文所（政所）・問注所を中樞機關とする極めて簡単な組織であり、また貞永元年編纂の式目は僅に五十一ヶ條の法典であるが、この幕府組織と式目とは、複雑な太政官制度や律令に代つて、優にその機能を發揮し、足利幕府の襲用する所となつた。

鎌倉初期において藤原定家・同家隆・將軍實朝・僧西行等幾多歌人の輩出を見たが、後鳥羽上皇の院宣による新古今集を最後の敕撰集とし、爾來歌學は定家の子孫に傳はつたと稱するも、これといふ歌人もなく、連歌・俳諧の流行となつた。物語類は前期と内容を一變し、戰爭を舞臺とし、之に人生の悲喜哀樂を織交ぜた平家物語・太平記の類が多く出た。平家は讀むばかりでなく、琵琶に合せて語つたといふ。後世淨瑠璃を語るといふのは、之から出た詞であらう。記録類には鎌倉幕府の日記と稱すべき東鑑を第一とし、宮廷・公家・僧侶・寺院の日記等に著名なものが數々あるが、何れも寫本で傳はるばかり故、多年の間に異本を生じ、長門本平家物語吉川本吾妻鏡といふ如く、所藏者の住所氏名を附して、他本と區別するに至つた。家康が武家政治唯一の記録として愛讀した東鑑が、慶長年間、彼の獎勵によつて始めて開版せられたと述べたら、諸君は或は吃驚せられるかも知れぬが、殘念ながら事實だ。平家物語も太平記も出版になつたは矢張り慶長年間だ。

經書に對する解釋は宋代に至つて一變した。漢唐の學者が註疏に終始したに反し、程顥兄弟及び朱熹によつて代表せられる宋儒は、六朝以來流行した佛教の所説を參酌して所謂性理説を唱へた。鎌倉以來頻繁に日支の間を往來せる彼我の禪僧が、耳にした宋儒の新説と、手にした彼等の著書とを輸入したことは勿論である。

從來我が國に行はれた儒書は、漢唐の學者の註疏を加へたものであつた。木板印刷術發明以前のことで、是等はすべて鈔本であり、さうして是等を専門に研究傳授する人々は、少數の明經紀傳の博士家に限られてゐた。かゝる状態にあつたすれば、支那から新學が輸入されたとして、新學が急激な發達を來したとは考へられない。後醍醐天皇が玄惠法印を召して新註を講ぜしめられたは有名な話で、之を契機として、新學は廷臣間に流行するに至つた。北畠親房は玄惠から資治通鑑を學んだと尺素往來に見えるが、親房の神皇正統記を讀むと、彼の名分論が通鑑に基づくことを判然認め得る。

新學は廷臣間のみならず、京都五山の興隆に伴ひ、禪僧間に一層盛に行はれた。彼等が宋學を愛重鼓吹する所以は、義堂の言へるが如く「宋朝以來儒學者皆奉吾禪宗、一分發明心地、故註書與章句學迥然別也」と認めたからであらう。南北朝から室町時代を通じ、禪門の儒者を數ふれば、明極・清拙・竺仙から岐陽・瑞溪・景徐に至るまで枚舉に遑あらざる程である。

然しながら我が國の出版界から言へば、五山版として刊行せられた宋儒の著述は、文明十三年薩州鹿兒島の伊地知重貞が鏤梓した、朱熹大學章句一部あるのみである。古文尙書・毛詩鄭箋・春秋經傳集解・正平版論語の如きは孰れも宋以前の著であり、之に反して字書韻書の類は、大廣益會玉篇を除くの外、皆宋代の著である。多年浸染した漢唐の學風を脱するは容易ならざること並びに新學が經書よりも先づ詩文の方面から誘導せられたことは、之によつて知られよう。

大極正易は姓氏郷貫も不明であり、藏主といふ低い位置に甘んじてゐたものだが、彼の日記碧山日録は當代有數の好著で

ある。同書長祿三年四月の條において、彼は七博士家の隆替を概説し、凡そ七氏の家、先緒を墜さずして教授する者あり、學を怠り術に反して家傳を失ふ者あり、又その家嗣無くして纔に名の存する者ありといひ、一轉して近年清家の學の大いに興れるは外史業公あるが故なり、業公學識富贍にしてその辯翻波の如し。故に天下の學者皆之を師とすと結んでゐる。

外史業公は大外記明經博士清原業忠をいふ。業忠が四書を講説するに當り、古註を主としたは勿論であるが、朱子の集註を參取することを怠らず、また瑞溪周鳳と深交あり、兩者相會するや、彼我儒佛の説を交換するを例としたと周鳳の臥雲日件録に見える。此の如く清家は業忠の時既に宋學及び禪理を交へ養孫宣賢（卜部兼俱の三男）に至つて更に神道を加へ、三教に涉つてその長を取り、且つ頗る講説に力め、足跡遠く北陸に及びたるを以て、名聲愈々揚り、少からざる影響を書誌學上に與ふるに至つた。

前に一言した貞永式目、正しくいへば關東御成敗式目は、律令が隋唐の制度を基礎とせるに反し、武士階級の間に行はれた先例と思想とを根據とせる日本的式目で、武士の勢力の振張に伴ひ施行の範圍を殆ど全國に擴大するに至つた。大永四年算博士小槻宿禰伊治が本書を刊行したは決して偶然でなく、日本を自覺した讀者の需要に應じたものと認められる。しかも彼は大永開版後五年、享祿二年本書を重刊するに當り、匹夫愚蒙の輩をして讀易からしめんため、清家の藏本によつて返點送假名を施して重刊す、と刊記に明記してゐる。大永版に訓點の無かつたことを證明すると同時に、需要者の範圍が擴大したことが知られる。清原家は享祿二年當主宣賢五十五歳、長男業賢の室は伊治の同胞故、小槻家の請に應じて家本を貸與したのであらう。伊治は天文二十年大内家滅亡の際殉難してゐる。

木板彫刻の技術から見れば、主として直線より成る漢字や片假名が容易であり、主として曲線より成る挿畫や平假名が困難であることは辯ずる迄もない。本邦最初の挿畫本と言はれる佛制比丘六物圖の挿畫と五山版四部錄中にある十牛圖とを比較すれば、一は靜、一は動で、著しい進歩が看取せられる。十牛圖を周文の下繪と稱するも一概に否定し難く覺える。

嵯峨清涼寺藏の融通念佛繪二卷には享和年間の摹刻本があるが、それと全く相違するのみか、手彩色をさへ加へた二卷の繪卷が故小林文七氏の蒐集品中にあつた。惜しい哉大正十二年の震災火災で焼亡し、再び観ることは出来ない。嘗て右繪卷を一覽した時、手帳に寫取つた奥書を左に録して参考に供す。

奉施融通念佛繪三部内本

應永廿四年十月廿三日 良本

右此大念佛乃繪は鎮公上人の發願よて「勸進せしむと云々、彼意趣を隨喜奉奉」て開板せしむるものなり、「願ひ此善根乃功力をえて、普々父母六親眷屬乃至無邊乃」群類、おかし々安養化淨刹に往生せむ。敬白。

明徳二年 辛未 初夏二十七日 權律師珠運 在

残る一卷の奥書は右の國文を漢文に譯せしまで、最後に明徳元年 庚午 七月八日 今熊野成阿花押とある。

應永本の眞贋果して如何。黒川眞頼博士の考古畫譜卷十一を参照推考せられるも一興であらう。

足利時代の世相は下剋上の三字に盡きてゐる。主従の關係も本末嫡庶の關係も一切無視せられ、たゞ實力あるものが主權を掌握することゝなつた。應仁元年山名氏及びその興黨と細川氏及びその興黨との間に、京師を中心として展開された大兵亂は全國各地に波及し、連續するもの十一年、文明九年に至り漸く熄んだが、之によつて將軍・老臣・宿將の威權は地に墮ち、晝強盜ヒルカンゾウに等しい新興の「足輕」は、恣に人命を殺傷し、財寶を掠奪して憚る所がなかつた。

兵火と掠奪とにより、京洛住居の人々が貴賤・男女・僧俗を問はず、緣故を便つて地方に分散したことは想像に難くない。その一二の例を挙げれば、前關白一條教房は土佐に下り、前關白二條尹房父子・前左大臣三條公頼及び前記の小槻伊治等は山口に奔つて大内家に投じた。故に一面から論ずれば、公卿僧侶の退散は京洛の文化を衰勢に導いたに相違ないが、一面か

ら見れば、京洛の文化は彼等によつて地方へ輸入せられたとも言へる。況や各地の豪族及び當時著しく繁榮に向へる沿海市街地の巨商大賈は、彼等を優遇好待し、文化の進歩に貢獻するものさへ少からずあつた。

明貿易は幕府の大きな財源であつたが、應仁二年幕府は財政困難のため貿易品を調達する能はず、僅に一艘を派遣したるに止り、之と同時に大内細川兩氏も各、一隻を派遣した。然るに應仁亂において大内氏は山名方の中堅であつたため、爾來兩氏はまた明貿易の利權を争ふことゝなつた。大内氏は瀬戸内海から北九州へかけて海上權を有し、博多がその代表港であり、細川氏は和泉の守護たる緣故から、堺港を發着點とし、遣明船をして土佐薩摩の海上を航行せしめた。故に兩氏の對抗は、換言すれば、博多堺兩港商人の競争であつた。

堺の出版物として第一に擧ぐべきは正平版の論語集解で、從來知られた三種の版本につき、その開版の前後を論じ、學者の間に幾度か意見が交換せられた。

① (粘)

堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平 甲辰 五月吉日謹誌

論語卷第十

經一千二百二十三字 注一千一百七十五字

②

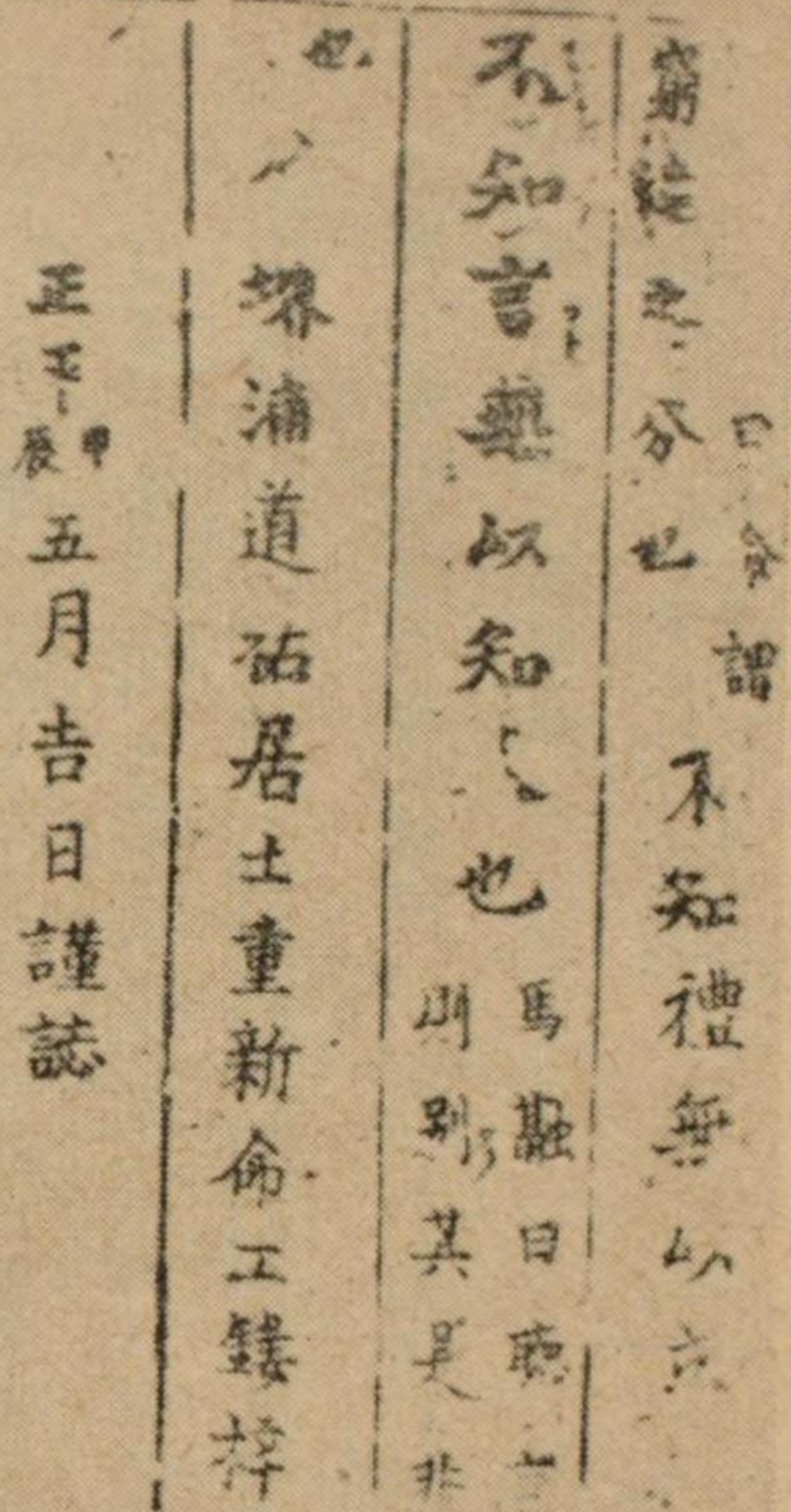
學古神德楷法日下逸人貫書

三種の版本とは所謂雙跋本・單跋本・及び無跋本で、卷末に①②の跋文を併せ存するを雙跋本、①のみを存するを單跋本、①②共に無きを無跋本と稱した。

無跋本の板本三十二枚が今國立博物館にある。縦八寸五分横二尺九寸乃至三尺一寸五分、表裏とも一面に二丁づつ彫刻されてゐる。江戸時代の末に相國寺から賣物に出たを、狩谷檉齋が勸めて江戸の書林須原屋茂兵衛に買はしめ、明治二十三年同家から更に博物館に賣上げたので、須原屋が買入れた頃は、單跋本の①を削つた板

木であることが判然してゐたといふ。三種の中無跋本の印刷が最後になされたことは容易に判明したが、單跋本雙跋本印行の前後を、從來の學者のやうに跋文

だけで決定しようとするのは無理である。この跋文は讀めば讀むほど疑義を生ずる。(一)開版者道祐居士は足利義氏の第四子、俗名を祐氏といつたといふが、この説明には何等典據を示してない。加之、單跋本には道祐を道祐に作つてゐる。開版者の名が二様あつては議論にならない。次に重新命工鏤梓の一句を文字の通りに解釋すれば、前版を改めて新に板木を起した意味で、正平甲辰五月はそれが完成した年月である。然らば、單跋雙跋二種の複刻本が同年同月に出現した事情をどう



第二十四圖 正平版論語集解卷尾刊語 (三分の一)

説明し得るか、覺束ない話である。(二)筆者日下逸人貫は何人か。或人は是の字を分解すれば日下の人となる。筆者は菅原氏で名を是貫といつた人だと説明するが、是貫の名は菅原氏の系圖に見えない。また或人は古神徳は天平時代の寫經生である。日下逸人貫は彼の楷書を學んだ人であると説明する。成る程天平時代に古神徳といふ寫經生がゐたには相違ないが、楷書の名家として後世に尊崇せられたとは、嘗て聞いたことが無い。

の古鈔本古文尙書第六冊の卷末に記されて居ることだ。この古鈔本の卷末には元亨二年沙門素慶の跋文があるが、同人に於いては第八章に一言してゐるから参照せられたい。其二は所謂雙跋本と違つた別種の雙跋本が、大阪府立圖書館及び宮内省圖書寮藏本中より發見せられたことである。二部とも不完全で、二部を合するも尙一部の完本を成さないが、之を所謂雙跋本及び單跋本と比較對照した結果(一)正平版論語は本書を以て初印本とすること(二)單跋本の道祐は道祐を正しとすること(三)正

平甲辰五月は初印本完成の年月で、雙跋本單跋本は單にこの年月を存するに止り、出版はその以後なること等が判明した。

それなら何時初印本論語の板木が壞滅し、何時二種の覆刻本が出来たか、大概なりと知りたいものである。正平十九年から三十五年後の應永六年、堺には大兵亂があつた。周防の大内義弘は關東管領足利氏に通じ、兵を率ゐて堺に陣し、將軍義滿の軍と戰つて敗死してゐる。初印本論語の板木は或はこの亂によつて壞滅に歸したのであらう。二種の覆刻本中、雙跋本の刊記は全く正平本によつたもので、東洋文庫所藏の一部には、卷一から卷六まで毎卷々末に、建武四年清原頼元が飯尾三郎左金吾に授けた本を以て、寛正五年或人^{○氏名不詳}が校合した旨が記されて居るし、また明應八年周防の杉武道が雙跋本を覆刻してゐる事實もある。それから單跋本では三條西實隆が長享三年皇太子勝仁親王から賜はつた旨を、卷三及び卷六の末に自筆で記したものが、これまた東洋文庫所藏にある。是等の諸點から考へると、冒頭の問題は大體見當が附く。單跋本が無跋本となり、その板木の一半さへ保存されてゐるに反し、雙跋本の傳本が極めて少いのは、板木が早く失はれた爲であらう。天文二年泉南の阿佐井野氏が出版した論語の跋文に、清原宣賢が「泉南有佳士、厥名曰阿佐井野、一日謂予云、東京魯論之板者、天下寶也、雖然離丙丁厄而灰燼矣、是可忍乎、今要得家本以重鏤梓若何云々」と書いてゐるのもこの推定を確める一材料である。

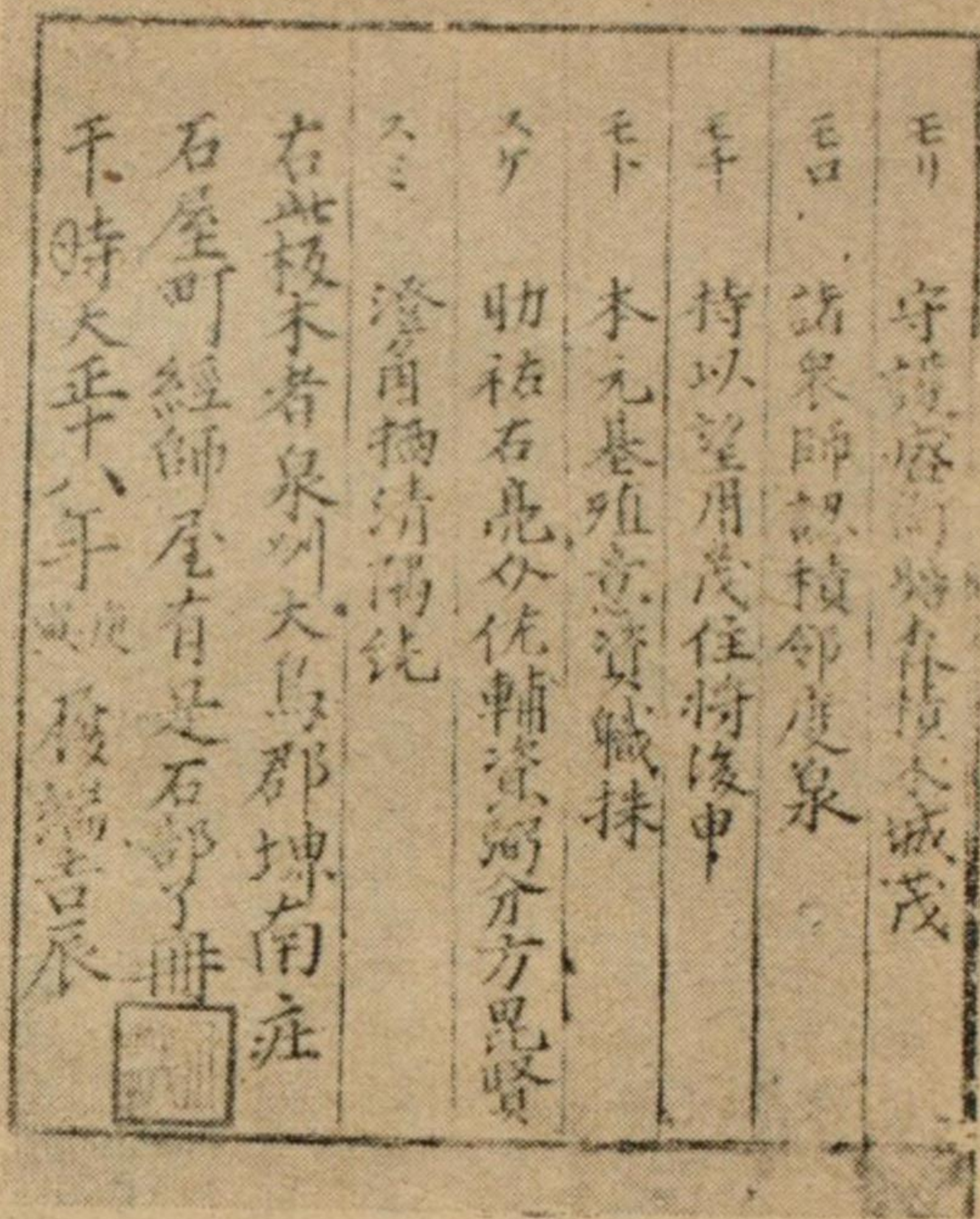
阿佐井野氏が開版した天文版論語の板木は堺市南宗寺に存し、彼の佳士であることを如實に示してゐるが、阿佐井野氏といふのみで、その名の知れぬのは、如何にも物足りぬ心地がする。さりながら阿佐井野氏で出版事業に關係した人が二人まである。甲を宗禎といひ、乙を宗瑞といふ。宗禎は明應三年相國寺の光源和尚が覆刻した三體詩法(三冊)の板木を買取つて家塾に置き、有志者の摺寫を待ち、宗瑞は大永八年醫書大全十卷を翻印し、本邦醫書開版の濫觴をなしてゐる。宗瑞の特色は幻雲壽桂の書いた圖書の跋文によつて知られる。

吾邦以儒釋書鏤板者往々有焉、然未會及醫方、惠民之澤、人皆爲鮮、近世醫書大全自大明來、固醫家至寶也、所

憶其本稍少、欲見而未見者多矣、泉南阿佐井野宗瑞捨財刊行、彼明本有三寫之謬、今就諸家考本方以正斤兩、雖一毫髮、私不增損、蓋宗瑞之志、不爲利、而在救濟天下人、偉哉陰德之報、永及子孫矣

大永八年戊子七月吉日 幻雲壽桂誌

堺には尙記述を忘却すべからざる出版物が一部ある。「右此板木者泉州大鳥郡堺南莊石屋町經師屋有是石部了冊圖于時天正十八年寅履端吉辰」の刊記を有する節用集二冊がそれだ。但しこの刊記を載する最後の二葉が、本文に比して多少版式を



第二十五圖 天正版節用集 (三分の一)

異にしてある所から考へると、恐らくこの一葉だけが天正十八年の補刻で、本文はそれ以前に彫刻せられたのであらう。

尙同人は天正二年四體千文書法を元槩本から覆刻してゐる。紙數二十四丁に過ぎぬが、卷首から卷末の刊記まで全部が法帖風に陰刻である點が物珍らしい。

節用とは用度を節約する意味であるが、節用集といへば簡略で便利を旨とする假名別門別併用の國語辭書を指すことゝなつてゐる。

とはいへ本書には刊寫を合して二十數種の異本があるから、假名別といつてもお・お・おの三部をい・を・えに併せたるあり、併せざるあり、天地・時節・草木・人倫等の門の數は十乃至十五に及び、京町盡・名乗集・日本國盡等の附録も一定してゐない。

虎關・玄惠・環翠軒等を以て著者とすは皆確實性を缺くのみか、嘗て存在したといふ文明・明應の古鈔本は今も所在を失し、現在は弘治・永祿の寫本を以て最古のものとする有様故、原本の著作年代を推定することさへ覺束ない。

堺版の節用集と前後して京都及び奈良において別版が出た。前者を易林本、後者を饅頭屋本といふ。前者は卷末に慶長二

年附易林の跋文があるからで、開版者平井勝左衛門休興は本願寺の家臣である。また後者は奈良の饅頭屋林宗二の開版にかかるといふ説があるからだ。林家の先祖淨因は、建仁寺の龍山禪師が元から歸朝する時、禪師に従つて來朝歸化したといふ。

宗二は先祖から數へて六代目で、明應七年に生れ、天正九年八十四歳で歿してゐる。和漢の學を好み、西三條實隆、清原宣賢の講筵に侍し、手寫した漢籍類が多分に建仁寺内兩見院に保存せられてゐる。林家の奈良における開業が何年から判然せぬが、天正初年の著書と認められる蹇驢嘶餘に「近世宗二ト云フ者奈良ニ住ス、松永霜臺秀久 懇ニシテ、南都中ノ饅頭ヲ一人シテ賣ル。故ニ利分厚シ」とある。富有で學問好の宗二を半截横綴の饅頭屋本の開版者と認めて差支あるまい。

かく接近した三市において、三部の節用集が相次いで出版せられる程、本書の需要は多かつたのである。應仁文明の大兵亂は京師の文化を凋落に導く代りに、地方の文化を振起する端緒を開いたと前文に記述したが、茲にその實例が示された。從來書物を手にするは、素養ある公卿・武士・僧侶に限り、而も概ね寫本でのみ傳はつたものが、今は刊行せられて入手容易となるのみか、音訓の附記によつて閲讀使用二つながら簡便となつた。平民文化の向上は當然の結果と言はねばならぬ。

次に堺と關係淺からざる大内氏について一言する。大内氏は百濟國琳聖太子を初代とし、中古以來歷代周防權介又は周防介を名乗つた豪族で、第十八世義弘に至り、舊領周防・長門・石見の外に新に豊前・和泉・紀伊の守護を加へられた。但し義弘は晩年將軍義滿と合はず、堺で敗死したが、弟盛見能く幕府に仕へ、大内家を存続せしめたのみならず、一方には大いに大内家の文運を開拓した。應永十四年使を朝鮮に遣はして一切經を求めたこと、同年比丘靈通を助けて藏乘法數を刊行したと、惟肖・得巖・岐陽・方秀等五山の巨匠と詩文の交あること等が、優に之を證明する。

盛見の子教弘から政弘・義興・義隆と歷代相承けて文運の興隆に寄與したことは意想外である。即ち教弘の晩年、明應二年には「周陽眞樂軒」で聚分韻略が刊行せられた。義隆開版の聚分韻略の刊記に「舊版」とあるのは、恐らく之を指すので

、あらう。義興は十歳の時、右大臣三條公教から家傳の御註孝經を授與せられてゐる。之は公教の高祖父押小路内府公忠が後小松院の御讀書始用として書き進じたといふ歴史附のものであつた。義興は管領代として京都在位十一年、彼と深交を訂した景徐周麟は彼のために大内府君壽甲肖像贊を作り、また彼の老臣杉武道は明應八年正平版論語雙跋本を覆刻した。

義隆に至り、大内氏の崇文は絶頂に達した。彼は日を定めて、家臣と共に儒書・歌道・有職・管絃等を修業したのみならず、後には自ら經書を講じて近侍に聽聞せしめたといふ。文に過ぎて武を忘れた結果は、遂に大内家の滅亡を招いたのであるに相違ないが、彼が師清原頼賢から同人祖父宣賢の四書五經の抄ある旨を聞き、錢五萬貫を贈つて之を借鈔せしめたこと、嚴島大願寺の僧道本の請を容れ、一切經を朝鮮に求むる疏を署名交付したこと、使を朝鮮に遣り、朱子新註の五經を求めたこと、天文八年聚分韻略を開版したこと等、美舉として數ふべきものも多くあつた。天文版聚分韻略は小形本二冊であるが、卷末にある長文の刊記は頗る堂々たるもので最後に「時天文八年己亥春三月日 正四位下行太宰大貳兼兵部權大輔周防介臣多々良朝臣義隆」とある。大内版と稱すべきは、實にこの一本のみである。



第二十六圖 桂庵玄樹畫像

大内氏と相並んで、九州では肥後の菊池氏薩摩の島津氏が好學崇文を以て聞えた。さうしてこの兩氏を誘導補翼した桂庵玄樹が、大内氏の居城山口の出身であることは偶然といへ一奇である。桂庵は早歲より京師に上り、南禪寺の雙桂院に入り、惟肖得巖に侍して儒釋古今の書を學誦し、應仁元年四十二歳の時、幕府遣明船の一員として海を渡り、先づ北京に上つて公務を了し、次いで蘇杭の間に遊び、諸儒を訪うて程朱の新義を學ぶこと前後七年、文明五年を以て歸朝した。當時京師は兵亂中であつたため、桂庵は難を避けて石見周防に轉じ、同八年九州に入り、肥後の隈府で領主菊池重朝及び老臣隈部忠直等の歡待を受くること年餘、その間重朝の建てた聖堂の釋奠に會して詩を獻じ、

或は士庶縉流のために朱子學を講じてゐたが、桂庵忠直兩者の友誼が桂庵入薩後依然として繼續したことは、師の詩集島陰漁唱集によつて知られる。

薩・隅・日三國の太守島津氏は初代忠久が近衛家の所領島津莊の地頭であつたため、莊名を以て氏としたといはれる。禪宗が島津領に誘導せられたは南北朝の初期で、第七代元久が福昌寺の開山として迎へた石屋は、元久の一子に勸めて出家せしめたため、元久歿後島津家は家督相續について内訌を生じたといふ。事實は兎もあれ、禪僧の勢力の著しかつたことは分る。桂庵は文明十年島津忠昌の懇請によつて入薩したが、この時忠昌は僅に十六歳である。如何に賢明な君侯とは申せ、背後に然るべき人物がゐて、采配を揮つたことと思はれる。

上は忠昌及びその一族から下は士庶縉流に至るまで、競つて桂庵の講筵に列し、朱子學は鬱然として勃興した。重野安繹博士は桂庵の朱子學講説と薩・隅・日三州士道の大成とを論じ、

抑々朱子學と云ふものは、忠孝仁義の道を主とする教であつて、佛道と能く合ふ所がある。……そこで程朱學をいたしますのに、佛者の智識の人は皆それによりまして發明して、儒佛合一と云ふ者で、朱子の集註を説きます。……桂庵が新註を講じました其効能と申すものは、實に薩・隅・日三州の骨子となりまして、とうとう御維新までズツトそれが貫き、花もさき實も結んだといつてもよろしからうと存じます。

といはれて居るが、之は決して薩・隅・日三州に限つたことでなく、武家時代を通じて朱子學が重要視せられた所以だ。

桂庵に師事した老臣の一人伊地知重貞は文明十二年大學章句一冊を新刊した。これが新注本經書出版の嚆矢です。惜しいかな原刻本は現存しないが、十年後即ち延徳四年に再刊せられた分が大阪懷徳堂書院に傳はつてゐる。刊記に「文明龍集辛丑夏六月、左衛門尉平氏伊地知重貞、命工鏤梓薩州鹿嶋、延徳壬子孟冬桂樹禪院」とある。桂樹禪院は忠昌の創建、桂庵を開山としてゐる禪寺だ。

是より先長享元年桂庵は日向の飢肥に往つてゐるが、これは島津家の一族で同地に城いてゐる島津忠廣の招に應じたので、爾來日薩の間を往來すること十數年文龜二年退隱、永正五年六月八十二歳で歿し、藩主忠昌も同年二月四十五歳で自殺した。強臣の跋扈を制壓しかねたのが原因だと傳へますが、委しいことは分りません。

桂庵の後を承けて大いに朱子學を鼓吹したのは飢肥出生の文之玄昌といつて有名な鐵砲記—葡萄牙人が種子ヶ島へ來て鐵砲を傳へたことを書いた和尚ですが、この人の弟子の如竹散人が、元和十年に桂庵和尚家法倭點一冊を出版してゐる。この書はもと「四書五經古註與新註之作者」で、「并句讀之事」と題し、岐陽が創めた新しい和訓に、桂庵が若干の訂正増補を加へたものに過ぎぬと言ふ人もありますが、新しい書名に特に桂庵和尚の四字を入れてある所から見ると、同人を主な著作者と見て差支なからうと考へる。博士家の古い訓方と相違する朱子學派の新しい訓方を記述したもので、國語漢文に興味を持つ方々に一讀をお勧めします。

薩摩では大學章句の外に、聚分韻略が文明十三年「薩陽和泉莊」で、また日向では聚分韻略と碧巖錄が「眞幸院」から出版せられてゐる。前者には享祿三年の刊記年があるが、後者は刊年を缺いてゐる。以上二書は需要が多かつたと見え、室町後半各地で出版せられた分を合算すると、各々十種内外に及んでゐます。

以上で堺・大内領・島津領における出版文化は一應略述した。三ヶ所以外の各地については記述の餘裕がないので省略する。讀者諸君が川瀬一馬氏の勞著「古活字版之研究」本文一〇〇頁と附録中世印刷文化地圖とを對照し、諸君在住の町村又は附近において刊行せられた古刻本の書名冊數等を豫め研究し、その遺品を捜査閱覽せられたら、興味深きものがあらうと御勧めする。

參考書

鎌倉室町時代之儒教 足利衍述 昭和七年 日本古典全集刊行會

正平本論語考 川瀬一馬 昭和十八年 (斯文十三卷九號)

饅頭屋林宗二に就いて 川瀬一馬 昭和二十四年 (ビブリヤー一號)

訪書餘録 (前出)

舊刊影譜 (前出)

古本節用集の研究 上田萬年、橋本進吉 大正五年 (東京帝國大學文科大學紀要第二)

大内氏實錄 五冊 近藤清石 明治十八年 山口市宮川臣吉刊

薩蕃史談集 重野安繹、小牧昌業 大正元年 講話會

僧桂庵支樹和尚傳 (家法和訓を載す) 日本教育史資料 明治二十四年 文部省總務局

桂庵和尚家法倭點 明治四十一年 上村閑堂私家版

漢學紀源 伊地知季安 明治四十年 續々群書類從第十 (國書刊行會)

第十三章 活字版 上

活字印刷の發明が人類の文化に重大な影響を及したことは事新しく言ふまでもない。

西洋では活字印刷の祖をマインツ及びストラスブルグの人ヨハン・グーテンベルヒとしてゐるが、同人の經歷は實は十分判明してゐない。生歿年月も墓地も分らない。誕生は一四〇〇年頃、死去は一四六八年二月廿六日以前、また墓地はマインツの聖フランシス寺だらうといふのですが、一七四二年に寺が破壊せられたので、搜索の手蔓がない。多數の學者が多年苦心して集めた正確な史料三十七種中、活字印刷に關する分僅に三種、またライプチヒの印刷出版博物館内グーテンベルヒとザールにある巨大な彼の肖像も、想像から作つたものと聞いては吃驚するばかりです。

支那では宋の慶曆間布衣畢生が膠泥を以て文字を刻し、松脂・臘・及び紙灰を交へ塗つた鋅板上に置き、火に近づけて之を焼いたものを以て活字の創造として傳へてゐるが、活字の製造・組立・印刷等に關する一層精細の記事は元の王積がその著「農書」の卷後に載せた文章や武英殿聚珍版程式等にある。武英殿聚珍版とは清の乾隆帝が同殿で活字印刷に附せられた祕籍の總稱である。

朝鮮における活字鑄造及び印刷は支那から傳はり、高麗朝の末頃から行はれたが、それが大規模に實施せられたのは、李朝第三世太宗の三年癸未からである。是歲敕して「爲治、必須博觀典籍、吾東方在海外、中國之書罕至、板刻易泐、且難盡刊天下之書、豫欲範銅爲字、隨書所之、以廣其傳、爲無窮之利」と曰ひ、悉く内帑を出してその費に充てたとある。爾後第四世世宗の二年庚子から第九世成宗の二十四年癸丑に至るまで前後九回の改鑄あり、その都度新鑄の活字に、庚子字癸丑字といふ如く、干支を冠して前の活字と字體を區別することゝなつた。

活字印刷は支那から朝鮮に傳はり、文祿の役によつて朝鮮から日本に輸入せられた。さうして日本では文祿二年、後陽成天皇の厚き御思召で、最初に古文孝經が活字で印刷せられたと記録にはあるが、實物は存しない。然るに日本と遠く離れた伊太利から、「天正遣歐使節」の歸朝に托して送つて來たローマ字活字・印刷機械・及び職工二人は、天正十八年長崎に着し、翌十九年肥前高來郡加津佐において「サントスの御作業の内拔書」二卷一冊を出版した。支那活字及び西洋活字の二大系統は相前後して日本に入り、前者は皇室・將軍・侯伯・僧侶・大賈の保護により、後者は宗教團體に特有な共同精神により、出版事業は質量共に顯著な進歩を示すに至つた。即ち前者は漢字漢文から片假名平假名を交へた國語國文となり、後者はラテン語及びローマ字綴の國語以外に、前者同様漢字假名交りの國書を出版するに至つた。但し兩系統の出版事業の間に、直接の關係又は交渉があつたか否か。それについてまだ十分な材料を得ぬは残念である。

秀吉の「高麗入」は彼に在つては第十四世宣祖の朝に起つた。當時多數の朝鮮本や銅活字が本邦に將來せられたことは、醫師曲直瀨家舊藏で養安院藏書といふ朱印を押した多數の朝鮮本は、先祖が浮田秀家から貰つたものと稱すること、家康薨後、多數の朝鮮本が尾州家水戸家に分與せられたこと、加藤清正の息女が紀州家初代頼宣に嫁する時、銅活字を持參したといふこと等により想像に難くない。

秀吉が名護屋から大阪に凱旋したのは、文祿二年八月それから二月と經たぬ中に、後陽成天皇の勸慮により、(一)古文孝經の活字印刷が着手せられた。西洞院時慶卿記同年閏九月廿一日の條に「天晴、禁中御觸、折紙アリ、雖當番則參上候、ハシ字を十一兩人ニ被仰付撰候」とある。禁中より至急集合すべしとの廻狀あり、召に應じて罷出でたる面々十一二人にて、早速文字を撰んだといふ意味で、時慶等は今の文撰の役を勤めたのだ。秀吉から活字その外附屬器具を献上したといふ記録は見えませんが、獻上があつたればこそ、孝經印刷に御着手遊ばされたと解釋いたして至當と存じます。文撰は引續き行はれ、印刷成就の上、十一月六日時慶は六條有廣と共に活字を分類してもとの函に復し、同十六日新版拜見、十二月八日

一部づつ兩人へ、同十三日その他の近侍へ右拜領仰付けられたと、時慶卿日記に見える。
かやうに古文孝經が開版せられたは事實ですが、遺憾ながら傳本が無い。然し天皇の御英學は慶長二年に至つて續行せられ、同年から八年までに七部十二冊の開版を見るに至つた。

(三)錦繡段の刊語に「錦繡段者、東阜天隱之所編、而未_レ有_レ刊行、茲悉取_レ載籍文字、鏤_レ一字於_レ一梓、某_レ布諸一版、印_レ一

紙、纔改_レ某布、則渠祿亦莫_レ不_レ適用、此規模頃出_レ朝鮮、傳達_レ天聽、乃依_レ彼様、使_レ工摹寫_レ焉」云々とあり。(三)勸學文の刊語も之と同様、朝鮮の活字印刷法に據つたことを記してゐる。本邦で活字版を古く

命工每一梓鏤一字某布之一版印之
此法出朝鮮甚無不便因茲摸寫此書

慶長二年八月下旬

第二十七圖 勸版勸學文刊語 (三分の一)

紙、纔改_レ某布、則渠祿亦莫_レ不_レ適用、此規模頃出_レ朝鮮、傳達_レ天聽、乃依_レ彼様、使_レ工摹寫_レ焉」云々とあり。(三)勸學文の刊語も之と同様、朝鮮の活字印刷法に據つたことを記してゐる。本邦で活字版を古く一字版或は植字版と稱したは、かゝる點から出たのであらう。但し文祿に使用された銅活字と相違し、(三)以後の印刷はすべて木活字を以てなされてゐることを注意せねばならぬ。

天皇また彼は正親町後陽成兩天皇の侍讀であつた。國賢が書紀刊行の命を拜し、その底本を作成するに方り、神道を専門とする吉田家が、清原家と重縁の間柄であるため、吉田家の援助を受けたには相違無からうが、「蓋神道者、爲_レ萬法之根柢、儒教者爲_レ枝葉、佛教者爲_レ花實、彼二教者、皆是神道之末葉也」と言ふに至つては、僻見の謗を免れ難からう。本書の見返に「日本書紀慶長己亥季春新刊」の十二字を三行に記した大きな美事な木記がある。

御湯殿上日記によると、本書は慶長四年閏三月三日成就、五日伊勢兩宮、廿五日春日神社に獻納せられたとある。

(五)四書の中大學は閏三月八日、中庸は同十七日に成就し、四書_ニ孝經全部が成就したのは五月廿五日といふ。見返に神代卷同様書名と刊年とを記した楷書の木記があるが(七)職原抄に限り篆書で職原抄慶長己亥季夏刊とある。さうして(五)の印刷物に刊語を有するものは一部もない。



第二十八圖 勸版日本書記木記 (三分の一)

一年間に四部の印刷を見た勸版は五年から七年へかけ中止の姿となつた。關ヶ原役に引續いて二三年間政局極めて多事なりしたためと考へられる。清原國賢の子で後陽成後水尾兩朝の侍讀を奉じた船橋秀賢の日記を慶長日件録といふ。同書八年正月廿一日の條に、「已刻參内、白氏文集之中、上陽人・陵園妾・李夫人・玉昭君詩四五首、長恨歌傳等、五妃曲卜名

命あり、さうしてその印刷が間もなく成就し、例によつて近臣に御下附あつたことは、時慶卿記言繼卿記四月一日の條によつて知られるが、文祿の孝經同様確實な傳本はまだ發見されない。
文祿の勸版が朝鮮輸入の銅活字を以て印刷せられたに反し、慶長の勸版はすべて大型の木活字を以て印刷せられてゐる。銅活字の鑄造には多くの時日と費用とを要するを以て、一時權宜の處置を取られたものと考へられる。家康の銅活字十萬

簡獻上の件は、慶長十年四月以來、家康側では圓光寺元信、宮廷側では船橋秀賢を通じて屢々談合あり、翌年六月上旬元信から銅活字本字五萬五千三百六十字、註字三萬五千八百九十五字、合九萬二千二百六十一字内譯と合計と合はずと種盤種盤一卦一卦銷子銷子百餘百餘とを百箱に納めて、秀賢に引渡し、秀賢は早速之を天覽に供した所、大いに歎感あらせられたと傳へてゐる。さすれば家康獻納の銅活字は早速御使用あるべき筈と考へられるが、事實は之に反し、十五年の後即ち後水尾天皇元和七年に至り、漸く皇朝類苑七十八卷十五冊の刊行があつた。同書が銅活字版であることは疑ないが、それが果して家康獻納の銅活字であるか否かは容易に明言し難い。

徳川家康の政治的行動については毀譽褒貶色々あらうが、彼の古書蒐集及び謄寫刊行によるその複製については毀なく貶なく、たゞ譽と褒あるのみである。

家康の開版事業は二期に分れる。前期は京洛及び伏見地方において、慶長四年から十一年まで八年間、閑室三要元信及び西笑承兌を監督として合計十部廿八冊を木活字を以て印行し、後期は駿府において元和元年より翌二年に亘り、林道春及び金地院崇傳を監督とし、大藏一覽集及び群書治要を銅活字を以て印行せしめた。

三要元信は肥前國小城郡の人で、足利學校第九世の庠主である。天正十九年關白秀次が陸奥征伐の歸途足利を訪ひ、學校の什物典籍を押收して西歸するに當り、三要は同行を餘儀なくせられたが、秀次自殺後それ等の寶物は家康の好意により恙なく學校に返附せられた。家康と三要と相知るに至つたは、恐らく之が端緒で、爾來三要は伏見に隱居して時々家康の身邊

書名	卷數	冊數	刊記の年月	刊記の署名者
(一) 古文孝經	一	一	文祿二年十一月	
(二) 錦繡段	一	一	慶長二年七月	南禪靈三
(三) 勸學文	一	一	慶長二年八月	
(四) 日本書記神代卷	二	一	慶長四年二月	清原國賢
(五) 四書 <small>大學・中庸・論語各一</small>	五	五	慶長四年	
(六) 古文孝經	一	一	慶長四年	
(七) 職原抄	二	二	慶長四年六月	
(八) 五妃曲	一	一	慶長八年	
(九) 皇朝類苑	七八	一五	元和七年六月	前南禪瑞保

に伺候したらしく、また家康は師が易學の造詣深きのみならず、交遊博くして事務の才あるを知り、慶長四年木活字數十萬箇を興へて、孔子家語以下の印行に従事せしめ、翌五年の關ヶ原役には師を陣中に伴ひ、六年九月伏見に圓光寺を創設し、足利學校の制規を模して「上方之學校」を開き、三要を召して校長とし、寺領二百石を寄せ、儒釋の典籍二百餘部を下附した。

①孔子家語四②三略③六韜二の卷末には慶長四年五月附で三要の刊語がある。一例として家語の分を挙げると、「世際季運、而學校教將廢也、維時内府家康公、于文于武得其名、故興廢繼絶、爲後學刻梓文字數十萬、而賜予、退爲謝公之恩惠、初開家語、此書是聖人奧義、治世之要文、寔非小補也○下」といひ、最後に「前學校三要野納於城南伏見里書寫慈眼刊之」とある。前學校といへば足利學校前庠主の意味であるが、彼が正式に庠主を辭し、寒松が之に代つたは慶長七年である。それから最後の慈眼刊之は本書に使用した木活字の刻工の名を示すものであらう。

④貞觀政要八には慶長五年二月十五日西笑承兌の刊語がある。承兌は久しく秀吉の帷幄に參し、簡牘の事を掌るとあれば、今の所謂祕書役で、秀吉之に報いんため、慶長の初、相國寺内に豐光寺を建て、師を請じて開山第一世とした。政要の刊語によると、本書の底本は家康の命により、三要老禪諸本を校訂して作る所なりとある。さうして刊語の最終行、「前龍山見鹿苑承兌叟謹誌」の次に「慈眼久德刊之」とあるは、慈眼刊之と同人同意である。

三略と六韜とは慶長四年・同五年・同九年、都合三度印行せられてゐるが、傳本極めて少く、殊に三略は第一回第三回の傳本を缺いてゐる。

⑤周易三の底本は三要の校訂によること、卷末所載慶長十年四月承兌の刊語に詳かである。⑥上「如」閑室大禪師者、壯歲入東關、讀四書六經、而品論之、講說之、既稱學校者、有年于茲、暮齡到洛陽、傳中峯法要、位空門極品、僉曰、儒釋兼併也、頃蒙大將軍源家康公鈞命、印行周易、其志要弘、聖道於萬年、能校正升差、而加陸德明音義於王輔嗣注、集

而大成者乎」といひ、最後に「予於禪師其情如骨肉、因需跋其後、不_レ得堅辭、漫書焉也」と結んでゐる。

(一〇)七書の第三冊及び第四冊において、六韜三略は第四回目の出版を見た。元佶の刊記に「前大將軍家康公、以_レ文安人、以_レ武威衆、天下萬民咸歸服、雖_レ周漢不能過、忽隨_レ公鈞命、記_レ七書於梓、以_レ講直_レ正_レ之畢矣」とある。

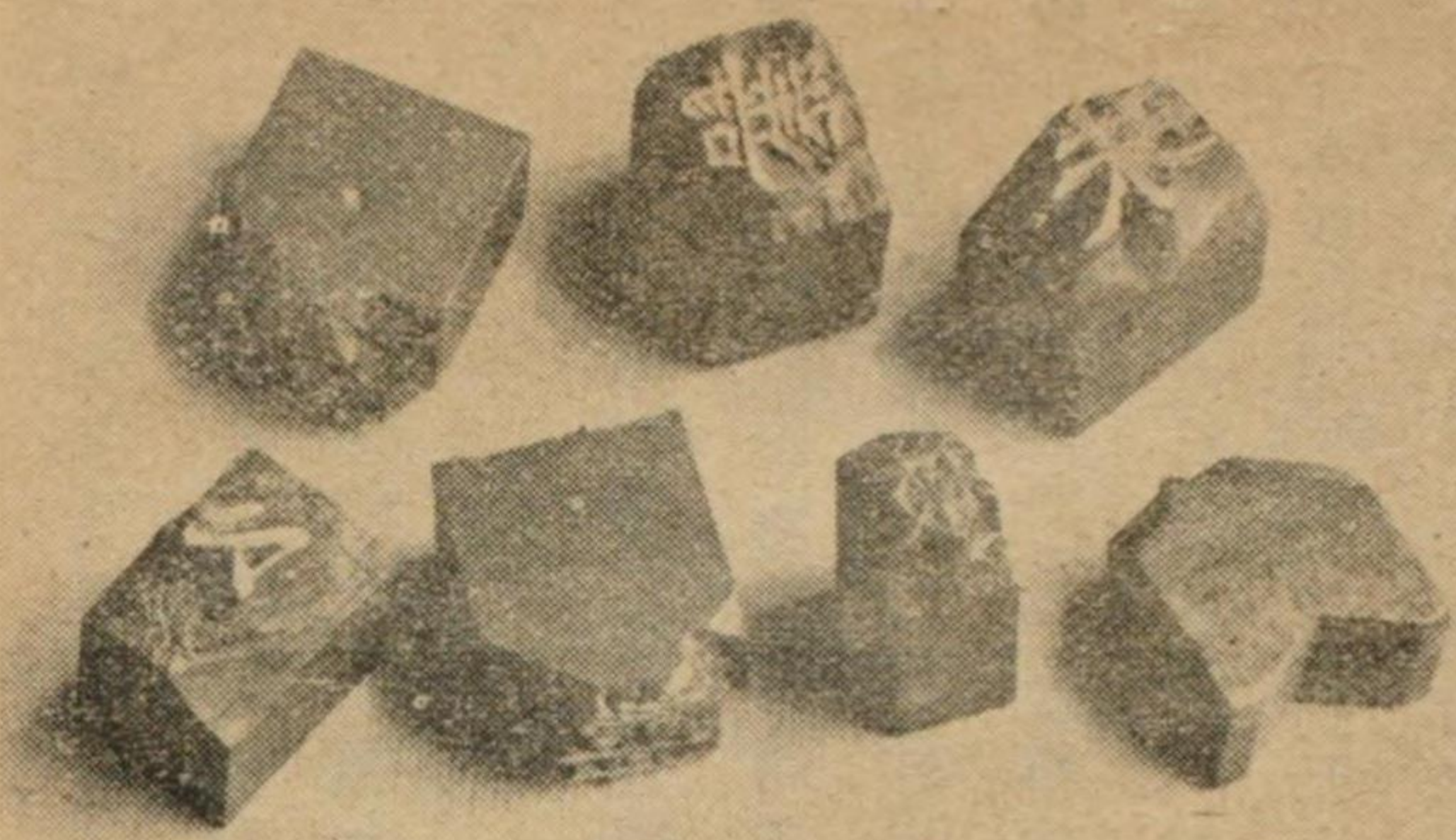
この七書には殆ど同時代の印行と認められる木活字の異版二種・

刊語最後の年月日を削れる活字版・及び之をその

まま整版とせるもの、都合四種あることが、川瀬氏の古活字版の研究に見える。異版の比較研究は博覧が根本条件であるが、一箇人の力で同一書籍の異版數種を集めることは先づは不可能である。最良の方法は圖書展覽會を利用するにありと、特に諸君に御注意する。

圓光寺は慶長十七年三遷化後間もなく相國寺中に移り、寛文七年更に現在の一乗寺村に移つた。文化年間皆川淇園は同寺で保管してゐた木活字を利用して、淇園文集十五冊遷史辰椀三冊等を開版してゐるが、同寺の木活字も近年著しく散佚した。寫眞に撮つたはその一部分で、底部が平面である活字とW形に切込のある活字との二種がある。W形の分は之に密接するやう△形の棒を盤の底に置いて、活字の安定を計つたであらう。

家康自身が開版したのではないが、家康の特許を得て、京都の老臣五十川了庵春意が慶長八年から印行に着手し、同十年三月承兌の刊記を加へて成就した東鑑五十一冊があ



第二十九圖 圓光寺木活字 (四分の三)

る。家康の藏本は小田原役の時使者として城中へ來た黒田孝高^{ヨシタカ}へ北條氏康が引出物とした抄本で、北條本といはれてゐる。今迄家康が三遷・承兌に命じて印行せしめた圖書はすべて漢籍であるが、東鑑は國書で漢字に片假名平假名を交へて書流されてゐる。了庵は慶長八年東鑑同様漢字假名交り文の太平記を出版した経験があるので、東鑑の愛讀者である家康は、藏書貸下といふ特別の便宜を與へて、その出版を了庵に勧誘したものと思はれる。然るに現存の太平記二種の中刊行年月の明記せられたは、刊記に「慶長癸卯季春既卯 富春堂 新刊」とあるもののみだ。癸卯は八年だから、前記の七年説―林鷲峰の了庵碑銘による―とは相違するが、その是非は姑く論ぜず、「富春堂新刊」の一句に注意して欲しい。了庵の堂號を富春堂と稱した直接の證據はなくとも、東鑑の活字本三種中、卷首目錄の末にこの一句を存するものが、了庵印行の東鑑であると言へよう。

羣書治要卷第一

周易

乾元亨利貞 象曰天行健君子以自強
不息九三君子終日乾乾夕惕若厲無咎
九五飛龍在天利見大人
上九亢龍有悔象曰大哉乾元萬

第三十圖 駿河版群書治要卷首 (三分の一)

了庵は、刊記に「慶長癸卯季春既卯 富春堂 新刊」とあるもののみだ。癸卯は八年だから、前記の七年説―林鷲峰の了庵碑銘による―とは相違するが、その是非は姑く論ぜず、「富春堂新刊」の一句に注意して欲しい。了庵の堂號を富春堂と稱した直接の證據はなくとも、東鑑の活字本三種中、卷首目錄の末にこの一句を存するものが、了庵印行の東鑑であると言へよう。

書治要 五十卷 三の三卷を缺くを銅活字を以て印刷せしめた。その顛末を本光國師^{崇傳}〇〇^{謙號}日記によつて略叙する。

慶長十九年八月崇傳が大藏一覽集を家康に獻納すると、家康が「これは重寶だ、百部か二百部印刷せよ、幸ひ銅字が二十萬の術かばかりある」と言つたといふ。これが本書印刷の端緒であるが、事業開始の命の下つたは二十年三月で、さうして印刷成就の上、その十部を道春が二條城に持參して家康の一覽に供したは六月晦日である。その間物書衆即ち寫字生五六名

の來援を清見寺に求めたこと、校合・字彫・植手・摺手・字木切等、印刷關係の職員十八人に對し、一人一日一升の扶持米を支給したこと、底本の文字に不明の箇所があつたため、急使を東福寺不二庵に馳せて、同庵の藏書借用方を懇請したこと等が傳はつてゐる。本書は印刷部數百二十五部。

群書治要の印刷は極めて迅速に進行した。即ち元和二年正月十九日、崇傳道春に本書開版の命あるや、兩人は即日京都駐在の板倉勝重に宛て、木切二人・彫手三人・植手十人・摺手五人・校合三人を下向せしむべき旨を依頼し、その中校合三人は適當の人員無きを以て、二月五日改めて五山の僧侶二人づつとし、同廿三日(一)活字及び印刷器具を駿府西ノ丸御納戸より取出して三ノ丸の能芝居に移し、(二)從業員の規約を定め、同廿五日には不足の活字新鑄を擔當せる明人林五官の請により、助手三四名を京都より呼下した。かくて事業は順調に進み、六月上旬に至つて成就したことは、國師日記同月十四日の條に「圭西堂圭西堂は南禪寺の僧で校合衆の一人だ 六月七日之狀來、板木相濟、可罷上由之事也」とあるので分る。家康が四月十七日に薨去し、本書の大成を見なかつたは同情に堪へぬ。

(一) 覺

- 一 銅大字五萬八千六百四拾六
- 一 同小字參萬千六百拾八
- 合大小字八萬九千八百拾四
- 是は前方の百箱に入候る有之分也。
- 一 銅大字八千八百四拾四
- 一 同小字千五百拾四
- 一 同丁付字拾

合大小壹萬參百六拾八

是は駿府に大藏一覽板器(本)之時仕立候て、前方之百箱之内に加入申候。

- 一 銅卦長短合百五拾四本
- 此内八拾參本は前方有之、七拾壹本は大藏一覽之時仕立申候。
- 一 すりばん拾三面
- 此内五面は前方有之、八面は大藏一覽之時仕立候
- 一 つめ木四拾八本
- 此内廿四本は前方有之、廿四本は大藏一覽之時仕立申候以下略

この覺書中「前方有之」活字とは、大藏一覽集印刷に先立つて鑄造せられた分であることは明白だが、單にその員數が慶長十一年家康から宮中に獻じた銅活字と略同數であるといふ前提だけで、大藏一覽集印刷の砌、改めて宮中から御貸下になつたものだらうと推定するは、早計と言はざるを得ぬ。

(二) 群書治要板行の間諸法度

- 一 朝者印刷を罷出、晩者酉之刻以後可有休息事。
- 一 高談付口論等一切有之間敷事。
- 一 各互に勵相、不可有油斷事。
- 一 御座敷舞臺樂屋ニ私之細工仕、御座敷中あらし申間敷事。
- 一 人々私之知人引ニ見物など入間敷事。

元和二年二月廿三日

畔柳壽學 判

家康以外武家の出版物としては、豊臣秀頼の帝鑑圖說^六と上杉家の老臣直江山城守兼續の文選^{三十}一冊とがある。

船橋秀賢が秀頼の母淀君のために式目假名抄を作り、また秀頼のために三略・十七條憲法・吳子等を講じたことはある。また承兌は慶長十一年秀頼開版の帝鑑圖說^六の卷末に「頃 右相府秀頼公及見此書、手之口之、寅夕無不披覽也、仍命工刻于梓、而壽其傳於無窮也」と記してゐる。然し秀頼は文祿二年の誕生で本年僅に十四歳とすれば、この文章を鵜呑にする事も出来ません。

本書にある多數の挿畫は整版で、明版の原本から覆刻せられたものである。直江兼續の六臣註文選^{目一冊}は慶長十二年の出版だ。「慶長丁未姑洗上旬八日 板行畢」といふ極めて簡單な刊記があるのみで、印行者も印行の顛末も知り難いが、羅山文集所藏五臣註文選跋に「此本近歳米澤黃門景勝陪臣直江山城守某、開版法寺、余請秋元但馬守泰朝、而後泰朝告景勝、而得之以寄余」とあるので、開版者の氏名と印刷所とが分つた。

要法寺は京都にある日蓮宗の寺院で、その塔頭本地院の日性(圓智)は弱冠にして關東に赴き、暫く足利に滞在したといふ。年代を案すると、座主は第七世九華の時であつたらしい。然らば直江山城守に聘用せられた涸轍祖博と同門である。日性と山城守との接近は、或は涸轍の仲介によるのではないか。然しさういふ廻り遠い研究を爲るより、出来ることなら日性の著作三部と直江版文選とに使用されてゐる同一活字を對照すれば、文選が要法寺版であることは即坐に了解せられよう。因にいふ、直江版の文選には寛永二年の重刊本があるが、慶長判は有界、寛永版は無界だから、直ぐ區別が附く。

日性の著述法華經傳記は慶長五年、元祖蓮公薩埵略傳は同六年の發行であるが、和漢皇統編年合運圖^{二冊}には刊年がない。この書は和漢對照の年代記で、發行の都度、記事を補足しては開版したものと見え、慶長五年・八年・十年・若しくは十六年の記事で終つてゐるもの等數種ある。

以上三種の外に、圓智は(一)砂石集十冊(二)太平記二十冊(三)論語集解二冊(四)天臺四教儀集註三冊等を出版してゐる。(一)には慶長十年圓智校讎の刊語があるが(二)には文選同様單に「慶長十年乙九月上旬日」と年月のみを記し、(四)には年月の外に「於京師要法精舍板行焉」と出版所の名前を加へ(三)には卷末には「慈眼刊正運刊 洛訥要法寺御開板」とあるが、これは活字版の様に見えるが、實は活字版でなくて整版である。本邦では活字版が先づ出來て、それが整版となるのが普通の順序である。それから、慈眼の名は慶長四年開版の孔子家語・同五年の貞觀政要に、正運の名は慶長九年開版の大廣益玉篇^{宗純}刊 同十年の周易^{洞轍}に見える。さすれば慶長の半頃活字本の論語集解が要法寺で出版せられた所、活字本は傳本を缺き、その整版覆製本のみが現存してゐるものと解釋すべきである。

京都では要法寺の外、本國寺・本能寺・西本願寺・一條清和院・妙心寺等、京都附近では叡山・奈良・高野、地方では三河・下總の諸寺院で開版せられたものが多數あるが、今その記事を割愛する。

第十四章 活字版 下

皇室・將軍・侯伯・寺院とは事變り、儒者・醫師・平民の開版事業については、一層之を宣揚顯彰せねばならぬと信ずる。船橋秀賢は禁中に奉仕する身分でありながら、一面には一箇の學者として印刷文化に助力を吝まなかつた。彼は無名氏某が古文孝經活字本を印行して幼學の几案に備へんとするを聞き、跋文の末に、「予感其志、遂出累代の本借與焉、予亦時々加校訂者也。慶長壬寅八月壬子明經儒清原秀賢誌」と記して與へた。また慶長十三年刊職原抄二冊には同年四月附で彼の跋文があるが、その末に「爰中原職忠欲鋟梓之、余需校讎、因聚考數本、從其宜而已、並可便覽者七八科、附其後」とある。

彼の日記慶長日件録には、書誌學に關し興味ある記事が頻々として出て來る。

民間で最も早く活字印刷に従事したは小瀬甫庵道喜である。關白秀次に仕へて侍醫となり、秀次滅亡後雲州侯(堀尾氏)加州侯に仕へ、寛永七年歿す。壽七十七歳。著書に信長記・太閤記等ありといふので彼の經歷はつきる。著書からいへば、彼は大衆的歴史作家であり、出版物からいへば、醫師を本業としたことが認められるが、刊記を自作し、それに住所を明記してゐることが一特色である。例へば「桑城洛陽西洞院通勤解由小路南町住居甫庵道喜、新刊一字板、繡此書、以應童蒙之求也」○下 維時文祿第五丙申小春吉辰道喜記」と蒙求冊の刊語に見える。

(二)蒙求以下(巴)東垣先生十書冊に至るまで、皆大小二種の活字を使用し、大字の分には朝鮮活字の様式が能く現れてゐる。

(三)十四經發揮は朝鮮本を底本としたらしく、整版による人身圖十四圖を挿入し、(三)醫學正傳冊は支那朝鮮兩本を以て對校したことが刊語に見える。(巴)は前半の五書だけが現存してゐるばかりで、刊語も「慶長丁酉刻梓洛之甫庵道喜」と極めて簡單だ。

(五)檢地帳・人數帳・政要抄と(六)年代紀略とに刊語は無いが、政要抄及び年代紀略が甫庵の編纂であること、並びに(五)に使用せられてゐる大小の活字から推して彼の出版物中に加へて然るべしと信ずる。

○鮮朝國都表出勢之衆

一萬人	備前宰相
千人	増田右衛門尉
二千人	石田治部少輔
千二百人	大谷刑部少輔
二千人	前野但馬守
千人	賀藤遠江守

第三十一圖 人數帳第十一丁オモテ(三分の一)

書名	卷數	冊數	刊記の年月	刊記の署名者
(二)標題徐狀元補注蒙求	三	三	文祿五年十月	道喜
(三)十四經發揮	三	一	慶長元年十二月	
(三)新編醫學正傳	八	八十	慶長二年四月	
(四)東垣先生十書	五	慶長二年		
(五)前關白秀吉公御檢地帳之目錄 <small>附朝鮮御進發之人數帳、政要抄</small>	一	一		
(六)年代紀略				

足利學校の學生中に後年名醫と呼ばれた曲直瀬道三の名を發見するは稀有と言はざるを得ない。道三、字一溪、雖知苦齋は京都の人、年少僧籍に入り、廿

二歳の時東行して足利學校に學び、次いで導道田代三喜を師として李朱の醫學を修めること十餘年、天文十四年京師に歸つた。道三の自記に導道は武州越生コトに生れ、中年大明に渡海し、棲遲十有二年東垣丹溪の正統を學び得て歸朝、天文六年七十三歳で死去したとある。三喜は入明の前後足利にゐた事實はあるが、學校に在學したといふ積極的の證據は無い。道三は歸洛後専ら醫治に従ふと共に、學舎啓廸院を開いて子弟を教授し、名聲天下に聞えた。文祿四年歿す。壽八十九。著書十餘部、その中啓廸集冊は天正二年の編で、正親町天皇の勅命により之を叡覽に供するや、天皇大いに御感賞あり、道三の別號雖知苦齋を改めて、翠竹院の稱號を賜ひ、策彦和尙に命じて序文を作らしめ給うた名著である。

二世道三は初代道三の甥で名を玄朔といひ、初め延命院と號し、後に延壽院と改む。朝幕の信用厚く、また半頃關白秀次の事に座して常陸に配流せられ、鎬居中常山方十二卷の著あり、寛永八年歿す。年八十三。著書十餘部中、醫學天正記二卷は彼の處方録で、天正慶長間における文武名士の病症を細記し、延壽撮要は言行・房事・飲食の三項に分つて、養生の大意を示してゐる。後者が廣く行はれたことは、同書に異版の活字本があるを以て知られよう。難經本義二冊には同人慶長十二年

醫方大成論終



山城國上京寺町於于一糸道場迎稱
寺叔行焉
慶長第三戊戌年重陽辰

第三十二圖 醫方大成論卷末(三分の一)

の刊語、藥性能毒には慶長十三年の刊語があるが、兩書とも玄朔の著述でなく刊行を援助しただけだ。醫師でありながら醫書以外の太平記や東鑑の出版に従事した五十川了庵の事蹟は前に述べた。慶長四年に元亨釋書十冊、同十年に徒然草壽命院抄二冊を出版した如庵宗室も或は醫師ではないかと思はれる。

これと反對に、醫師ではないが多數の醫書を刊行したものに醫德堂守三と梅壽軒とがある。前者は慶長八年及び九年の刊記ある醫書三部を、同十二年に太平記賢愚抄二冊を印行してゐるが、後者は同十三年から十七年までに刊記あ

る醫書六部を刊行し、事業は元和寛永に至るまで繼續してゐる。以上六部中醫方大成論が二回まで出版されてゐるが、本書には是より先慶長三年山城國上京寺町一條道場迎稱寺で印行せられたものが家藏にある。

日本における印刷は最初整版を用ひた。印刷せられた書籍は最初が漢籍、次が國書で、國書と雖も全部漢字を用ひたものが先づ印刷せられ、漢字に片假名平假名を交へたものは、遙か後年に至つて出現した。整版に代ふるに活字を以てするに至

つても、この順序に變更は無いが、漢字に片假名平假名を交へた國書の刊行年代は、全部漢字の漢籍及び國書のそれに著しく接近してゐる。

慶長元年の平假名活字曆日斷片が藤原貞幹の好古目錄上に模刻紹介せられ、同九年の活字曆日の實物が守田文庫所藏にある。人生に直接必要な曆が慶長初期に連年印行せられたと稱しても別に異論はあるまい。引續いて慶長半頃發行の太平記・徒然草(壽命院)抄・東鑑・砂石集に假名活字の一種、稀には兩種が用ひられてゐるが、それ等は單に讀めるといふだけで、文字としては一向見るに足らない。然るに慶長十二三年印行の解紛記三冊・本朝古今銘盡・及び口傳書に至り、稍、觀賞の價値あるは、漢字と平假名活字とが調和したものと考へる。從來の假名交り印刷物は既成の漢字に實用的の假名活字を加へたまでで、兩者の調和は全く無視せられた。然るに家康が天下を統一してから既に數年を経、四海泰平を謳歌せる時に當り、新興の出版者にとつては、漢字活字を新刻し、楷書體を廢して行書體とする如きは、易々たることで、それが印刷面の美觀を呈するに至つた原因である。さうして印刷面の美觀は、更に進んで用紙裝釘の善美を促し、所謂嵯峨本の出現によつて絶頂に達した。

久しく用ひられた書誌學上の名稱でありながら、現在之を使用せんと欲して再検討を加へると、從來與へられた定義に満足しかねるものがある。嵯峨本・角倉本・光悅本の三名稱がその一實例である。中村富平の辨疑書目錄には三者を同意味に使用してゐるが、和田維四郎氏の嵯峨本考には、板下から料紙裝潢等の意匠に至るまで、本阿彌光悅の工夫によると認め得るものを光悅本とし、一方には光悅本を模範としつゝ、他方には實用方面を顧慮した角倉素庵の出版物を嵯峨本としてゐる。然し和田氏の定義による光悅本・嵯峨本の限界は決して明確ではない。寧ろ嵯峨本的一名稱を用ひ、光悅が自ら板下を書き、その裝潢に意匠を凝らしたものと、及び板下の書風、その裝潢に、十分光悅の影響を認め得るものを指すと解した方が無難であらう。

本阿彌光悦の本業は刀劍の鑑定及び手入等で、家道頗る豊かであつたが、人物高雅、筆札繪畫に堪能なるのみならず、茶事を嗜み、意匠に富み、公武貴紳との交際甚だ博かつた。寛永十四年歿す、壽八十一。史上における嵯峨本の重要さにつき、川瀬一馬氏は(一)嵯峨本の出現により平假名交り活字印本、換言すれば國文學書の開版が著しく隆盛に赴いたこと、(二)發達の遅れた挿畫が嵯峨本に至つて大いに進歩したこと、(三)嵯峨本の板下が流麗な光悦風の文字で書かれてあると同時に、その料紙、装潢が光悦の意匠により、藤原時代の優秀な料紙(唐紙)装潢から脱化したことであると説かれてゐる。何人も之には異論あるまい。

料紙の原料は雁皮紙で、その厚薄により厚様薄様の別あり、厚様薄様とも具引グビキ具粉コを引のみを施したるあり、厚様には更にその上に雲母摺キクラズを加へたものもあるが、薄様には具引をせず直ちに雲母摺を加へてゐる。また料紙に何等の加工を施さぬもあれば、色變イロガハリと稱し、一冊の中に種々の色紙を用ひたのものもある。装釘は印刷面に適應するやう巻物もあれば、帖もあり、また冊子もある。

以下嵯峨本と認めるもの十三種につき、簡短に説明を加へよう。

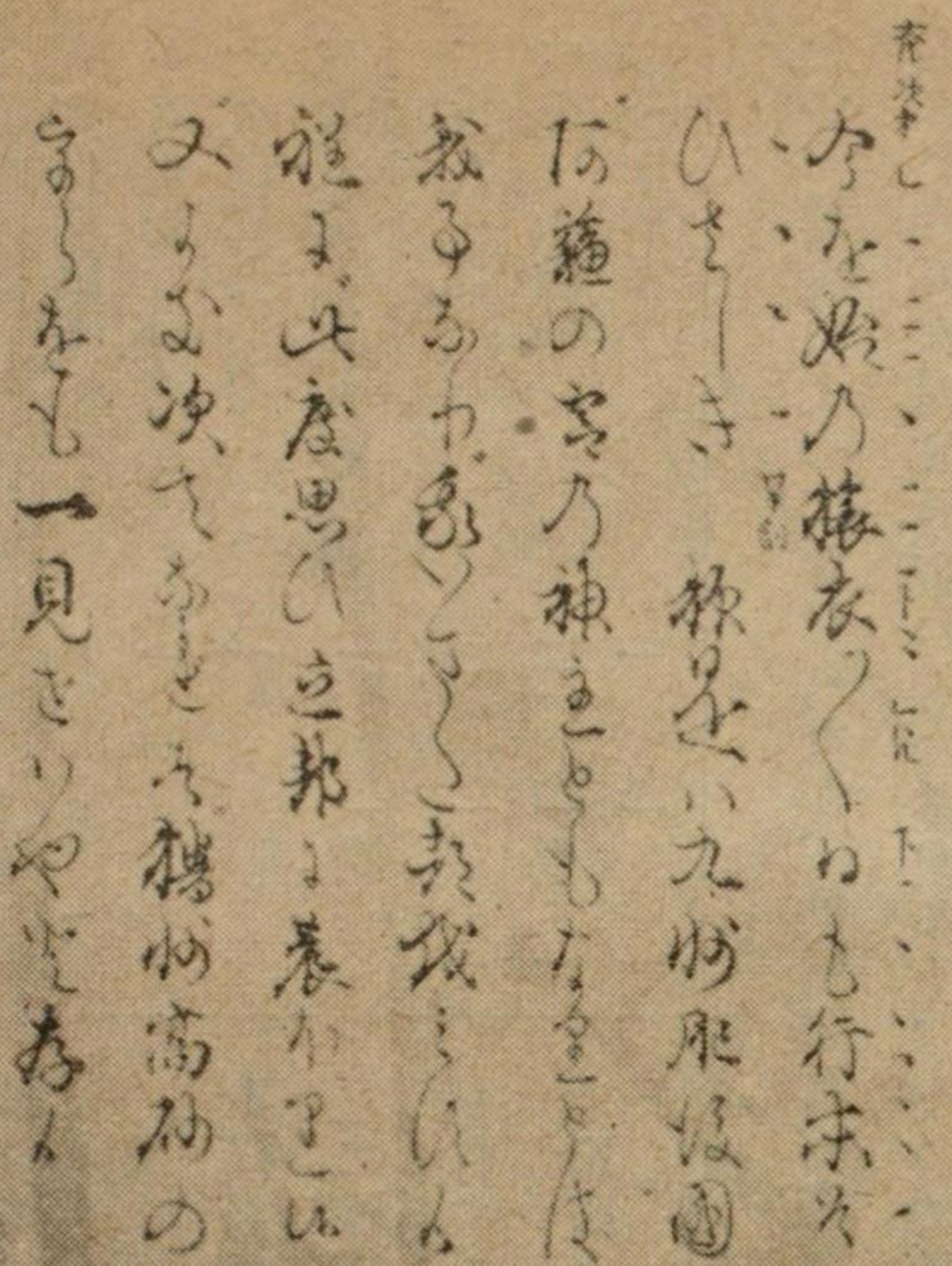
(一)伊勢物語二冊 慶長十三年也足叟素然の刊語がある。也足叟は中納言中院通勝ナカノケンの法號で、近世歌道の達人であることは言ふまでもない。刊語によれば、本書は彼が定家の天福本を校訂したもので、挿畫を加へたのも彼の考按による。従來は署名の下に通勝の花押あるものと、然らざるものとに區別したが、近年川瀬氏は數十部の傳本を精査して、異版十種あることを發表せられた。(二)以下異版の數は表に譲る。

(三)伊勢物語聞書三冊 題簽に肖聞抄上(中・下)とある。前書同様也足叟の刊語があつて、素然の自署及び自得の黒印があるものと、無いものとに區別したが、前者に二種あることが發見せられ、都合三種となつた。本書の作者牡丹花肖柏が校讎者也足叟と系譜上の關係あること、及び本書新刊に方り、分つて三冊としたことが刊語によつて知られる。

(三)源氏小鏡二冊 花山院長親が足利義持のために源氏物語の大意を記した二冊物で、上巻の末に「慶長十五年十二月日書之」とあるのみであるが、所用の活字が肖聞抄に酷似してゐる所から、嵯峨本中に數へられるに至つた。

(四)方丈記には帖装と袋綴の二種あり、活字は同一であるが植字方が相違する。本書及び以下のものには刊記を缺く。

(五)撰集抄三冊 西行の作で新古人の傳記行狀を撰集したもの。元和寛永年間の本書活字印本が皆本書を粉本としてゐる。



第三十三圖 光悦本高砂(三分の一)

(六)徒然草二冊 料紙に二種あり、二種とも同一活字を使用しながら、植字方が相違し、その上別に一種の異版がある。
(七)觀世流謡本百帖百冊 嵯峨本中最も大部なもので、料紙に五種の區別あり、また版式を異にするもの八種に及ぶ。その中二種は完本が無いので之を除き、残る六種を比較すると、收載の曲目に多少の相違がある。出版年代は不明であるが、慶長後半期から元和六年所謂卯月本の出現前までと推定して差支あるまい。

(八)久世舞三十四曲本と(九)同三十六曲本とは、謡本より稍々小型の同一活字を以て印刷せられてゐる。後者が前者の改訂増補であることは言ふまでもない。兩者とも帖装のみである。

(一〇)新古今和歌集抄月詠歌卷 光悦自筆の歌卷を整版とし卷子に装潢したもの。安田文庫に一本を藏するのみで、それに生憎題簽が無いので、内容から推してこの題名を附したといふ。

(一一)百人一首 二種あり。版式及び装潢を異にしてゐるが、その中帖装の分は料紙といひ活字といひ、美術的印刷物と稱す

書名	異版の数	冊数	帖数
(一) 伊勢物語	一〇種	二	
(二) 伊勢物語聞書(宵聞抄)	三	三	
(三) 源氏小鏡	一	二	
(四) 方丈記	二	一	一
(五) 撰集抄	一	三	
(六) 徒然草	五	二	
(七) 觀世流謠本	八	一〇〇	一〇〇
(八) 久世舞 <small>三十曲本</small>	一		一
(九) 久世舞 <small>三十六曲本</small>	一		一
(一〇) 新古今和歌集抄月詠 <small>(歌卷)</small>	一	一卷	
(一一) 百人一首	二	一	一
(一二) 三十六歌仙	二	一卷	一
(一三) 二十四孝	一	一	一

べきである。

(三)三十六歌仙 整版の大本と活字版との二種がある。吾人は前者にある歌仙の肖像と圖上に題せる光悦風の和歌の文字とを嘆賞せざるを得ない。

(三)二十四孝 整版本で、總紙數二十四葉、每葉表面の上段に孝子行狀圖、下段より裏面へかけて本文がある。挿畫には唐本の影響を受けてゐる所があるやに窺はれる。

慶長元和寛永の三代五十年間は活字版の隆盛期であつた。この期に發行せられた漢籍は經・史・子・集一六九部、抄物三十一部、合計二百部に達すといへば、之に醫書・佛書・國書を加へたら、驚くべき數字に達するであらう。その中刊記を有するあり、有せざるあり、また折角刊記を有するも、不十分で、刊行年月或は出版者の氏名住所を明白にし難きは言ふに及ばず、折角氏名はありながら、それが出版者の氏名か刻工の氏名か判定しがたきあり、出版が篤志者によつてなされたか、業者によつてなされたか、換言すれば書籍そのものが非賣品であるか、賣品であるか區別し難いものもある。無刊記本に至りては同書異版のもの甚だ多く、その總數は有刊記本に數倍し、紙質と版式とによつて出版年代の前後を定め得るに過ぎざるを以て、その研究の困難は不十分な有刊記本に十倍する。

本屋といふ名稱は何時頃から用ひられたか。自分の知つてゐる限では魁本大字 諸儒箋解古文眞寶後集二冊の刊記に「慶長十四己酉年陽月下旬室町通 近衛町本屋新七刊行」とあるのが一番古い。然しながら經卷や書籍の出版は古くから行はれ、出版者や投資者の親類知己等に無代で頒布せられたが、出版者と縁故の無いもので之が入手を希望する者あるを慮り、紙代・摺賃・表裝等を見

定し(正安二年及び元應二年高野山の目錄を見よ)、希望者は經師に注文を發し、代銀を支拂つたと考へる。經師は本來經卷の裝潢を業とする者の稱であるが、その下に屋字を加へて後の本屋の意味に用ひられたことは、天正十八年刊の節用集卷末に本書の板木は堺南庄經師屋石部了冊の許に有りと記してあるので證せられよう。慶長年間京洛の寺院の名で刊行した外典も少からず、また元和から寛永へかけての活字印本には、「本能寺前町閣板」と刊記にあるものが數部ある。寺内においても門前においても人通り多き場所に書林が軒を並べて立つたのであらう。

參考書

McMurtrie, Douglas C.; Some Facts concerning the Invention of Printing, Chicago, 1939.
 武英殿聚珍版程式 刊本
 右文故事 内餘錄(前出)
 日本古刻書史 朝倉萬三 明治四十二年(圖書刊行會出版目錄と合本)
 訪書餘錄 六冊 (前出)
 世界印刷通史總説・日本篇 支那篇・朝鮮篇 二冊 中山久四郎、龍肅 昭和五年 三秀舎記念出版
 日本古印刷文化史 木宮泰彦 昭和七年 富山房
 古活字版之研究 同附圖(前出)
 勅版集影 鈴鹿三七 昭和五年
 高木文庫古活字版目錄 川瀬一馬、高木義一 昭和八年 高木家刊
 道三家傳 享保十五年 三向書寫の奥書あり 寫
 嵯峨本考 和田維四郎 大正五年 著者自家版
 嵯峨本圖考 川瀬一馬 昭和七年 一誠堂

第十五章 日本耶蘇會版

日本に初めて耶蘇教を傳へた聖フランシスコ・ザビエーが鹿兒島に上陸したのは一五四九年八月十五日天文十八年七月廿二日、豊後の日出港を出帆して印度に向つたのが一五五一年十一月二十日ですから、在留期間は二年三ヶ月餘に過ぎなかつた。彼は日本人の耶蘇教國留學を、日本人のために又日本布教のために必要なりとし、來朝早々四人の日本人を援助してマラッカへ送り、歸朝の際にも然るべき留學生を求めたのですが、差當り適當な候補者も見當らなかつたので、在留中忠實に自分の左右に奉侍してゐたベルナルド、マテウス兩名日本の氏名不詳を選び、彼等を伴つて日本を發した。

以上二人の中マテウスは不幸にもゴアで病歿したが、ベルナルドは一五五三年九月葡國リスボン着、コインブラの修練所に入學し、一五五五年の春から冬の初までローマに滞在、その間耶蘇會長イグナシウス・ロヨラに面謁してゐますが、コインブラに歸つてから間もなく病死し、現在墓石の所在も不明とのこと、日本人で歐洲の地を踏んだは彼が第一です。

ザビエー以後日本に渡來した諸教師中、ザビエーの遺業を著しく整理擴張したのは一五七九年天正七年肥前口ノ津に到着した神父アレックスandro・バリニヤノ Alessandro Valignano である。彼は日本を(一)都(二)豊後及び下豊後を除いた九州の三布教區に分け、教育機關としてセミナリヨ・コレジヨ・及び修練所の三つを設け、また九州の三大名大友・有馬・大村三家を勧誘し、正副各々二名の少年使節をローマ教皇の許に派遣せしめた。正使は大友家を代表する伊東マンシヨ(満所)、有馬大村兩家を代表する千々石ミゲル(彌解留)、副使は中浦ジュリアン(壽理安)・原マルチノ(丸知野)で、伊東は十三歳、中浦は十二歳、千々石と原との年齢は判然しないが、兩名共恐らくは上記二人と同年齢の少年であつたでせう。かく使節に少年を選んだは、彼等が年長者に比し、能く長途航海の困難や氣候風土の變化に堪へ得るものと認められたからである。

使節一行は一五八二年二月廿日天正十年二月廿八日長崎を發し、一五八五年三月廿三日天正十三年三月廿二日滯なく教皇グレゴリオ十三世に謁見したが、歸路は往路に比して一層の日月を要し、一五九〇年七月廿一日天正十八年六月廿日を以て漸く長崎に着した。之は一行のマカオ滞在が二年に及んだ結果である。

數年に互る使節一行の旅行中豊臣秀吉の耶蘇教に對する態度が一變し、天正十五年には耶蘇教師放逐令が出た。そこでバリニヤノは印度副王と相談の上、バリニヤノ自身使節となり、副王の書狀贈物を携へ、遣歐使節を帶同して日本に赴くことになり、漸くその議が容れられ、京都聚樂第でバリニヤノ及び四使節が秀吉に謁見したは天正十九年閏正月八日一五九一年三月三日した。

使節一行は往路ゴアでバリニヤノに別れた。耶蘇會本部からの命令で、バリニヤノに印度に留まれとあるのだから、詮方ないとはいふものゝ、彼等に取つては遺憾千萬であつたに相違ない。彼等は歸路ゴアでバリニヤノに再會するや、悦禁せず、聖ポーロ學院に恩師を聘し、原マルチノが總代となつてラテン語の感謝演説を行つた。その筆記が翌一五八八年原マルチノの演説 *Oratio habita a Fara D. Martino, Japonio* と題し、ゴアで出版され、出版者として「日本人コンスタンチヌス・ヅラツス」*Constantinus Dourat Japonio* と記載されてゐる。神父ドロテウス・シリング師の「日本における切支丹版」によると、彼は肥前諫早けんそうの産で、一六一四年四十八歳といへば、原の演説を出版した時は二十二三歳の青年である。使節が歸朝する時携へた印刷機には二人の印刷者が附いてゐた。一人は神弟ヨハネス・バプチスタ・ペスケ、残る一人氏名不詳の分はヅラツスに相違なからうとある。

原の演説を印刷した活字は日本最初の耶蘇會版サントスの御作業に使用してある活字と同一である。さすれば使節が携帯した印刷機械と活字とは日本へ來る前に、ゴアで一働きたことになる。否ゴアばかりでなく、マカオでも亦運轉せられ、一五八八年ジョアン・ボニファッシヨの正しき兒童教育、*João Bonifacio, S. J. Christiani Pueri Instituto*。一五九〇年

ザアルテ・デ・サンデの日本使節記 Duarte de Sande, S. J. De Missione Legatorum Japonensium の出版となつた。前者は「日本のセミナリヨ學生の道德とラテン語の進歩とに深い關心を有する自分が、第二回の日本訪問を行ふに當り、彼等に適應する良著を贈らんと欲するからだ」とバリニアノの獻呈の辭に見える。本書は一五八八年ゴブルゴスで第二版が公刊せられる前に、著者からバリニャノに送つた寫本を底本としたものらしい。

ORATIO HABITA À FARAD. MARTINO
Iaponto, suo & sociorū nomine, cū ab Europa rediret.
ad Patrē Alexádrū Valignanū Visitatorē Societatis
IESV, Goz in D. Pauli Collegio, pridie Non.
Iunij, Anno Domini
1587



CVM FACVLTA TE Inquisitorū & Superiorū
GOAE
Excudebat Constátinus Dourat' Iaponius in
Societatis IESV.
1588

第三十四圖 「原マルチノの演説」(ゴア, 1588年版)の扉 (原寸)

日本使節記は正しき教育と同一の活字及びビニエツト扉の書名と發行者の氏名や刊年との中間にある小さな畫を使用してゐる。バリニャノが四使節の日記から編輯した旅行中の見聞談

を、四使節と有馬侯の同胞レオ・大村侯の同胞リヌスとの質問應答に假托して、ラテン文に書下したものである。卷頭にあるサンデの獻呈の辭によると、本書を日本語に翻譯する意志は十分あつた。また日本語なくしては、日本布教のために、バリニャノの希望するやうな大きな結果は得られまいと思はれるにも拘らず、日本譯は遂に刷出せられなかつた。昭和十年本書原文が東洋文庫によつて覆印せられ、同十七年京都帝大教授泉井久之助外三氏の苦心になる譯文が同文庫から發行せられたことは感謝に堪へない。

以上三書を印刷した活字印刷機は何所の製造でどれだけの大きさであつたか。サンデの印刷面は横十センチ、縦十四センチ、八頁毎に折記號がありますから、四頁がけで、さうしてその印刷機は伊太利製であつたでせう。

印刷師ペスケ外一名とこの印刷機・活字・附屬器具とが日本に到着したは使節と同時、即ち一五九〇年七月で、さうして印刷事業は直ちに開始せられ、翌九一年サントスの御作業の内拔書二卷 Sanctos no Gosagueo-no uehi Nugiyaqi となつて出現した。爾來引續き日本の耶蘇會で出版した書籍を總稱して便宜上耶蘇會版又は切支丹版などと稱へますが、正しくいへば日本の二字を冠すべきです。

この方面の先覺者は多年日本に駐在せられた英國外交官サー・エルネスト・エム・サトー氏で、ロンドン、オックスフォード、ライデン、ローマの諸圖書館にある耶蘇會版十四種を解題し、十數葉の挿畫を加へた日本耶蘇會刊行志を私費で出版された。爾來同書に漏れたものが上智大學教授ヨハネス・ラウレス師その他によつて追々發見せられ、現在廿七種となつたが、その中米國に買取られた一部は依然所在不明です。

以上二十七種を簡單に解題しますから、一覽表と對照して御通讀下さい。是等はすべて活字印刷物ですが、その活字の上から分類すると、ロトマ字活字によるもの十六種、國字活字によるもの十一種となる。こゝに國字活字といふのは漢字と假名とを混用したものの便宜上の名稱です。

(一)サントスの御作業の内抜書 *Sanctos no Gosagued-no uchi Nuqiragi*. 書名のサントスは諸聖人の意味で、十二使徒は勿論諸聖人殉教者の言行を種々の書籍から抜萃したもので、譯者は醫師養方軒パウロ *Paulo Yoto Vicente* 父子で、彼等が國語國文に堪能であつたことは、耶蘇會神父の手紙に再三記載せられてゐる位です。兩人が耶蘇會に入會したが一五八〇年ですから、譯文はずつと以前に完成したものと思はれる。本書が一五九一年即ち天正十九年に、九州の一角加津佐の日本耶蘇會コレジョで、ローマ字活字で印刷せられたことを、二年後の文祿二年、古文孝經が京都の御所で朝鮮將來の銅活字で印行せられたことと對照し、我等は無限の興味を感じる次第です。

(二)ルイス・グラナダ *Louis de Granada, O. P. Fides no Doshi*. *ヒデス* (信仰)の導師一名信心錄 譯者ペドロ・ラモン *Pedro Ramon* は一五四九年西班牙サラゴッサに生れ、一五七七年日本に來た神父である。譯文が上出来である所から考へると、養方軒パウロカピセンテの校訂を経たものらしい。刊地が天草に變つたはコレジョの同地移轉による。

(三)ドチリイナ *Doctrina Christiana*. もと葡國リスボンの某學院に保管せられ、村上直次郎博士やジョルタン・ド・フレイタス氏の一覽したのだが、何時しが賣品となり、大正六年和蘭のナイホフ書林から東洋文庫の手に歸した。昭和三年本書の覆刻本と、橋本進吉氏が本文のローマ字を國字に改め、之に數篇の考證を加へた吉利支丹教義の研究とが、同文庫から出版せられた。

本書は耶蘇教の教義を師弟の問答に假托し、(教義)、(十字架)、(法主の經)、(聖母の經)等の十二章内第八章を佚すで説明し、之に若干の追加と用語の説明とを加へたものである。執筆者は何人であるか、不明だが、巡察使バリニャノが本書の出版に關係あつたこと、並びに原稿の完成に養方軒が助力したことは、東洋文庫本に日本の巡察使から葡國エボラの大僧正に獻呈したものととの識語により、またフロイスの日本歴史に「彼(パウロ)は日本の宗派及び古事に精通して居たので之に關する知識を我々に與へたが、その知識によつて異教徒に布教する問答書が彼の助力の結果遂に完成するに至つた」とあるので分る。

(四)どちりいな 本書はバチカン文庫所藏。扉が缺けてゐるので、刊年も刊地も分らない。然し(三)(四)の本文を比較すると殆ど同文で、第十一章中に數ヶ所文句の出入はあるが、意味においては一向相違ない。それから第八章の缺けてゐることも雙方同様で、バチカン本の目録には、第九章を「第八九」と改めてゐる。(三)の扉及び(四)の初葉裏面にある銅版畫は圖様こそ相違すれ、耶蘇が十字架を樹てた地球を擁した圖で、その下方又は周圍に「我は道なり、眞理なり、生命なり」ヨハネ聖福音書第十四章といふ題辭を記してゐる。

一六〇〇年出版のローマ字本ドチリナ・キリシタン(二)は同年長崎の後藤登明が出版した國字本(七)どちりなきりしたんと全然同一である。甲が國字に熟せざる外人教師のため、乙がローマ字を知らざる日本人のために出版せられたとすれば、同じ意味でローマ字本(三)と同年若しくはそれより少し遅れて、その國字本が發行せられた筈である。(四)は確にそれに違ひない。本書に使用してゐる活字は如何にも古拙である。然し漢字に行草體を使用して、平假名と調和を計つた點は、奇者を中心とした活字印刷に先鞭を着けたものといへる。

(五)洗禮と臨終の用意 これも亦扉が無いので、書名刊年共に不明、よつて假に標題の通り命名した。本書には本文初葉の前にある白紙に、(三)同様即ち日本の巡察使からエボラの大僧正に獻呈したものといふ識語がある。バリニャノが日本を去つたは一五二九年であり、さうして一五九五年十月廿日はフロイスの手紙に「死者を救ふ方法を書いた小冊子が、日本語で印刷せられた」とあるから、これら二つの年月日の間に開版になつたと言へよう。

(六)平家の物語・(四)エソポのファビュラス・(五)金句集 *Feique no Monogatari, Esopo no Fabulas, Kinkushu*. 以上三部を合綴して一冊としたものである。平家の物語は原本十二巻を要約して四巻とし、文語體を廢して問答體口語體を用ひてある。本書が神弟不干ファビアン *Fucan Fabian* の作であることは、同書巻頭に載せた彼の「讀者に與ふる書」によつて明白である。エソポのファビュラスはエソポの小傳と七十四篇の譬喩談とを口語體に、また最後の金句集は金句集・句双紙その他の

漢籍國書より選擇した二百八十二條の金言を文語體に書下してゐるが、兩方共作者の名は無い。

以上三部中、扉にある刊年は、(イ)が一五九二年、(ロ)が一五九三年であるが、(ハ)の扉の裏にある一五九三年二月廿三日附の刊記には、(イ)(ロ)(ハ)三部の書名を擧げてゐる。左すれば本書は最初から三部を一冊として、一五九三年に出版せられたものであらう。

不干の履歴は十分明白でないが、平家の物語の外、慶長十年に妙貞問答、元和六年に破提字子の著がある。前者は妙秀幽貞二女の問答に托し、神儒佛の三教を難じ、耶蘇教を揚げたもので、三卷の中、中下卷のみが寫本で残つてゐる。之と反對に後者は書名の示す如く提字子(神)教を烈しく攻撃したもので、卷頭に元和六年の序文を載せた整版本がある。序文の作者は好菴とあるが、自分は若い時から耶蘇宗門に入り、勤學二十年、一旦豁然として悟る所あり、彼の宗を棄て、から今に至るまで十五年を経たと叙べてゐる所を見れば、本文の作者、パビアン同人であることは疑ひない。彼の經歷が不明なのは、棄教問題に影響せられてゐると信ずる。

(七) マニユエル・アルバレス ラテン文典 *Mannel Alvarez, S. J. De Institutione Grammatica.* は耶蘇會のコレジヨで使用された教課書で、ラテン語で書かれてゐることは言ふ迄もないが、一方には日本學生向として動詞の變化に葡語日本語の翻譯を副へ、また日本の古書から多くの實例を引用する等、用意周到なるものがある。

(八) ラ・葡・日對譯辭書 *Dictionarium Latino Lusitanicum ac Japonicum.* アンブロシオ・カレピノのラテン語辭書を底本としたもの。一八七〇年司教プチジャン師がローマで翻刻した分は、葡語を除き、日本語の分も古代語を廢して現代語に代へた所がある。

(九) 聖イグナチウス・ド・ロヨラ 精神の鍛鍊 *St. Ignatius de Loyola Exercitia Spiritualia.* 獨逸上シレジア州オーベルグログウ市オッペルドルフ伯の所藏本で、約三百年間埋没してゐたが一九一二年に至り發見せられた。

(一〇) トーマス・ア・ケムピス コンテンツス・ムンヂ *Thomas a Kempis Contemptus Mundi.* ケムピスの名著「世を厭ふ」一名「キリストを學ぶ」をラテンの原本から忠實に翻譯したものであるに拘らず、譯者の氏名を載せず、林若吉氏舊藏の(五)本書國字本は一六一〇年京都出版で、それにも譯者の氏名はない。遣歐使節の一人原マルチノを以て譯者に擬する説もあるが、信用し難し。

一五九六年十二月十三日附フロイスの手紙によると、同年天草において本書の日本語版及びラテン語版が印行されたとあるが、ラテン語版はまだ見當らぬ。但し本書出版以前に本書の日本語譯(寫本)があつたことは、一五八八年細川忠興夫人グラシヤに贈られたことで證明せられる。

(一一) バルトロメー・デ・マルチリプス コンベンヂウム・スピリチュアリス・ドチリネー *Bartholomeu de Martyribus, O. P. Compendium Spiritualis Doctrinae* 一九三六年上智大學教授ヨハネス・ラウレス師が北平の北堂圖書館で發見せられた耶蘇會版三部の一つである。書名は精神修養の提要を意味する。著者は西班牙ブラガの大僧正で、一五九二年に隱退し、同年本書を出版した。而かもその出版がルイス・デ・グラナダの切なる勸誘によるものなること同人の序文に見ゆ。本書は第一部において精神を罪と過失とより救ふ方法を論じ、第二部において祈禱・熟慮・默禱等により、精神を神と一致せしむることを論じてゐる。思ふに日本の耶蘇會では修練士の讀物として、本書をラテン文のまま刊行したのであらう。

(一二) サルバートル・ムンヂ *Salvator Mundi* 書名は救世主の義、別名コンフェッションナリウム *Confessionarium* と云ふは、懺悔の仕法を七章に分つて論じてゐるからだ。一八六九年司教プチジャンが石版印刷に附した「とがのぞき規則」は、本書に若干の改訂を加へたものに過ぎぬ。

(一三) 落葉集 *Racuyoxue* 作者は序文において本書の書名と内容とを簡単に説明し、「茲に先達のもてあそびし文字言句の落葉を拾ひあつめ、かしらに母字を置き、それにつゞく字を下にならべて、字の音聲を右に記し、讀を左にして色葉集の跡

を追ひ、いろはの次第をまなんで、以て字書をつくる、仍此一冊を落葉集と號す」と記してゐる。作者は從來我が國に行はれた辭書が、概ね音或は訓の一方のみを示せるを不十分とし、第一部に音引の本篇落葉集を載せ、第二部に訓引の色葉字集を載せ、百官並びに唐名の大櫛と日本六十餘州の國盡とを附録とし、更に第三部として小玉篇を加へ、「文字のかたちを見て其よみこゑをしる」に便にした。

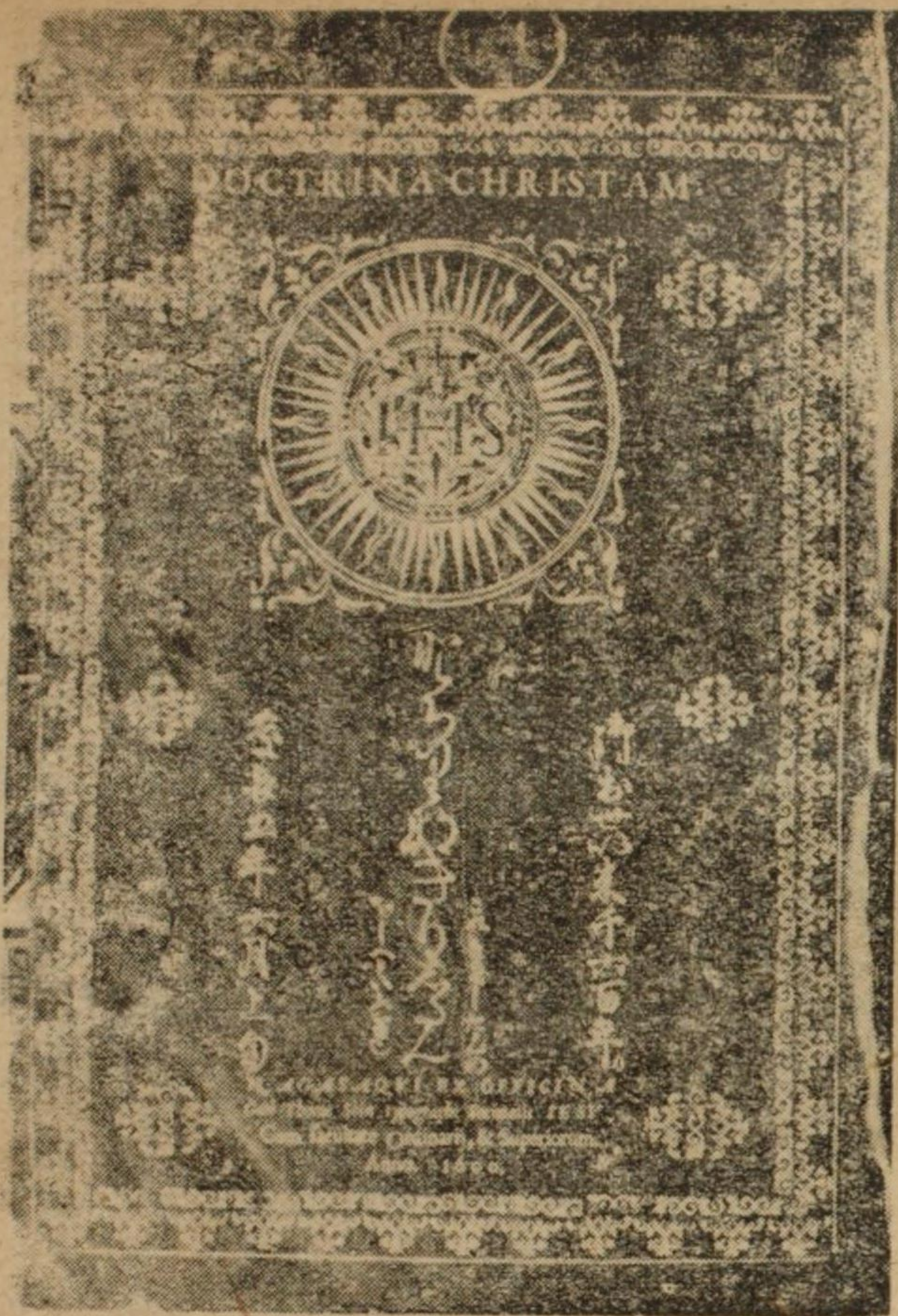
字書として新規軸を出した落葉集は、また印刷史上に一大進歩を促した。本文に使用されてゐる行草體の漢字活字の左右及び下方にある音訓別訓の平假名活字が小型で明瞭なこと、濁音符半濁音符を使用して發音を明白にしたこと、二字三字連續した活字を使用した等である。

本書は最初第一部第二部及び附録二篇を以て完備としたらしい。といふのは國盡の末行に 1598 とあるからだ。それから或期間を経て小玉篇が單獨に印刷せられたか、或は最初印刷の分に小玉篇を加へたものが再版せられたため、現存の本書に小玉篇の有る分と無い分との二種を生ずるに至つたと考へる。

(1) *Guia de Pecador*. 書名は罪人を善に導くの意、ドミニカン派の神父ルイス・デ・グラナダの名著を抄譯し、上卷二篇下卷二篇としたものである。上卷或は下卷を所藏する團體や個人は五六を超えるが、二卷を所持するは大英博物館だけである。但し同館藏本卷二の字集は紙數十丁であるが、バチカン文庫所藏の同一物は「一六〇六年日本語字書」とラテン語で記し、紙數十丁ある。本書が弘く行はれた本だけに、異版がありはせぬかといふ疑は容易に消えぬ。

(2) おらしよの翻譯付きりしたん教の條々 *Doctrinãe Christianãe ru dimenta, cum alijs pijs Orationibus*. これは昭和十五年十月南陽堂楠林主人が自分に示してくれた耶蘇會版で今の處世界一本だ。祈禱書と聖教要理とを併合したもので、後者に關する部分は國語に譯し、國字を以て記してあるが、祈禱文は一部はラテン語(發音を假名にて記し)國語を併用し、一部はラテン語のみを、一部は國語のみを使用してゐる。本書の舊藏者が何人であるかは楠林主人から直接聞くを得なかつた

が、嘗て主人が島原藩主松平忠房の藏書を買取つたことがあるから、多分當時入手したものであらう。紙面の一部を切断し、又は塗抹した形迹があるのは、愈々この推測を力づける。フレイトス氏の論文に長崎一六〇〇年十月廿五日付の手紙を引用し、「祈禱書が日本語とラテン語の發音で翻刻された」「切支丹を教へるに必要な書類が日本語で出版せられた」とあるは、正に本書を指すものであらう。



第三十五圖 「どちりな・きりしたん」扉
ファクシミリ(二分の一)

耶蘇會版の扉には刊地と刊行者とが明記されてゐるのが例だ。然るに刊地として天草が挙げられてゐるは(丸を最後とし、また刊行者として日本耶蘇會コレジョが挙げられてゐるのは(四)を最後とし、(五)(八)には長崎後藤登明宗印 Goto Thome Soin となつてゐる。この變更は何に因るか。以上三部がいづれも國字出版物であるだけに、耶蘇會印刷部の組織に變動があつたのではないかと考へる。シリング師の研究によると、一六〇〇年日本字の印刷機は耶蘇會の印刷所から離れ、名譽ある長崎市民の一信徒に、(二)日本の耶蘇會の上司が指定する書籍に限り印刷すること、(三)書籍の賣却により得る所の利益を收め、その印刷所を維持することの條件を以て委託されたとあります。

前文に名譽ある長崎市民の一信徒とあるは、言ふまでもなく後藤宗印のことで、通稱惣太郎、長崎開發の時島原町の頭人となり、慶長十一年には芝萊行、翌十二年には暹羅行の御朱印狀を得たといへば、相應の勢力資産を兼有したものと考へる。

登明は教名ト一メに漢名を宛てたまで、何時何人から受洗したかは不明。寛永三年長崎で教徒に對する大迫害が起つた時、江戸差立となり、翌年八十餘歳で病歿した。

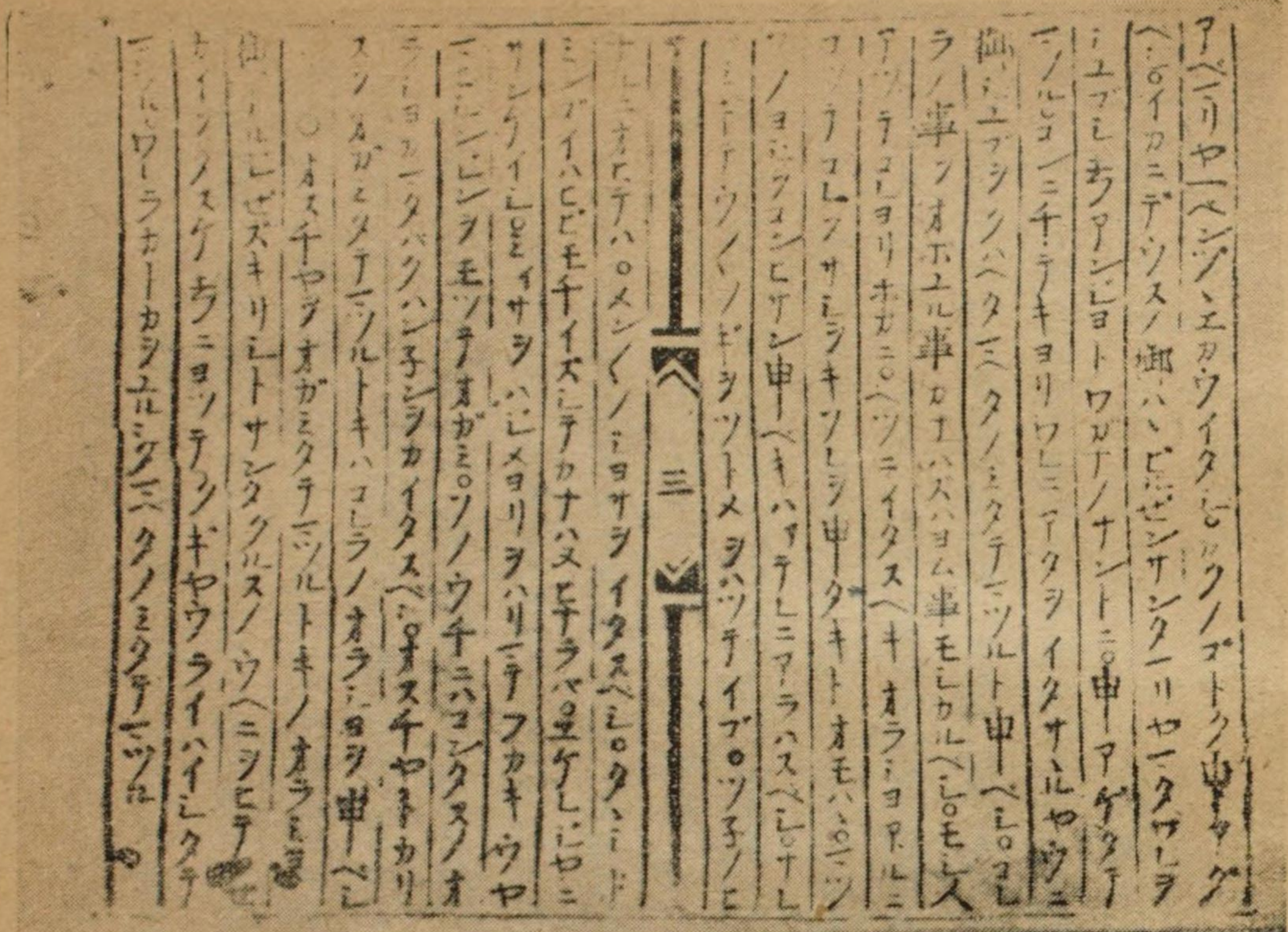
耶蘇會印刷所に従事する人々が、西洋輸入の印刷機と金屬製のローマ字活字とを見て、之を模造する考が起らなかつたとすれば、寧ろ不思議な位です。シリグ師は一五九九年二月二十日附、フランシスコ・ロドリゲスが耶蘇會總長に宛てた報告書中に、住院の同宿及び神弟は日本字二千箇の字母及び鑄型を調製したとある一節を發見せられた。これは大きな發見であるが、果して實用に供し得る程多數の活字が引續き製造せられたか、又前記日本字の印刷機は如何にして組立てられたか。將來の發見を期待するばかりである。

(二)ビドチリナ・キリシタン サトー氏は日本耶蘇會刊行書誌を出版した後、本書を水戸邸文庫で發見し、その全文と解説とを日本亞細亞協會報告に掲載せられた。一六〇〇年發行のローマ字本で(三)の増訂版。

(一七)どちりなきりしたん 同年發行の國字本で、(五)の増訂版。餘りに印刷面が美事なので、幾度も金屬活字印刷ではないかと疑つた位だ。

(一八)倭漢朗詠集卷之上 西班牙エスコリアル宮のサン・ロレンソ文庫にある。一九三〇年木村毅氏が本書を發見し、尋いで土井忠生氏の解説が藝文第二十二卷第二十二號に出た。全部で二十八葉、扉の上部に *Rozei-Zaffi* (朗詠雜筆) とある。扉の裏は朗詠集の目錄で本文は(ハ)朗詠集上卷(一六)(九)相歌並序、無常(二)雜筆抄(五)實語教(一)直實狀・返狀・義經申狀・眞宗皇帝外六人の勸學文等及び勸學歌等(三)で、最後に一六〇〇年とある。耶蘇會のセミナリオやコレジョで、國語及び國文の教科書として使用されたものと考へられる。

本書表紙の裏打に使用されてゐた二枚の片假名活字版を(三)一五九八年版サルバートル・ムンヂの表紙裏打に使用してある半葉づつ二枚のそれと比較した結果、耶蘇會版中一五九八年以前に漢字片假名交りの教理書が出版せられたことを明言し得



第三十六圖 倭漢朗詠集の表紙の裏打に使用されてゐた片假名活字版(二分の一)

るのみならず、恐らくそれが耶蘇會國字出版物の最初のものであらうと推定し得るに至つた。

朗詠集から出た二枚には版心に三及び五の丁付あり、單郭有界、半面十行、サルバートル・ムンヂから出た二片は左右半面十行づつで丁付は不明、前者と同一の文章はサルバートル・ムンヂの二十二丁表から廿四丁表までに見え、後者と同一の文章はバチカン本どちりいな廿二丁裏廿三丁表及び四十一丁の表裏にある。さすればこれ等の斷片の集合より成る片假名本は平假名本のサルバートル・ムンヂや、どちりいな前に出版されたものといへよう。片假名本が平假名本に先立つて出版せられたのが、我が國木活字印刷の順序であるからだ。

(一九)マヌエル・サ アフォリズム・コンフェッソリアルム Manuel Sa, S. J. Aphorismi Confessoriorum. 本書は一九三五年アンリー・ベルナル師が北堂圖書館で發見するまで一向知られなかつたもの。懺悔を聽く教師のために先賢の著述から集めた金言集で、一六〇〇年マドリッド版の翻刻である。著者は本書のために宗教裁判所に起訴せられ、一時本書は禁止目錄に登録されたといふ。

(10) 日葡辭書 *Vocabularis Linguae de Iapam*. 本書は主として(ラ・葡・日對譯辭書に法り、之に幾多の改良を加へ、外國教師等をして正確優秀な日本語を理解し、且つ使用せしむるを目的としてゐる。故に近畿に使用せられる言語を標準語とし、九州の方言と明白に區別してゐる。本書の著者をジョアン・ロドリゲスとする説は全く根據が無い。本書が耶穌會の諸神父諸神弟の協力になつたことは、扉に明記されてゐる。

本書の西班牙語譯は一六三〇年マニラで出版せられ、又一八六八年レオン・パジェスによつて佛蘭西語譯が出た。

(11) ジョアン・ロドリゲスの日本文典 *João Rodriguez, S. J. Arte da Lingoa da Iapam*. 本書は三卷より成り、一六〇四年印刷に着手し、一六〇八年を以て完成した。第一卷と第二卷の初の數章はセアルバレスのラテン文典に據つたことは明白で、それ以後の分は、全く著者ロドリゲスの創見に成る。彼は外國教師のために實用的文典を作ると同時に、理論的・科學的の精確さを維持することを努め、さうしてそれに成功したのであつた。

ロドリゲスは一五七六年十六歳で日本に來朝し、バリニヤノが遣歐使節を伴なつて秀吉に謁した時、通譯として一行中にあつた。彼が日本語に精通したことは通事 *Tsunu* といふ別名があること分る。一六一四年マカオに放逐せられ、一六二〇年同地で日本文典摘要を出版し、一六三四年を以て歿した。遺著に大部の日本教會史がある。

(12) ルイス・セルケイラ サクラメント提要 *Luis Cerqueira, S. J. Manuale ad Sacramenta Ecclesiae Ministranda*.

本邦布教の教師が、吉凶禍福種々の場合、信者に對して口にする祈禱文や、祝福の辭を集めたもの。本文に日本語又は葡語を用ひてある分は極めて僅少で、大部分はラテン語で記され、附録日本語の分を見よと参照が附けてある。然るに從來知られた四部の本書中に附録を有するものは一部も無かつたが、一九三六年ラウレス師が北堂圖書館を搜索して得た本書三部中、一部に三十三頁より成る附録があつた。「サクラメントとその外品々の義についての教 長崎日本耶穌會コレジョ一六〇五年」とある。所載の日本語式辭は合計十八通あるが、本文のラテン文と比較すると所謂自由譯であることが著しく眼を牽く。

附録の最後に一六〇五年とある。然し(二)無附録の分の數多いこと、(三)北堂で発見された附録の用紙が、本文と紙質及び大小を異にするのみならず、印刷に用ひられてゐる活字が本文と字形及び大小を異にしてゐることにより、假令本文と附録と同年の印刷にせよ、同時の印刷ではないと斷言する。

本書の印刷に朱墨兩様のインキが用ひられた。歐洲では珍しからぬことであるが、日本では破天荒である。

(13) スピリツアル修業 *Spiritual Xuguio*. 默想に關する(イ)ガスパー・ロアルトの著二篇(ロ)無名氏及び(ハ)ペドロ・ゴメスの著各、一篇を收む。然らば扉に記せる書名中の *Xuguanno* は數卷であるに相違なし。

本書の檢閲官パウロ・ナバロの審査の記に「(イ)は今再び日本語に譯された」とある。(ロ)も(イ)同様、從來寫本で行はれたものに訂正を加へ、(ハ)と合はせて出版したものではないか。(ロ)は一八七三年プチジャン師により、御婆志與と題し、石版で複製せられてゐる。

(イ)の第一篇に十五枚、第二篇に十八枚の銅版畫が有る筈だが、現在大浦天主堂にある本書には、第一篇の六枚を存するだけだ。一九四一年マニラのフランシスコ派修道院で本書が一部発見せられたが、それには挿畫が全部缺けてゐる。

(14) マヌエル・バレット フロスクリ *Manuel Barreto, S. J. Flosculi*. 善惡正邪に關する聖書や高僧先哲の金言をアルファベット順に集め、(三)同様豪華な裝釘を施したものが東洋文庫にある。

(15) こんてむつすむんち 京都原田アントニオの出版で、耶穌會版中唯一の特例である。亡友林若吉氏が北陸の某家から本書及び吉支丹の遺物若干を購入したは一九一八年であつたが、同氏歿後本書は神戸池長美術館の手に移つた。本書をローマ字版(二〇)と比較すると、第三卷第四卷において省略した箇處が相應あるが、その他は大した相違は無い。林氏が一九二一年本書の數葉をコロタイプ版に撮影し、發見の記事を添へて知友に配附せられた一冊は、我等にとつて良き記念品である。

(16) ルイス・デ・グラナダ ひですの經 一九〇七年ベルリンの書林パウエル・ゴツチャルクの目錄に掲載、シカゴの某氏

書名	卷冊數	刊年	刊地	出版者	用語	用字	所藏者
(一) サントスの御作業の内抜書 <small>（聖方新バウロ及びその子ヒデスの導師）</small> ルイス・デ・グラナダ著	二	一五九一	加津佐	日本耶蘇會コレジョ	國語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二) ヒデスの導師 <small>（信心錄）</small> ルイス・デ・グラナダ著	四	一五九二	天草	同	國語	ローマ字	ライデン大學圖書館
(三) ドチリイナ	一	一五九二	同	同	國語	ローマ字	東洋文庫
(四) どちらりいな	一	一五九二	同	同	國語	ローマ字	パチカン圖書館
(五) 〔洗禮と臨終の用意〕	一	一五九二	同	同	國語	ローマ字	大阪 飯島橋司
(六) 平家の物語 〔エソボのフアビユラス 金句集〕	二四	一五九三	同	同	國語	ローマ字	大英博物館
(七) ラテン文典マニエル・アルパレス著	三	一五九四	天草	日本耶蘇會コレジョ	ラテン語	ローマ字	アンジュリカ圖書館 エボラ圖書館
(八) ラ・葡・日對譯辭書	一	一五九五	同	同	ラテン語	ローマ字	ライデン大學圖書館 ポードレイ圖書館
(九) 精神の鍛鍊イグナチウス・ロヨラ著	一	一五九六	同	同	ラテン語	ローマ字	獨逸オッベルドルフ家
(一〇) コンテンツス・ムンデ <small>（トマス・ア・ケムビ コンベンヂウム・スピリバルト ロム著）</small>	一	一五九六	同	同	國語	ローマ字	ポードレイ圖書館 アンブロジーナ圖書館
(一一) チュアリス・ドチリネー <small>（マルチリス著）</small>	一	一五九六	同	同	ラテン語	ローマ字	北堂舊耶蘇會文庫
(一二) 〔サルバートル・ムンデ〕	一	一五九八	同	同	國語	ローマ字	カサナテンセ圖書館
(一三) 落葉集	一	一五九八	同	同	國語	ローマ字	大英博物館 ライデン大學圖書館

(一四) きやとへかとのルイス・デ・グラナダ著	二	一五九九	同	同	國語	ローマ字	大英博物館
(一五) おらしよの翻譯 付きりしたん教の條々	一	一六〇〇	長崎	後藤宗印	國語	ローマ字	天理圖書館
(一六) ドチリナ・キリシタン	一	一六〇〇	同	同	國語	ローマ字	水戸 徳川家
(一七) どちらりいな	一	一六〇〇	長崎	後藤宗印	國語	ローマ字	カサナテンセ圖書館
(一八) 倭漢朗詠集卷之上	一	一六〇〇	同	同	國語	ローマ字	エスコリアル宮文庫
(一九) アフォリズム・コン フエツソリオールム <small>（マヌエル・サ著）</small>	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	北堂舊耶蘇會文庫
(二〇) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館 エボラ公共圖書館等
(二一) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二二) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二三) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二四) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二五) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二六) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二七) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二八) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(二九) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(三〇) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(三一) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(三二) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(三三) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(三四) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(三五) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(三六) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館
(三七) 日葡辭書	一	一六〇三	同	同	ラテン語	ローマ字	ポードレイ圖書館

が買取つたといふ。前記の目録にある扉及び本文の覆刻を見ると、(三)のやうな省略本でなく、原本から譯したやうに思はれるが、説明に全紙二ツ折で九十五枚とあれば、原本一部の翻譯とも考へられる。米國へ渡つて以後本書の消息は一向不明ゆえ、今何とも決定し難い。

(三七)太平記抜書 サトー氏が金澤の書林で購入した六冊本、同氏から田中光顯氏に進呈し、田中氏から内野氏の手に移つたもの、扉を缺いてゐるので、出版の年代・場所・出版者等一切不明である。但し卷二以下に載する出版免許状には、檢閱官マヌエル・バレットの賛成意見と日本司教の許可状とを載せてゐる。バレットは一六二一年三月に歿してゐるが、日本最後の司教ルイス・ド・セルケイラは一五九八年八月五日から一六一四年二月廿日まで、日本最後の司教として長崎に居たのであるから、本書は一六一四年二月廿日以後に出版せられたものではない。或學者は司教セルケイラが出した最初の許可状は一六〇二年(一〇)、最後の許可状は一六〇五年(三)に與へられてゐるから、本書は一六〇二年以後二三年間に刊行せられたものだらうと推定せられたが、それは全く詮索の疎漏が生んだ誤つた結論で、セルケイラの許可状は一六〇七年(三)にも、一六一〇年(四)にも與へられてゐる。

京都中心の活字印刷術は朝鮮から傳はり、耶蘇會學林の活字印刷術は西洋から傳はり、兩者獨立の發達を遂げた。例へば前者に木版挿畫あれば、後者に銅版畫あり、後者に朱墨兩様の色刷があれば、前者には料紙に色紙を用ひ、更にその上に雲母模様を加へたものがある類で、一長一短容易に優劣を判定し難い。若し兩者が相接觸し、長短相補ふことが出来たなら、印刷文化の進歩は更に幾段を加へたらう。接觸の機會は原田アントニオが京都で「こんてむつすむんち」を印刷した時に到來したと考へるが、この好機を握むものはなかつた。さうして一方は元和寛永の隆盛期を過ぎて整版時代に入り、他方は幕府の耶蘇教迫害により、一六一一年以後印刷物を見ざるに至つた。

參考書

日本耶蘇會版に關する著書論文は近年著しく増加した。ここにはその主要なるもののみを擧げる。

- Satow, Sir E. M. *The Mission Press in Japan*. 1888. 同解説 二冊 大正十五年 明治文化研究會編
 Schilling Dorotheus, O. F. M. *Christliche Druckereien in Japan*, (Gutenberg-Jahrbuch. XV. Mainz, 1940.)
 Laures, Johannes, S. J. *Kirishitan Bunko*. Tokyo, 1940.
 Supplement to *Kirishitan Bunko*. Tokyo, 1941.
 Sande, Duarte de, S. J. *De Missione Legatorum Japonensium*. Macao, 1590. (Facsimile Repr. by Tōyō Bunko, 1935)
 天正遣歐使節見聞對話錄 濱田耕作外一氏閱、泉井久之助外三氏共譯 昭和十七年刊 東洋文庫
 こんてむつすむんち 一六一〇年 原田アントニオ刊(大正十年林若吉氏複印)
 初期耶蘇教徒編述日本語學書研究 ジョルダン・ア・デ・フレイタス著 岡本良知譯 昭和四年 日葡協會
 吉利支丹語學の研究 土井忠生 昭和十七年 靖文社
 切支丹典籍叢考 海老澤有道 昭和十八年 拓文堂
 耶蘇會版の中國字版を復刊し、或はローマ字版を國字に書改めたもので、近年出版せられた單行本は左の通り
 ぎやどべかどる 二冊 村岡典嗣 昭和二年(日本古典全集第二期)
 天草本平家物語 龜井高孝 昭和二年 岩波書店
 文祿舊譯天草本伊曾保物語 新村出 昭和三年 岩波書店
 文祿元年天草版吉利支丹教義の研究 橋本進吉 昭和三年 東洋文庫
 天草版金句集の研究 吉田澄夫 昭和十三年 東洋文庫

納本

書誌學

昭和二十七年十一月二十五日
昭和二十七年十一月三十日

印刷 發行
特別頒價 壹百貳拾圓

著者 幸田成友

版權所有 慶應義塾大學通信教育部

發行人 金澤冬三郎

印刷人 川口芳太郎

發行所

東京芝居區內三田豐岡町八番地
振替口座番號東京一五五四九七

慶應通信

#1E 10

10

